埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第89集

高畑遺跡（第２次）

2007.3

深谷市教育委員会

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第89集

高畑遺跡（第２次）

たかばたけいせき

2007.3

深谷市教育委員会

序

このたび、深谷市教育委員会では、「高畑遺跡（第２次）」の発掘調査報告書を刊行するはこびとなりました。

高畑遺跡の今回の調査では、古墳時代後期の集落跡が確認されました。高畑の地には土器片が多く分布していることから、大規模な集落跡が存在していることが予想されていましたが、氾濫土による堆積層の厚さから、これまで集落の実態は明らかにされていませんでした。今回、その一端が明らかになったことは、妻沼低地域の歴史を考える上で大きな成果となります。

現在､深谷市には縄文時代から近現代までの様々な遺跡が残されています。こうした遺跡は、一度消滅すると二度と見ることのできないものであり、これを保護し、後世に伝えていくことは私たちの大きな課題です。今回の発掘調査の成果を報告書というかたちにまとめ、広く市民の皆様にご紹介することで、郷土の歴史の古さやその優れた文化について、ご理解を深めていただきたいと存じます。また、この報告書が学術研究はもとより、学校、社会教育などの生涯学習活動を通じて、皆様が歴史を考えるための資料として役立てば、望外の喜びです。

今回の発掘調査および報告書作成にあたり深いご理解とご協力をいただきました関係者の皆様に心から感謝を申し上げまして序にかえます。

平成19年３月

深谷市教育委員会

教育長　　猪　野　幸　男

例　　言

１．本書は、埼玉県深谷市高畑字風原173 ～ 175番地における工場建設工事に伴う遺跡発掘調査報告書である。

２．発掘調査は、深谷市教育委員会が主体となり、調査費用は、株式会社新吉が負担した。

３．発掘調査期間は、平成18年11月21日～平成19年１月12日である。

４．発掘調査及び出土遺物の整理、報告書の執筆は知久裕昭が担当した。

５．遺跡の基準点測量及び遺構測量は、技研測量設計株式会社に委託した。

６．出土土器内の内容物分析は、株式会社パレオ・ラボに委託した。

７．出土遺物は、深谷市教育委員会が保管している。

８．発掘調査および報告書の作成にあたっては、次の諸氏から数々のご指導ご助言を賜った。

青木　克尚　　竹野谷俊夫　　鳥羽　政之　　富田　和夫　　松田　　哲　　宮本　直樹

村松　　篤　　（敬称略）

凡　　例

１．遺跡原点は、国家方眼座標Ｘ＝24200.000、Ｙ＝-49180.000である。また、各遺構図における方位指示は、全て座標北を示している。

２．遺物の実測図は、須恵器の断面を黒塗りで表現した。

３．遺物観察表の記載は、以下のとおりである。

・計測値の単位はcmである。

・器径、器高で（ ）を付したものは推定値を表す。

・種別は土師器をＨ、須恵器をＳとした。

・胎土は、肉眼で確認できた範囲での含有物を、以下のアルファベットで表した。

Ａ…白色粒子、Ｂ…赤色粒子、Ｃ…黒色粒子、Ｄ…石英、Ｅ…角閃石、Ｆ…片岩

Ｇ…白色針状物質、Ｈ…砂礫、Ｉ…雲母

４．遺物の注記、および原図における遺構の略号は、次のとおりである。

竪穴建物跡…ＳＪ、掘立柱建物跡…ＳＢ、円形周溝遺構…ＳＳ、土坑…ＳＫ、溝…ＳＤ

５．遺構・遺物実測図の縮尺は、適宜スケールで示した。

６．土層説明中の色調については、『新版標準土色帖』によった。

発掘調査の組織

調査主体者	深谷市教育委員会	教 育 長	猪野　幸男
		教育次長	古川　国康
		次　　長	中村　信雄
事務局	深谷市教育委員会生涯学習課	課　　長	澤出　晃越
		主幹兼課長補佐	武井　　茂
		課長補佐	大谷　住雄
		文化財保護係長	古池　晋禄
		主　　査	高村　敏則
		主　　任	畦元　直大
			荻野　直美
			知久　裕昭
		臨時職員	永井　智教
			吉野　智貴
			栗原貴世実

調査参加者

阿部ルリ子	伊藤　　昌	大澤　大美	大島　周子	栗原　慶多	小沼　和子
島崎　祐子	関口由美子	滝田　悦子	田代さち子	田中香代子	富田もえみ
根岸　紀次	浜野　光子	丸山　和枝	横山　明美	除村　敦子	吉野九の枝
吉野真由美					

目　　次

序

例言

発掘調査の組織

Ⅰ　発掘調査の経過…… 1

　1　調査に至る経過…… 1

　2　発掘調査の経過…… 1

Ⅱ　深谷市の地理的環境と周辺遺跡の様相…… 2

Ⅲ　遺構と遺物…… 6

　1　概要…… 6

　2　竪穴建物跡…… 6

　3　掘立柱建物跡……33

　4　円形周溝遺構……38

　5　土坑……38

　6　溝……38

Ⅳ　調査のまとめ……42

付編　土器内の内容物分析……46

報告書抄録

挿 図 目 次

第１図　高畑遺跡及び周辺の遺跡分布図……３
第２図　高畑遺跡の位置と発掘調査区……４
第３図　高畑遺跡第２次調査区全体測量図……５
第４図　第１号竪穴建物跡……７
第５図　第１号竪穴建物跡出土遺物(1)……８
第６図　第１号竪穴建物跡出土遺物(2)……９
第７図　第１号竪穴建物跡出土遺物(3)……10
第８図　第２・３号竪穴建物跡……11
第９図　第３号竪穴建物跡出土遺物……12
第10図　第４号竪穴建物跡……13
第11図　第４号竪穴建物跡出土遺物……14
第12図　第５・６号竪穴建物跡……15
第13図　第５号竪穴建物跡出土遺物……16
第14図　第６号竪穴建物跡出土遺物……17
第15図　第７号竪穴建物跡……17
第16図　第７号竪穴建物跡出土遺物……18
第17図　第８・12・13号竪穴建物跡……19
第18図　第８号竪穴建物跡出土遺物(1)……20
第19図　第８号竪穴建物跡出土遺物(2)……21
第20図　第12・13号竪穴建物跡出土遺物……22
第21図　第９号竪穴建物跡……23
第22図　第９号竪穴建物跡出土遺物……24
第23図　第10号竪穴建物跡……25
第24図　第10号竪穴建物跡出土遺物……26
第25図　第11号竪穴建物跡及び出土遺物……26
第26図　第14号竪穴建物跡……27
第27図　第14号竪穴建物跡出土遺物(1)……28
第28図　第14号竪穴建物跡出土遺物(2)……29
第29図　第15・16号竪穴建物跡……31
第30図　第15号竪穴建物跡出土遺物……32
第31図　第１号掘立柱建物跡……34
第32図　第２・３号掘立柱建物跡……35
第33図　第４号掘立柱建物跡……36
第34図　第５号掘立柱建物跡……37
第35図　掘立柱建物跡出土遺物……37
第36図　第１・２号円形周溝遺構……39
第37図　円形周溝遺構出土遺物……40
第38図　第１号土坑……40
第39図　第１・２号溝……41
第40図　土坑・調査区出土遺物……41
第41図　建物群の主軸方位……43

表　目　次

第１表　高畑遺跡及び周辺の遺跡一覧表……３
第２表　第１号竪穴建物跡出土遺物観察表(1)……10
第３表　第１号竪穴建物跡出土遺物観察表(2)……12
第４表　第３号竪穴建物跡出土遺物観察表……12
第５表　第４号竪穴建物跡出土遺物観察表……14
第６表　第５号竪穴建物跡出土遺物観察表……16
第７表　第６号竪穴建物跡出土遺物観察表……17
第８表　第７号竪穴建物跡出土遺物観察表……18
第９表　第８号竪穴建物跡出土遺物観察表(1)……20
第10表　第８号竪穴建物跡出土遺物観察表(2)……21
第11表　第12・13竪穴建物跡出土遺物観察表……22
第12表　第９号竪穴建物跡出土遺物観察表……23
第13表　第10号竪穴建物跡出土遺物観察表……25
第14表　第14号竪穴建物跡出土遺物観察表(1)……29
第15表　第14号竪穴建物跡出土遺物観察表(2)……30
第16表　第15号竪穴建物跡出土遺物観察表……32
第17表　掘立柱建物跡出土遺物観察表……36
第18表　円形周溝遺構出土遺物観察表……40
第19表　土坑・調査区出土遺物観察表(1)……40
第20表　土坑・調査区出土遺物観察表(2)……41

図 版 目 次

図版１　第１号竪穴建物跡　第１号竪穴建物跡カマド　第１号竪穴建物跡土層断面　第２～６号竪穴建物跡
第２号竪穴建物跡　第３号竪穴建物跡　第３号竪穴建物跡カマド　第４～６号竪穴建物跡

図版２　第４号竪穴建物跡　第４号竪穴建物跡カマド、台状遺構　第４号竪穴建物跡カマド遺物出土状況
第４号竪穴建物跡台状遺構⑴　第４号竪穴建物跡台状遺構⑵　第４号竪穴建物跡貯蔵穴
第５・６号竪穴建物跡　第７号竪穴建物跡

図版３　第８・12・13号竪穴建物跡　第８・13号竪穴建物跡　第８号竪穴建物跡遺物出土状況
第８・12・13号竪穴建物跡土層断面　第12号竪穴建物跡カマド⑴　第12号竪穴建物跡カマド⑵
第９号竪穴建物跡　第10号竪穴建物跡

図版４　第10号竪穴建物跡Ｐ２　調査区南東部（東から）　調査区南東部（南から）　第14号竪穴建物跡⑴
第14号竪穴建物跡⑵　第14号竪穴建物跡カマド　第15・16号竪穴建物跡
第15号竪穴建物跡カマド

図版５　第16号竪穴建物跡カマド　第１号掘立柱建物跡　第２・３号掘立柱建物跡　第２号掘立柱建物跡
第３号掘立柱建物跡　第４号掘立柱建物跡　第５号掘立柱建物跡　第１・２号円形周溝遺構

図版６　第１号円形周溝遺構Ｐ１⑴　第１号円形周溝遺構Ｐ１⑵　第１号円形周溝遺構Ｐ３⑴
第１号円形周溝遺構Ｐ３⑵　第１号土坑　第１・２号溝　調査風景⑴　調査風景⑵

図版７　第５図１（ＳＪ１）　第５図３（ＳＪ１）　第５図４（ＳＪ１）　第５図５（ＳＪ１）
第５図６（ＳＪ１）　第５図７（ＳＪ１）　第５図８（ＳＪ１）　第５図９（ＳＪ１）
第５図10（ＳＪ１）　第５図11（ＳＪ１）　第５図12（ＳＪ１）　第５図13（ＳＪ１）
第５図14（ＳＪ１）　第５図15（ＳＪ１）　第５図16（ＳＪ１）　第５図17（ＳＪ１）
第５図18（ＳＪ１）　第５図20（ＳＪ１）

図版８　第５図21（ＳＪ１）　第５図22（ＳＪ１）　第５図23（ＳＪ１）　第５図24（ＳＪ１）
第５図25（ＳＪ１）　第５図26（ＳＪ１）　第５図27（ＳＪ１）　第６図28（ＳＪ１）
第６図29（ＳＪ１）　第６図30（ＳＪ１）　第６図31（ＳＪ１）

図版９　第６図32（ＳＪ１）　第６図33－１（ＳＪ１）　第６図33－２（ＳＪ１）　第６図34（ＳＪ１）
第７図35（ＳＪ１）　第７図36（ＳＪ１）　第11図２（ＳＪ４）　第11図３（ＳＪ４）
第11図６（ＳＪ４）　第11図８（ＳＪ４）　第13図７（ＳＪ５）　第13図11（ＳＪ５）

図版10　第13図14（ＳＪ５）　第13図15（ＳＪ５）　第14図１（ＳＪ６）　第16図６（ＳＪ７）
第16図９（ＳＪ７）　第18図１（ＳＪ８）　第18図５（ＳＪ８）　第18図８（ＳＪ８）
第18図11（ＳＪ８）　第18図14（ＳＪ８）　第18図16～19（ＳＪ８）　第18図20（ＳＪ８）
第22図１（ＳＪ９）　第22図２（ＳＪ９）　第22図３（ＳＪ９）　第22図６（ＳＪ９）
第22図７（ＳＪ９）

図版11　第22図８（ＳＪ９）　第22図10（ＳＪ９）　第22図12（ＳＪ９）　第22図13（ＳＪ９）
第22図14（ＳＪ９）　第22図15（ＳＪ９）　第24図１（ＳＪ10）　第20図３・４（ＳＪ13）
第27図１（ＳＪ14）　第27図２（ＳＪ14）　第27図５（ＳＪ14）　第27図７（ＳＪ14）
第27図11（ＳＪ14）　第27図13（ＳＪ14）　第27図19（ＳＪ14）

図版12　第27図21（ＳＪ14）　第27図22（ＳＪ14）　第27図29（ＳＪ14）　第28図35～43（ＳＪ14）
第30図３（ＳＪ15）　第30図４（ＳＪ15）　第30図８（ＳＪ15）　第30図10（ＳＪ15）
第30図12（ＳＪ15）　第30図14（ＳＪ15）　第30図15（ＳＪ15）　第37図２（ＳＳ１）
第37図３（ＳＳ１）　第40図１・６～９（土坑・調査区）

Ⅰ　発掘調査の経過

1　調査に至る経過

深谷市は、埼玉県北部に位置し、北を群馬県との境に接する。平成18年１月１日に旧岡部町、旧川本町、旧花園町と合併し、総面積137.58㎢、人口約146,500人となった。当地は農業、工業ともに盛んで、深谷ネギの産地としても有名である。歴史的にも、後期旧石器・縄文・弥生・古墳時代を始め、幡羅郡家や榛沢郡家が造られそれぞれ郡の中心として機能していた奈良・平安時代、また百済木遺跡で豪族が居宅を営んだ奈良時代、深谷上杉氏の拠点であった室町･戦国時代、宿場町として栄えた江戸時代、そして近・現代まで多くの遺跡、文化財が残される。鎌倉時代の有力御家人であった畠山重忠の本拠地として、或いは近代日本経済界を築いた渋沢栄一の生地としても良く知られる。

高畑遺跡は、ＪＲ深谷駅より北へ約2.8km、妻沼低地に立地する。標高は約35m、遺跡の範囲は約59万㎡と推定される。これまでに遺跡の北西端部が調査され、古墳時代～中世にかけての溝５条、河川跡等が確認されている。また、下水道工事時に、地下１m以上の深さから、古墳時代後期の土師器が出土している。しかし、広大な遺跡の実態はほとんど明らかになっていないといえる。そのため、深谷市教育委員会では、高畑遺跡周辺で事前調査等を行ってきた。

平成18年９月７日、高畑遺跡地内の深谷市高畑字風原173番地他で工場建設工事の実施が明らかとなった。深谷市教育委員会は施工主である株式会社新吉との協議を経て、平成18年10月に当該地の確認調査を実施した。調査の結果、竪穴建物跡や土師器が多く検出された。この結果を踏まえ、発掘調査の実施について、市教育委員会と株式会社新吉とで協議を行い、工事により埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲について、市教育委員会が主体となって発掘調査を実施することで合意した。

市教育委員会は直ちに、文化財保護法第99条の規定に基づき、埋蔵文化財発掘調査通知（平成18年11月20日付深教生発第856号）を提出し、準備に入った。

2　発掘調査の経過

工場建設工事に伴う、高畑遺跡第２次発掘調査は、平成18年11月21日～平成19年１月12日にかけて行なわれた。

11月15日より表土剥ぎを行い、21日より遺構の掘り下げを開始した。遺構確認の大部分は、表土剥ぎと併行して行なったため、調査初日より竪穴建物跡の掘り下げは順調に行なわれた。12月上旬には、南東部の浄化槽を設置する箇所に調査区を拡大した。南東の調査区からは、小規模な総柱式掘立柱建物跡が５棟確認され、また、重なり合う２基の円形周溝遺構が確認された。

全体の調査面積は約900㎡であり、竪穴建物跡16棟、全て総柱式の掘立柱建物跡５棟、円形周溝遺構２基、土坑１基、溝２条等が確認された。遺構は６～７世紀のものがほとんどで、この時期の大規模集落の一端が垣間見えた感がある。南東部から、倉庫と考えられる総柱式掘立柱建物跡が複数確認されたことから、この遺跡が居宅的要素を持っていることが想定される。高畑遺跡の重要性を示す成果と言えよう。

今回の発掘調査を行うにあたり、深いご理解とご協力をいただいた方々をはじめ、この文化遺産を記録保存し、後世に伝える作業のためにご協力いただいた全ての方々に敬意を表する。

Ⅱ　深谷市の地理的環境と周辺遺跡の様相

深谷市の地形を概観すると、東西に走るＪＲ高崎線付近を境として、南側に櫛挽台地が広がり北側には妻沼低地が形成されている。櫛挽台地は荒川によって作られた古い扇状地が浸食されてできた沖積台地で、寄居付近を頂部としている。妻沼低地は、利根川の自然堤防及び沖積低地であり、加須低地と並び利根川の中流低地の一つに数えられる。

櫛挽台地は構造的には、北西側の武蔵野面に比定される櫛挽面（櫛挽段丘）と、南東側の立川面に比定される寄居面（御稜威ヶ原段丘）とで段丘状に形成されている。櫛挽面はほぼＪＲ高崎線沿いの崖線で比高差５～10mをもって妻沼低地と接しているが、寄居面は高崎線より北へ1.5～1.8kmほど延びていて、比高差２～５ｍをもって妻沼低地と接している。接線付近での標高は櫛挽面が40～50m、寄居面が32～36m、妻沼低地が30～31mである。櫛挽面は標高70m付近より発する上唐沢川、押切川、戸田川、唐沢川等が北流していて、櫛挽面北端部は南北に台地を開析する浅い谷が発達したものと考えられる。発掘調査で埋没谷が検出されることも多い。また、先端部には所謂先端湧水と認められる池等もある。寄居面にはこうした谷筋はほとんど認められず、妻沼低地と接する台地先端部を除き、水利上は生活に不向きだったと考えられる。

妻沼低地は、利根川右岸に広がる肥沃な低地である。南は熊谷市付近を境として秩父山塊に連なる丘陵や台地と大宮台地に挟まれた荒川低地に続き、東は加須低地に接する。妻沼低地の南端に櫛挽面、東に寄居面を控える一角に深谷市の中心部があり、周辺では住宅地が増加している。妻沼低地は現在ではかなり平坦であるが、利根川の氾濫や流路の変遷等により、自然堤防が発達したものと考えられる。

深谷市内で確認されている旧石器時代の遺跡は多くはないが、荒川右岸の江南台地上には、細石刃や彫刻刀形石器が出土した白草遺跡等がある。旧深谷市域では旧石器はほとんど出土しておらず、西大沼の花小路遺跡と東方の幡羅遺跡で出土した２点のみである。

縄文時代では、台地の先端部に当たる東方城跡で草創期の可能性がある尖頭器が出土している。また、上野台の小台遺跡からは、早期押型文土器や前期黒浜式土器、諸磯式土器の破片が出土している。上野台の割山遺跡からも、諸磯ａ式土器が多く出土する。

縄文中期、特に後半になると遺跡数やその規模は増大する。小台遺跡は、多量の土器や石器を包含する埋没谷を中心に住居や土坑群が展開する。遺構は中期中葉～後期前葉までのものがこれまでに検出されている。小台遺跡と時期的に重なる遺跡は数多く、小河川を挟んで小集落が多数分布していたか、集落が移動していたものと思われる。

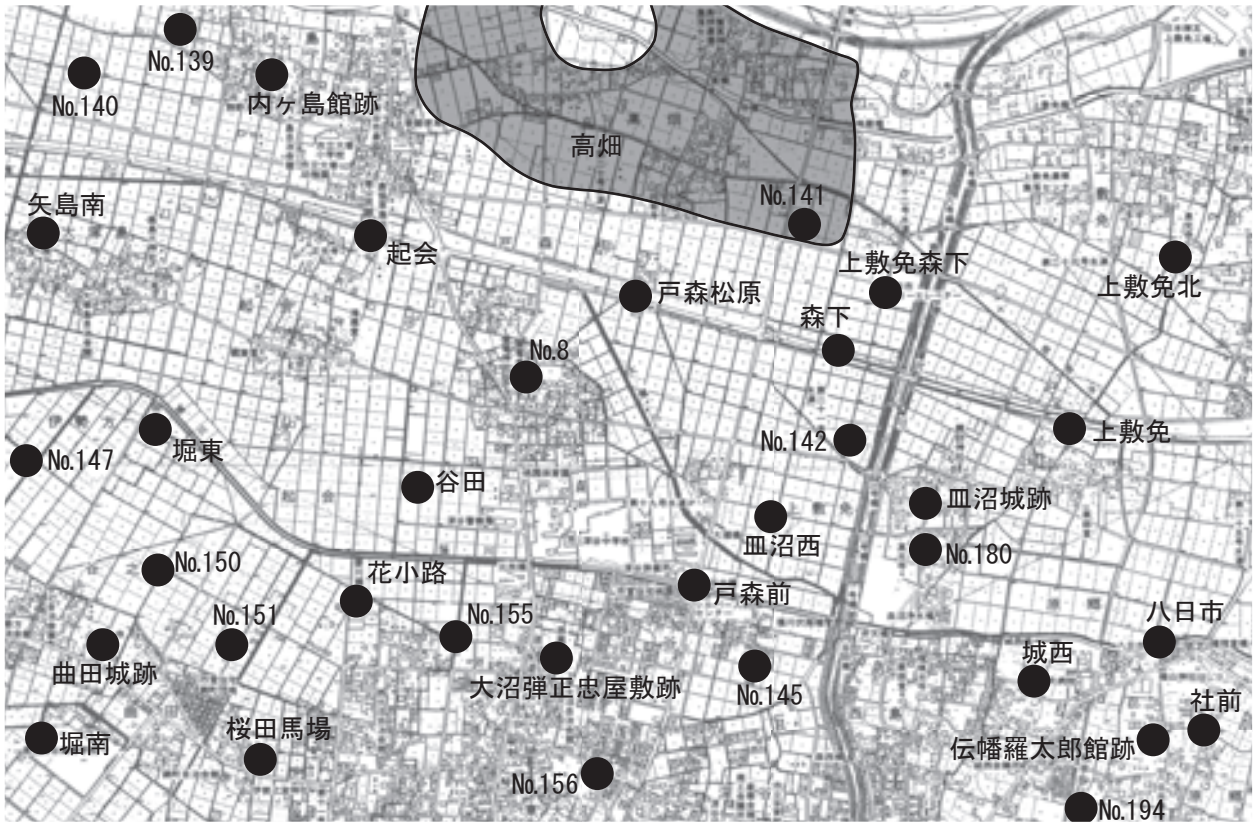
縄文後・晩期になると、生活域の中心は櫛挽台地から妻沼低地へと移っていく。上敷免遺跡では、包含層から在地の後・晩期の資料に混じり、東海系条痕文土器が検出されたり、埼玉県では初の遠賀川系の壷が検出されるなど、他地域との交流を考えさせられる。

弥生時代に入ると、上敷免遺跡で中期の再葬墓と、住居跡が確認されている。また、上敷免森下遺跡で中期の再葬墓、宮ヶ谷戸遺跡で中期の住居跡が確認されている。岡の四十坂遺跡も該期の代表的な遺跡である。

古墳時代前・中期の集落は、森下遺跡や下手計西浦遺跡、皿沼西遺跡等で確認されており、当該地での調査例が増加しつつある。

古墳時代後期前半になると遺跡数は爆発的に増加し、妻沼低地の自然堤防上に大規模な集落が営まれる。この時期に小規模な円墳が数多く造られるようになり、櫛挽台地の先端部に形成される木の本古墳群や白山古墳群等の古墳群が形成される。

７世紀頃には上敷免遺跡等それまでの大集落は縮小傾向になり、代わって宮ヶ谷戸遺跡や東川端遺跡、清水上遺跡等、幡羅郡家と推定される幡羅遺跡に近い位



第１図　高畑遺跡及び周辺の遺跡

遺跡名称	時　　代	遺跡名称	時　　代
高畑	弥生後期～中世	深谷城跡	古墳前期、平安、中世、近世
矢島南	古墳後期～平安	城西	縄文前期・中期、古墳後期～平安
内ヶ島館跡	平安	八日市	縄文後期、古墳後期～平安、中世
起会	古墳中・後期～平安	伝幡羅太郎館跡	中世
堀東	縄文中期・後期、弥生前期・中期、平安	社前	縄文前期・中期、古墳後期～平安
谷田	平安	No.8	古墳後期～平安
曲田城跡	中世	No.139	古墳後期～平安
堀南	縄文前期、古墳前期・後期～平安	No.140	古墳後期～平安
桜田馬場	中世	No.141	古墳後期～平安
花小路	古墳後期、平安、中世	No.142	古墳後期～平安
森下	古墳前期～平安	No.145	古墳後期～平安
戸森松原	古墳前・中期、奈良、平安	No.147	古墳後期～平安
上敷免森下	弥生中期、古墳後期	No.150	縄文後期、古墳後期～平安
上敷免北	縄文後期・晩期、古墳後期～平安	No.151	古墳後期～平安
上敷免	縄文中～晩期、弥生、古墳後期～平安	No.155	縄文中期・後期、古墳後期～平安
皿沼城跡	中世	No.156	縄文、古墳後期～平安
皿沼西	縄文後期、弥生、古墳前・中期、平安	No.180	弥生中期、古墳後期～平安
戸森前	古墳前期・中期・後期、奈良、平安	No.194	古墳後期
大沼弾正忠屋敷跡	中世	No.195	古墳後期

第１表　高畑遺跡及び周辺の遺跡一覧表

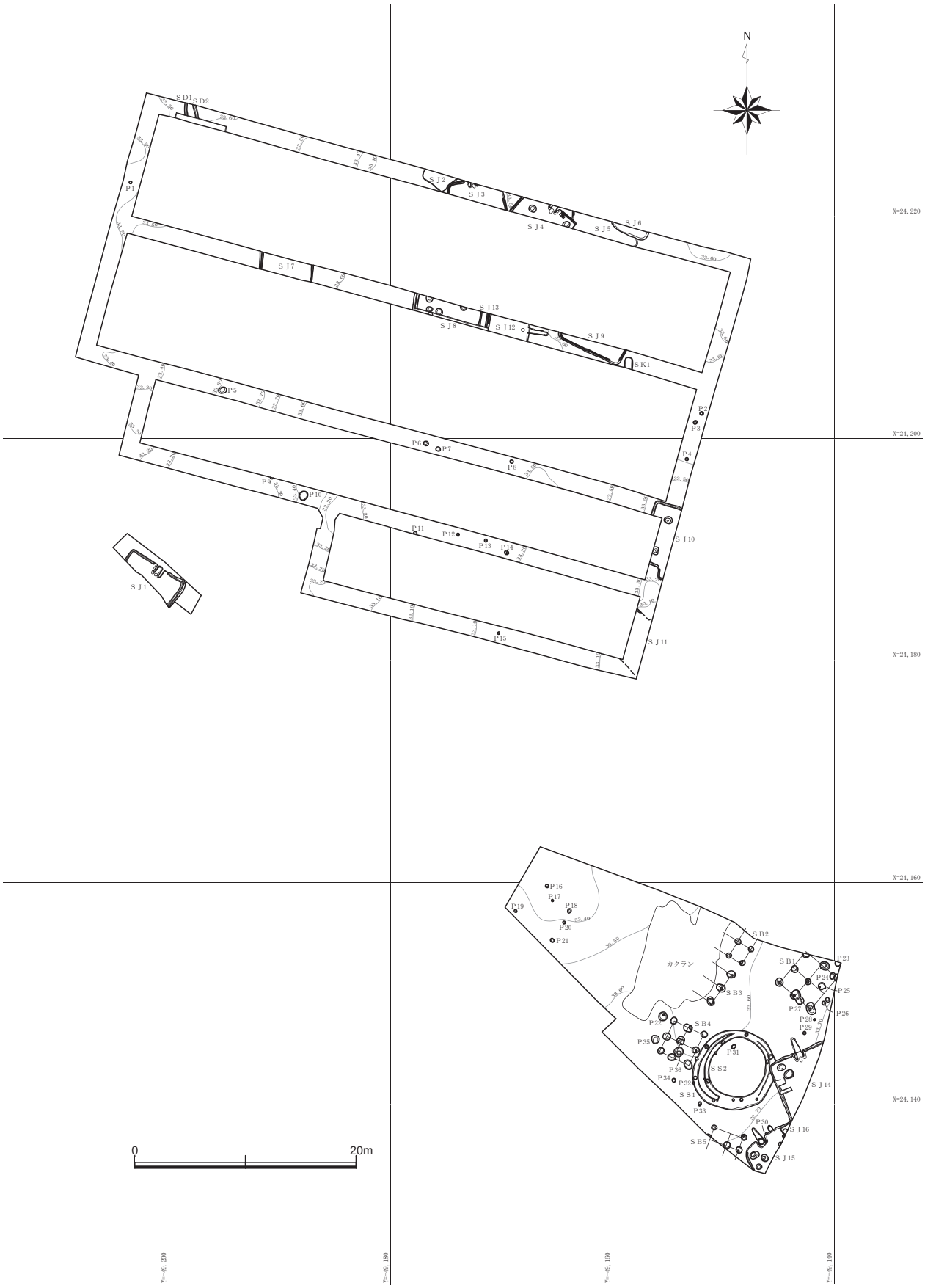
第２図　高畑遺跡の位置と発掘調査区

置の集落規模が拡大する。律令期には、深谷市の東部は幡羅郡、西部は榛沢郡、南部は男衾郡に属すると考えられる。榛沢郡の郡家正倉跡は岡の中宿遺跡で発見されている。幡羅郡家跡である東方の幡羅遺跡は、正倉や館等の遺構がこれまでに確認され、更にその範囲、内容を確認するための調査が継続中である。また、新屋敷東遺跡からは、正倉別院の可能性のある大型建物跡が検出されている。

平安時代には、深谷城跡、堀南遺跡、花小路遺跡等、台地の先端部に新たに集落が営まれるようになる。これらの集落は、榛沢郡と幡羅郡を結ぶ水路の可能性が指摘される福川の流域に位置する。

平安時代末期以降は、猪俣党武士団の居館が各地に出現する。代表的なのは、県指定史跡にもなっている人見館跡である。それに近接する吹張遺跡でも、館等の施設跡が検出されている。また、鎌倉街道上道の跡が、旧川本町域から旧花園町域に残る。そして室町時代以降は深谷上杉氏の本拠地となる。深谷上杉氏は、当初庁鼻和城に居を構えたと言われるが、５代目房憲の時に、古河公方勢力との戦闘に備え、より堅固な深谷城に移ったとされる。深谷城跡の北東約１kmには、深谷上杉氏の宿老岡谷香丹が築いたと言われる皿沼城跡があり、北方の守りを堅固なものにしている。また、香丹が隠居後に移ったとされる曲田城跡が北西にある。東に約３kmの台地の先端部には東方城跡がある。周辺には他に家臣の館が分布していたと思われ、南方約1.8kmには、家臣の館跡である秋元氏館跡、南西約2.8kmには、古河公方勢力を牽制し人見地域を防衛するために築かれたと考えられる館跡が検出された押切遺跡が存在する。また、割山西遺跡では、伝承等が一切残っていないが、方形の区画溝が検出され、館跡と考えられている。仙元山南麓の押切遺跡西隣に位置する昌福寺は、房憲が創建したとされる。

江戸時代になると、深谷城は程なく廃城となり、深谷の大部分は天領となる。また、岡部には岡部藩があり、陣屋が構えられた。



第３図　高畑遺跡第２次調査区全体測量図

Ⅲ　遺構と遺物

１　概要

今回の調査で確認された遺構は、竪穴建物跡16棟、掘立柱建物跡５棟、円形周溝遺構２基、土坑１基、溝２条である。遺構は６～７世紀のものがほとんどで、掘立柱建物跡は全て２×２間程度の総柱建物跡である。２基の円形周溝遺構は、直径がわずかに異なるが、同位置に構築される。周溝底面にあるピット内からは、土師器甕が出土しており、特筆される。

なお、現地表面から遺構確認面までの深さは約100～120cm、確認面は黄灰色の粘質土である。

２　竪穴建物跡

第１号竪穴建物跡（第４～７図、第２～３表）

調査区西部に位置し、北東半部が確認された。平面形態は方形で、一辺約６ｍを測る。主軸方位はＮ－33°－Ｅである。床面はほぼ平坦で、確認面からの深さは80cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

カマドは北東壁ほぼ中央に構築される。袖は地山の削り出しで造られる。燃焼部は幅45cm、奥行90cmで底面は赤く焼けていた。奥壁はほぼ垂直に立ち上がり、燃焼部側壁は赤く焼けて硬化していた。煙道は確認できなかった。

壁溝は幅約15cm、床面からの深さ５～10cmで、ほぼ全周するとみられる。貯蔵穴は確認されなかった。

遺物はカマド内及びその周辺から多く出土した。カマドの右脇からは、14個体もの坏がまとまって出土している。図示できた遺物は、第５図１～第７図36である。全て土師器で、１～21は模倣坏、22～24は椀、25～27は坩、28は鉢、29～35は甕である。34・35はハケメ調整がされる。36は甑と思われる。

遺構の時期は、６世紀前半と推定される。

第２号竪穴建物跡（第８図）

調査区北部に位置し、南東部が確認された。平面形態は方形で、一辺約2.5mを測る。主軸方位はＮ－40°－Ｅである。床面はほぼ平坦で、確認面からの深さは20cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

カマド、貯蔵穴、壁溝は確認されなかった。

図示できる遺物は出土しなかった。

第３号竪穴建物跡（第８・９図、第４表）

調査区北部に位置する。平面形態は方形で、東西軸約５ｍを測る。主軸方位は、Ｎ－15°－Ｗである。床面はほぼ平坦で、確認面からの深さは50cmを測る。

カマドは北壁ほぼ中央に構築される。袖は地山の削り出しで造られる。燃焼部は幅45cmで、奥壁や煙道は調査区外にある。燃焼部の底面は赤く焼けていた。

壁溝は幅10～15cm、床面からの深さ５cmで、東壁南半、北壁、西壁で確認された。貯蔵穴は、調査部分からは確認されなかった。

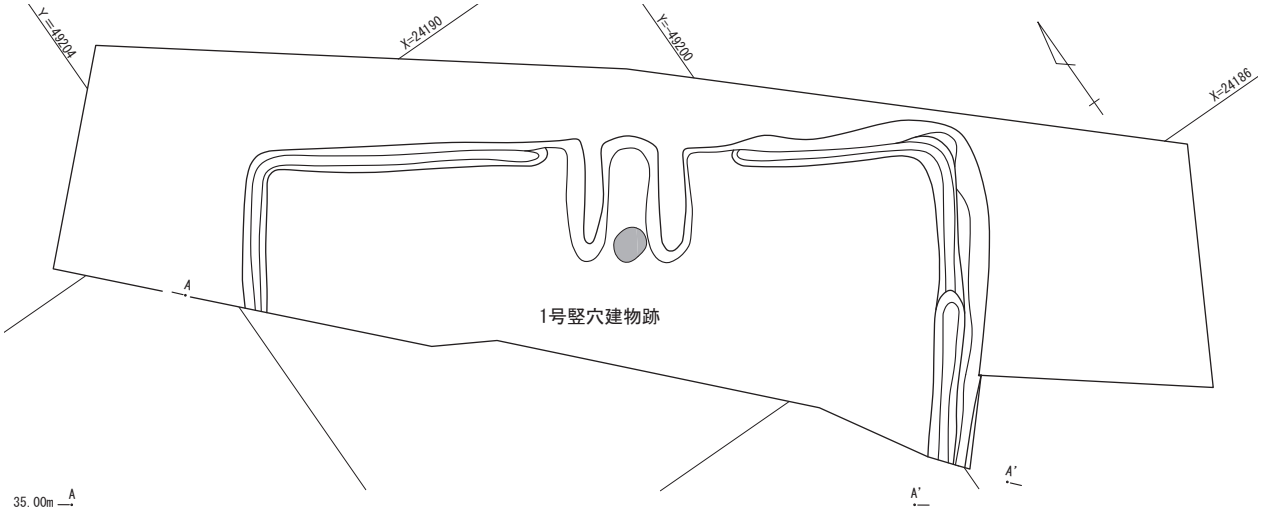
図示できた遺物は、第９図１～３である。全て土師器で、１・２は有段口縁坏、３は内面がハケメ調整される甕である。

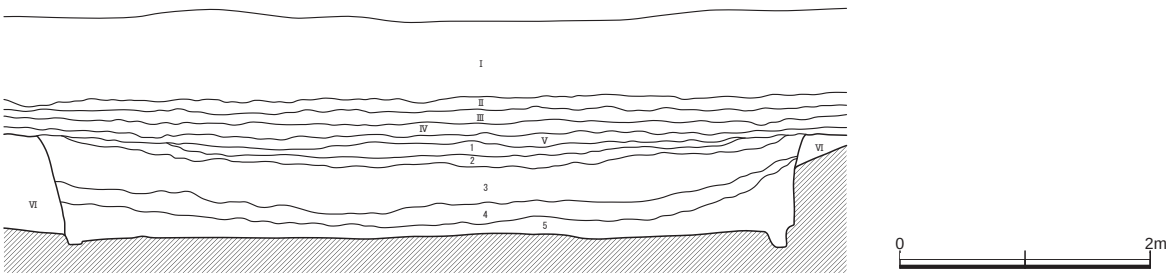
遺構の時期は、７世紀と推定される。

第４号竪穴建物跡（第10・11図、第５表）

調査区北部に位置し、第５号竪穴建物跡に切られる。平面形態は方形で、一辺5.3mを測る。主軸方位はＮ－40°－Ｅである。床面はほぼ平坦で、掘り込み面からの深さは35cmを測る。壁は斜めに立ち上がる。

カマドは北壁ほぼ中央に構築される。袖は地山の削り出しで造られる。燃焼部は幅45cmで、奥壁や煙道は調査区外にある。燃焼部の底面は赤く焼けていた。壁溝は幅10～15cm、床面からの深さ５～10cmで、南東壁を除いて確認された。貯蔵穴は南東隅から確認された。直径60cm、床面からの深さ50cmを測

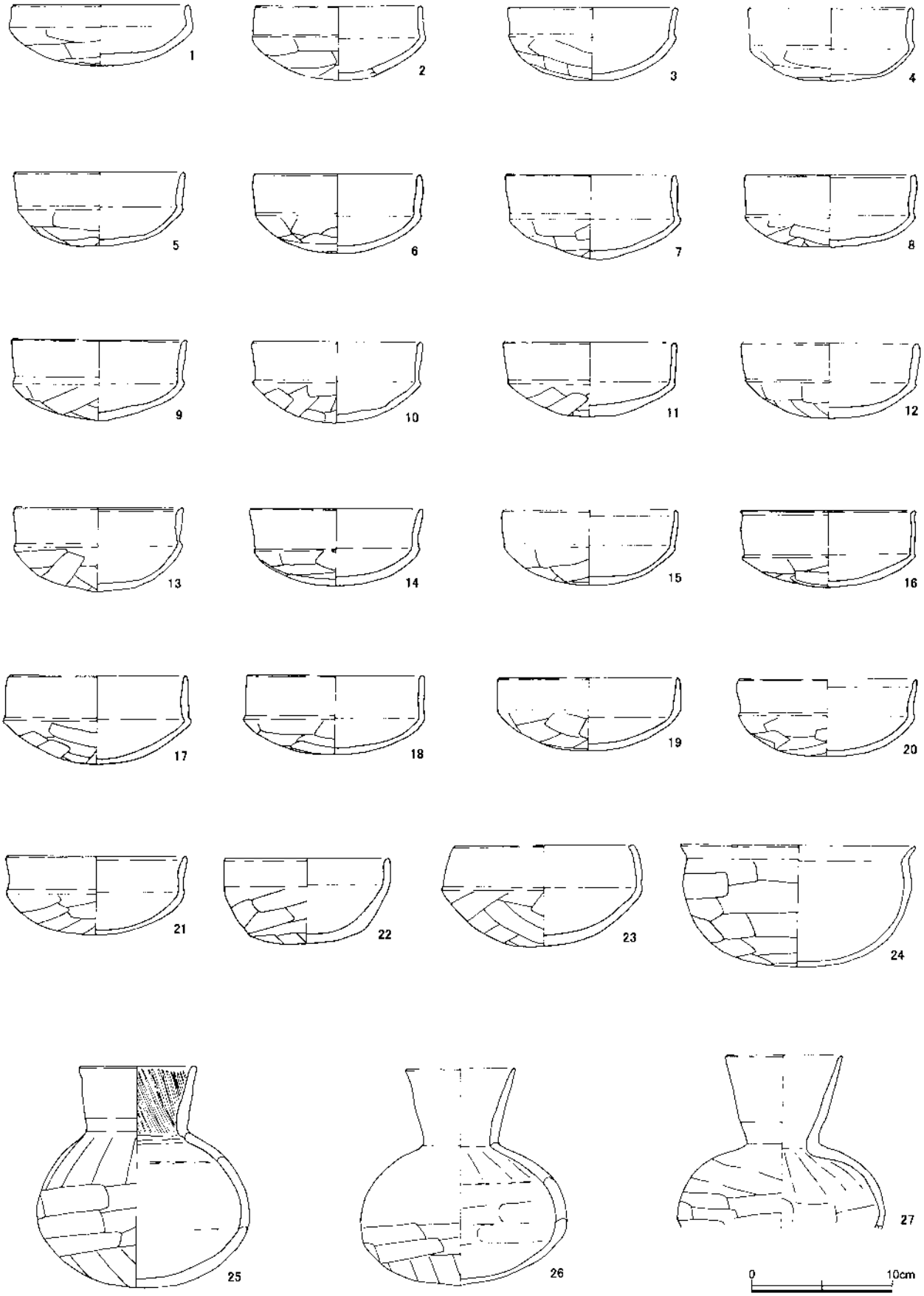




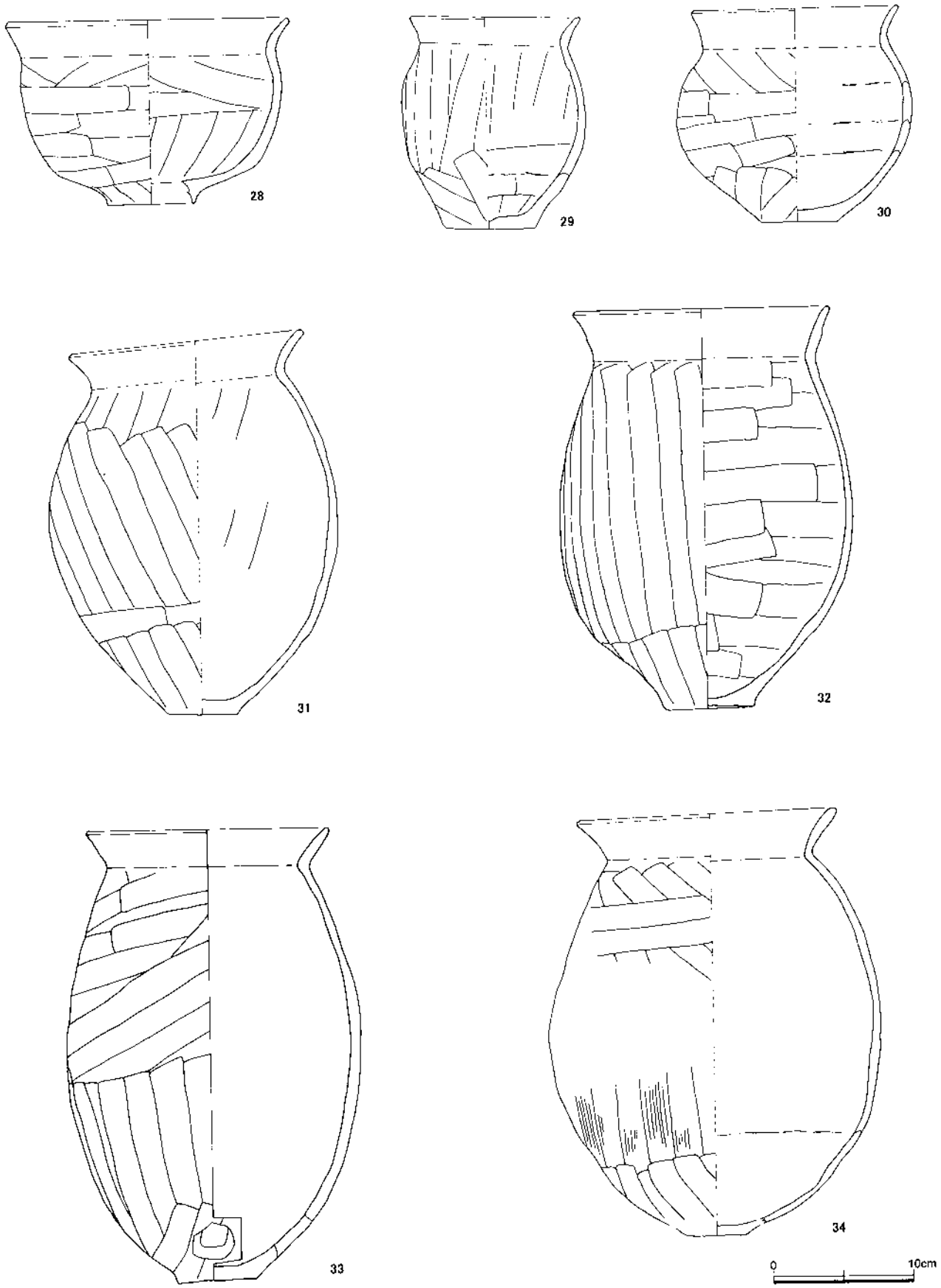
Ⅰ層　ｵﾘｰﾌﾞ褐色土（Hue2.5Y4/4）　耕作土。
Ⅱ層　黄灰色土　（Hue2.5Y5/1）　浅間Ｂ軽石を含む。
Ⅲ層　黒褐色土　（Hue2.5Y3/1）　黄褐色土粒を含む。
Ⅳ層　黄褐色土　（Hue2.5Y5/4）　鉄分を多く含む。
Ⅴ層　灰色土　（Hue 5Y 4/1）　鉄分・マンガンを多く含む。
Ⅵ層　黄灰色土　（Hue2.5Y4/1）　炭化粒をわずかに含む。
Ⅶ層　黄褐色土　（Hue2.5Y5/3）　炭化粒をわずかに含む。
Ⅷ層　黄褐色土　（Hue2.5Y5/4）

１層　黒褐色土　（Hue2.5YR3/2）　焼土粒・炭化粒を含む。
２層　黒褐色土　（Hue2.5YR3/1）　焼土粒・炭化粒を多く含む。
３層　暗ｵﾘｰﾌﾞ褐色土（Hue2.5Y 3/3）　焼土粒・炭化粒を少し含む。
４層　黒褐色土　（Hue2.5Y 3/2）　炭化粒を多く含む。焼土粒を少し含む。
５層　ｵﾘｰﾌﾞ褐色土（Hue2.5Y 4/4）　炭化粒をわずかに含む。

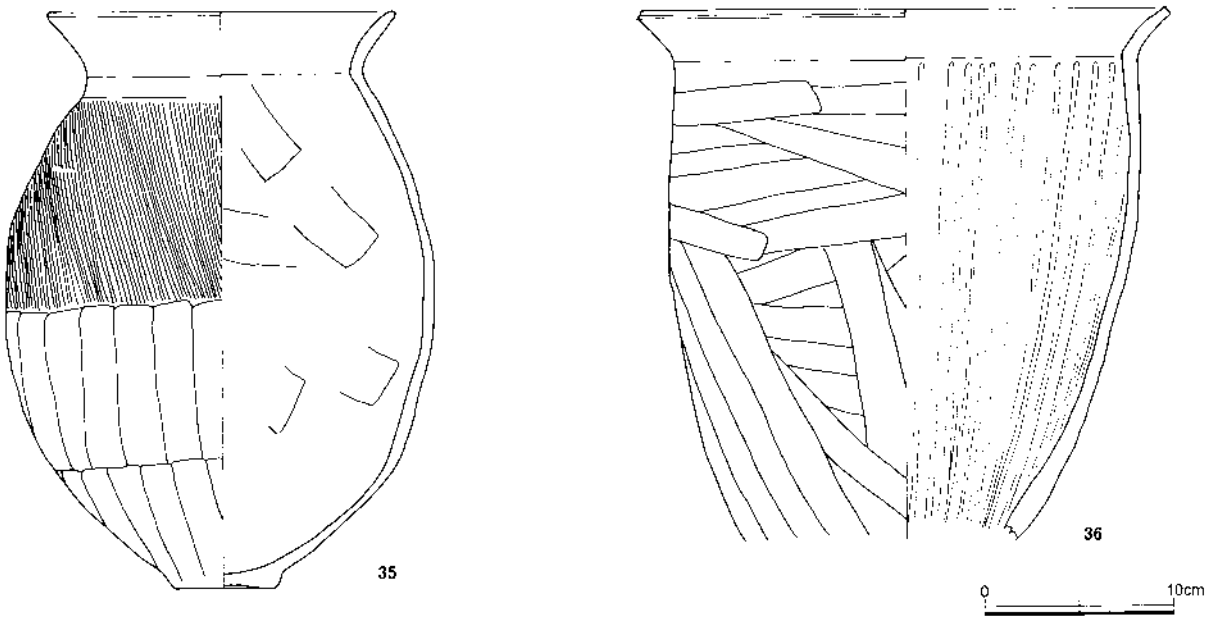
第４図　第１号竪穴建物跡



第５図　第１号竪穴建物跡出土遺物(1)



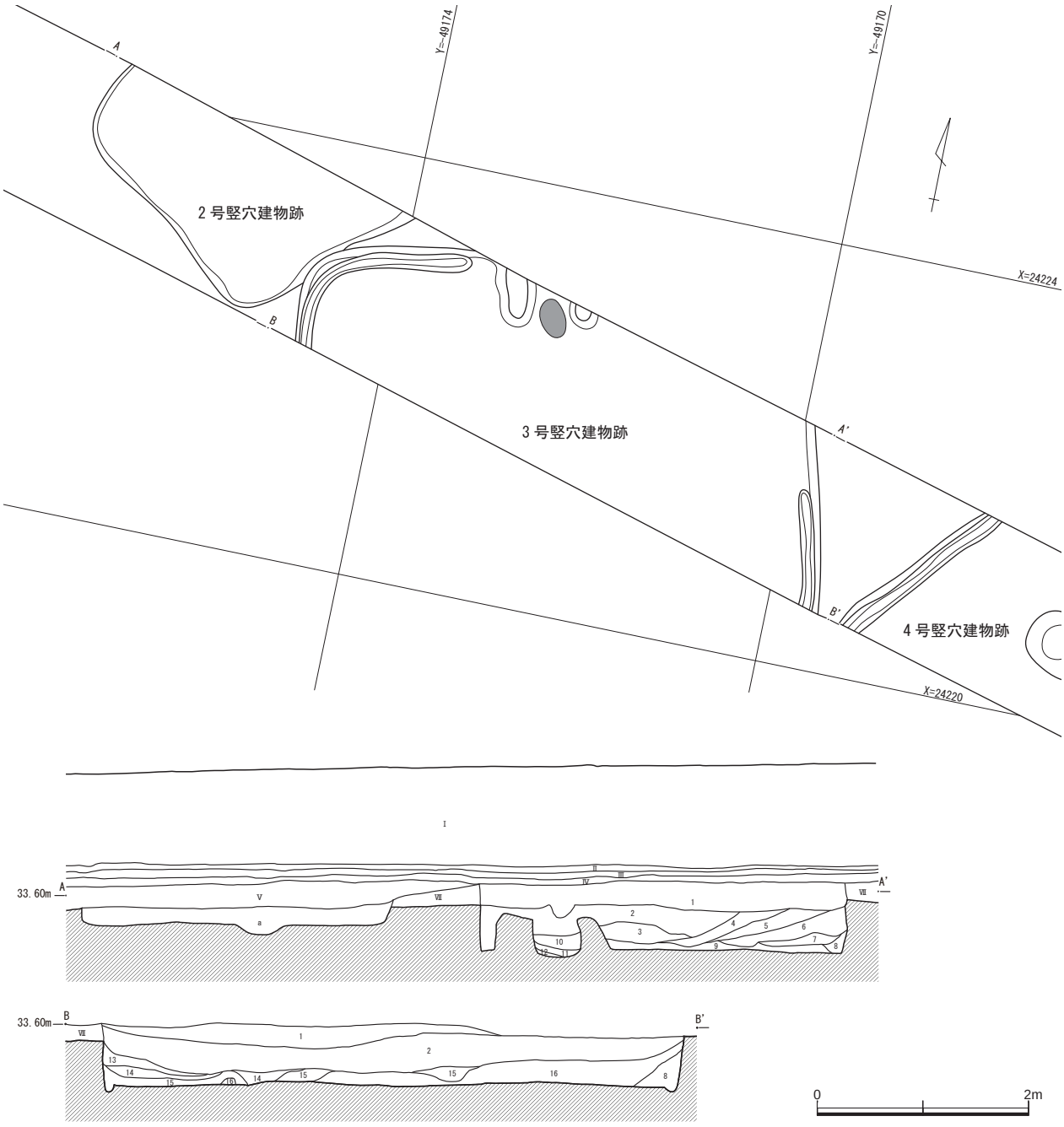
第６図　第１号竪穴建物跡出土遺物(2)



第７図　第１号竪穴建物跡出土遺物(3)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　　土	焼成	色　調	残存	備　　考
1	H	坏	(12.6)	4.3		ＡＢＣＤＥＨＩ	普	橙	70%	
2	H	坏	(12.0)	5.3		ＡＢＣＥ	普	橙	40%	
3	H	坏	11.9	5.2		ＡＢＣＤＨＩ	普	橙	95%	
4	H	坏	11.7	5.2		ＡＢＣＥ	普	橙	90%	
5	H	坏	12.1	5.3		ＡＢＣＥ	普	にぶい橙	95%	
6	H	坏	11.8	5.7		ＡＢＣＤＥＨＩ	普	橙	95%	
7	H	坏	12.0	6.0		ＡＢＣＥＨＩ	普	橙	90%	
8	H	坏	12.0	5.2		ＡＢＣＥＩ	普	赤褐	90%	
9	H	坏	12.3	5.8		ＡＢＣＥＩ	普	橙	95%	
10	H	坏	12.0	5.9		ＡＢＣＤＥＩ	良	橙	100%	
11	H	坏	12.0	5.3		ＡＢＣＤＥＩ	良	橙	100%	
12	H	坏	12.4	5.4		ＡＢＣＤＥＨＩ	普	赤褐	95%	
13	H	坏	11.9	6.0		ＡＢＣＥＩ	良	橙	100%	
14	H	坏	12.1	5.5		ＡＢＣＥＩ	普	橙	100%	
15	H	坏	12.3	5.3		ＡＢＣＥＩ	普	橙	100%	
16	H	坏	12.4	5.5		ＡＢＣＤＥＩ	普	橙	100%	
17	H	坏	12.7	6.3		ＡＢＣＤＥＨＩ	普	橙	100%	
18	H	坏	12.6	5.6		ＡＢＣＤＥＨＩ	普	橙	95%	
19	H	坏	(12.8)	5.2		ＡＢＣＥＩ	普	にぶい橙	35%	
20	H	坏	12.7	5.5		ＡＢＣＥＩ	普	赤褐	100%	
21	H	坏	12.8	5.6		ＡＢＣＥＩ	普	橙	100%	
22	H	椀	11.6	6.0		ＡＢＣＤＥＨＩ	普	赤褐	100%	
23	H	椀	12.8	7.2		ＡＢＣＥＨＩ	良	赤褐	100%	
24	H	椀	(16.7)	8.7		ＡＢＣＤＨ	普	橙	40%	
25	H	坩	8.4	15.8		ＡＢＣＤＥＩ	普	赤褐	75%	
26	H	坩	7.8	15.5		ＡＣＥＨ	普	橙	80%	
27	H	坩	8.2			ＡＢＣＥ	普	橙	50%	
28	H	鉢	20.1	13.2	(6.2)	ＡＢＣＨ	普	橙	90%	
29	H	甕	12.0	15.2	6.2	ＡＢＣＦＨ	普	にぶい赤褐	90%	

第２表　第１号竪穴建物跡出土遺物観察表(1)

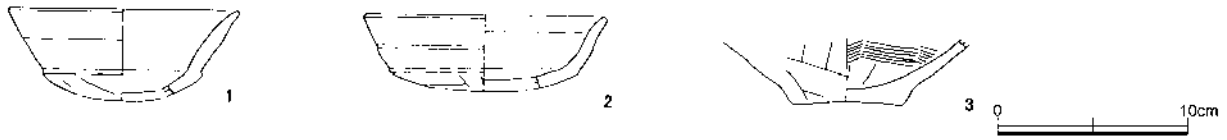


a層　にぶい黄色土（Hue2.5Y6/4）　焼土粒・炭化粒を少し含む。
1層　にぶい黄色土（Hue2.5Y6/4）　焼土粒・炭化粒を少し含む。
2層　暗黄灰色土　（Hue2.5Y5/2）　焼土粒・炭化粒を少し含む。
3層　黄灰色土　（Hue2.5Y4/1）　焼土粒・ブロック・炭化粒を含む。
4層　黄褐色土　（Hue2.5Y5/3）　炭化粒をわずかに含む。
5層　暗灰黄色土　（Hue2.5Y5/2）　焼土粒をわずかに含む。
6層　黄褐色土　（Hue2.5Y5/3）　炭化粒をわずかに含む。
7層　黄灰色土　（Hue2.5Y4/1）　炭化粒をわずかに含む。
8層　黄灰色土　（Hue2.5Y5/1）　炭化粒をわずかに含む。
9層　黄褐色土　（Hue2.5Y5/4）　焼土粒・炭化粒をわずかに含む。
10層　ｵﾘｰﾌﾞ褐色土　（Hue2.5Y4/4）　焼土粒・ブロック・炭化粒を含む。
11層　灰色土　（Hue 5Y 4/1）　灰層。
12層　明褐色土　（Hue7.5Y5/6）　焼土を多量に含む。
13層　黄灰色土　（Hue2.5Y4/1）　炭化粒をわずかに含む。
14層　ｵﾘｰﾌﾞ褐色土　（Hue2.5Y4/4）　炭化粒をわずかに含む。
15層　黄灰色土　（Hue2.5Y4/1）　焼土粒・炭化粒をわずかに含む。
16層　黄褐色土　（Hue2.5Y5/3）　焼土粒をわずかに含む。

第８図　第２・３号竪穴建物跡

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
30	H	甕	14.7	15.2	5.2	ＡＢＣＥＨ	普	橙	90%	
31	H	甕	16.5	26.9	5.1	ＡＢＣＤＥＦＨ	普	橙	85%	
32	H	甕	17.8	28.8	6.3	ＡＢＣＥＨ	普	赤褐	98%	
33	H	甕	17.1	32.4	5.5	ＡＢＣＤＥＨＩ	普	橙	98%	底部付近に穿孔
34	H	甕	18.2	(30.3)	(4.0)	ＡＢＣＤＥＦＨ	普	橙	70%	
35	H	甕	18.1	30.5	5.3	ＡＢＣＤＥＨ	普	橙	85%	
36	H	甑	27.3			ＡＢＣＤＥ	普	橙	75%	

第３表　第１号竪穴建物跡出土遺物観察表(2)



第９図　第３号竪穴建物跡出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	H	坏	(12.3)	(4.9)		ＡＢＣＥＨＩ	普	暗褐	20%	
2	H	坏	(12.8)	(4.0)		ＡＢＣＥＨＩ	普	橙	20%	
3	H	甕			6.0	ＡＢＣＤＨ	良	橙	10%	

第４表　第３号竪穴建物跡出土遺物観察表

る。ピットは１基確認された。主柱穴と思われ、直径60cm、床面からの深さ55cmを測る。また、カマド右脇から、円形台状の掘り残し部が確認された。直径25cm、高さ10cmを測る。

図示できた遺物は、第11図１～11である。１～９は土師器で、１は模倣坏、２～４は有段口縁坏、５・６は鉢、７～９は甕である。10・11は編物石である。

遺構の時期は６世紀後半～７世紀前半と推定される。

第５号竪穴建物跡（第12・13図、第６表）

調南区北部に位置し、第４号竪穴建物跡を切り、第６号竪穴建物跡に切られる。平面形態は方形で、東西軸5.7mを測る。主軸方位は、ほぼ正方位である。床面はほぼ平坦で、掘り込み面からの深さは30cmを測る。壁はやや斜めに立ち上がる。

カマド、貯蔵穴は確認されなかった。壁溝は幅10cm、床面からの深さ５cmで、西壁の一部で確認された。

図示できた遺物は第13図１～18である。１～15は土師器で、１・２は模倣坏、３～11は有段口縁坏、12・13は暗文系無文坏、14は高坏、15は壷である。16～18は編物石である。

遺構の時期は、７世紀後半と推定される。

第６号竪穴建物跡（第12・14図、第７表）

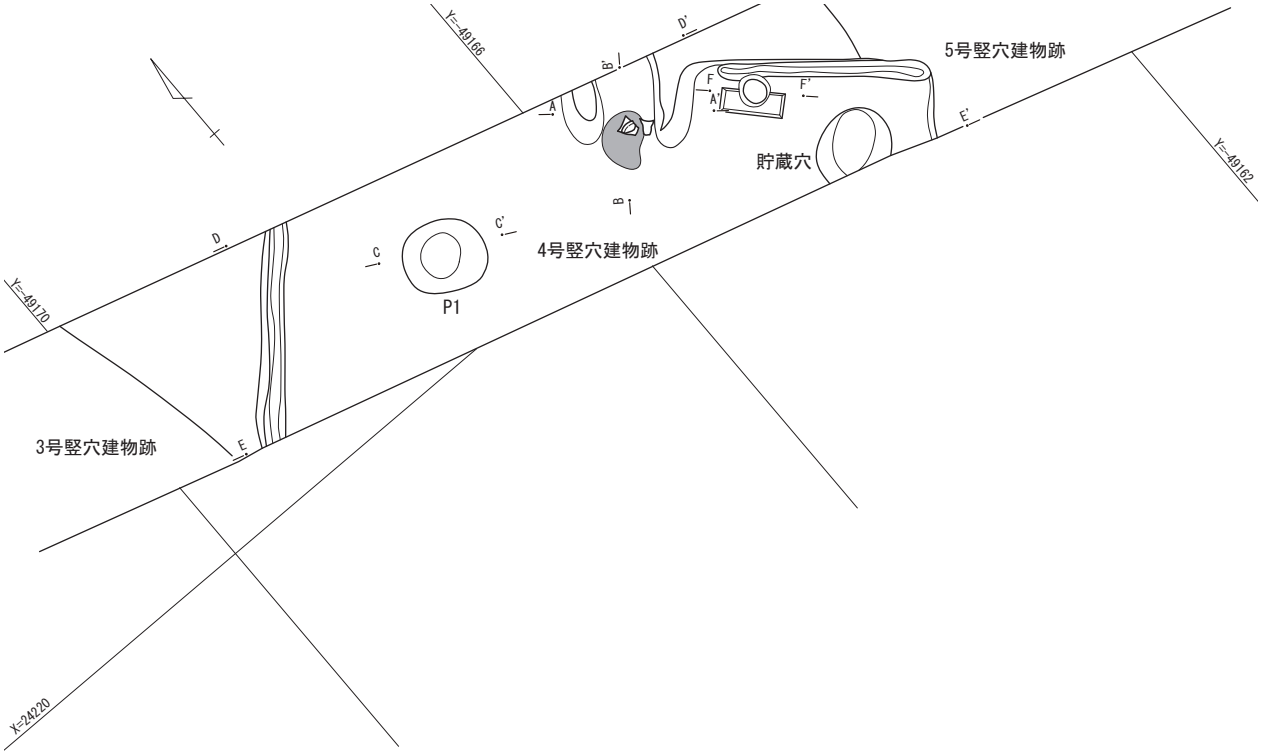
調南区北部に位置し、第５号竪穴建物跡を切る。平面形態は方形で、東西軸3.5mを測る。主軸方位は、Ｎ－26°－Ｅである。床面は中央がやや深くなり、確認面からの深さは50cmを測る。壁は斜めに立ち上がる。カマド、貯蔵穴、壁溝は確認されなかった。

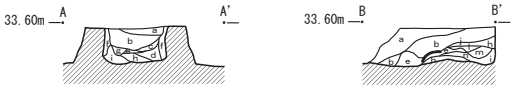
図示できた遺物は、第14図１・２である。全て土師器で、１は北武蔵型坏、２は甕である。

遺構の時期は、７世紀後半と推定される。

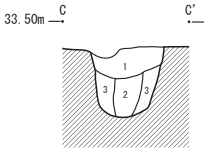
第７号竪穴建物跡（第15・16図、第８表）

調南区北部に位置する。平面形態は長方形で、東西軸4.8mを測る。主軸方位は、ほぼ正方位である。床面はほぼ平坦で、掘り込み面からの深さは65cmを測

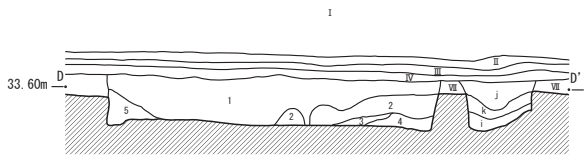


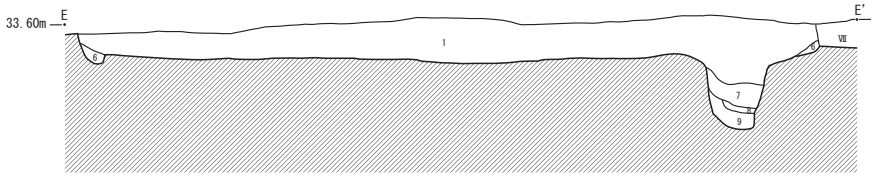


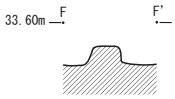
a層　暗灰黄色土(Hue2.5Y5/2)　焼土粒をわずかに含む。
b層　黄灰色土　(Hue2.5Y4/1)　焼土粒・炭化粒を少し含む。
c層　黄褐色土　(Hue2.5Y5/3)　灰をわずかに含む。
d層　黄灰色土　(Hue2.5Y4/1)　焼土粒を含む。
e層　灰色土　(Hue 5Y 4/1)　灰層。焼土粒・炭化粒を含む。
f層　黄灰色土　(Hue2.5Y4/1)　焼土を多量に含む。
g層　暗灰黄色土(Hue2.5Y5/2)　焼土粒・炭化粒を含む。
h層　黄灰色土　(Hue2.5Y4/1)　焼土を多量に含む。
i層　灰色土　(Hue 5Y 4/1)　灰層。焼土粒・炭化粒を含む。
j層　にぶい黄色(Hue2.5Y6/3)　焼土粒を多く含む。
k層　灰黄色土　(Hue2.5Y6/2)　焼土ブロックを含む。
l層　黄灰色土　(Hue2.5Y5/1)　焼土粒を多く含む。
m層　黄灰色土　(Hue2.5Y4/1)　焼土粒・ブロックを多く含む。



1層　ｵﾘｰﾌﾞ褐色土　(Hue2.5Y4/3)　炭化粒・焼土粒をわずかに含む。
2層　黒褐色土　(Hue2.5Y3/1)　焼土粒をわずかに含む。
3層　暗灰黄色土　(Hue2.5Y4/2)　炭化粒をわずかに含む。

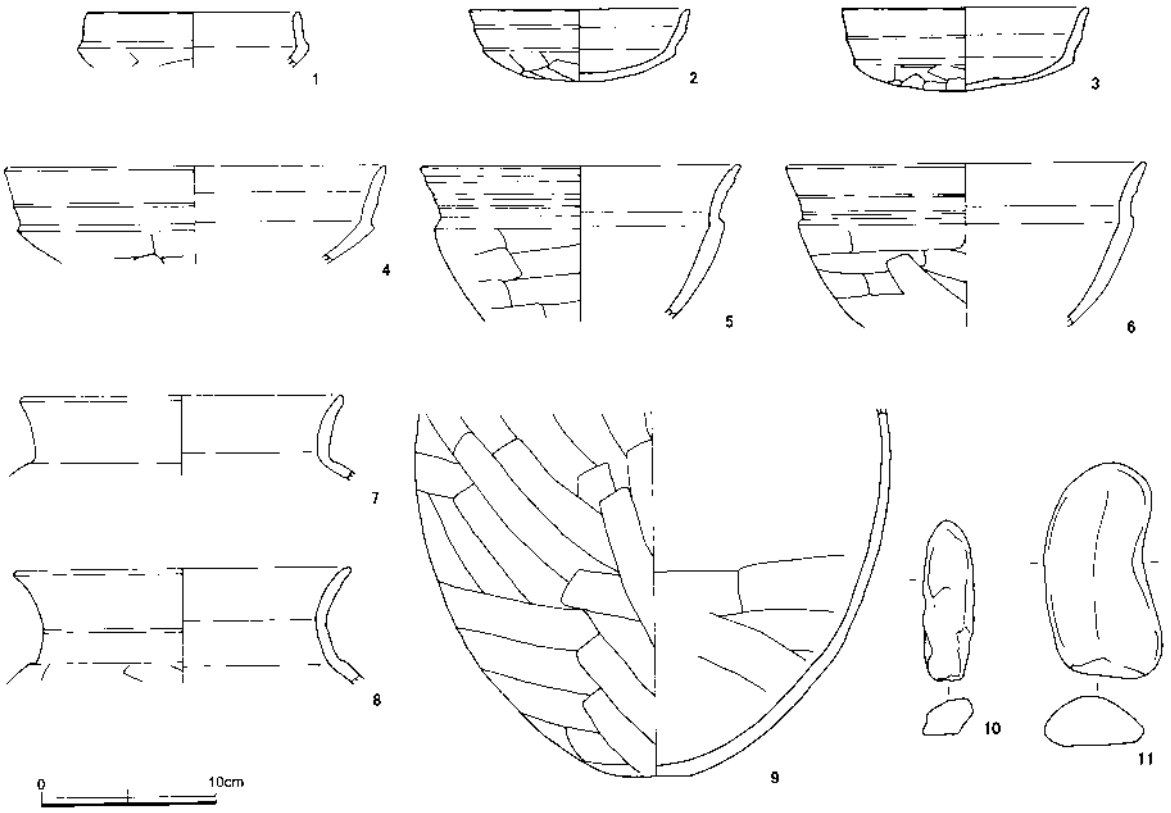






1層　にぶい黄色土　(Hue2.5Y6/4)　焼土粒・炭化粒をわずかに含む。黄褐色土ブロックを多く含む。
2層　黄灰色土　(Hue2.5Y4/1)　焼土粒・炭化粒を含む。
3層　暗灰黄色土　(Hue2.5Y5/2)　焼土粒・炭化粒を多く含む。
4層　暗灰黄色土　(Hue2.5Y5/2)　炭化粒をわずかに含む。
5層　黄灰色土　(Hue2.5Y4/1)　焼土粒・炭化粒をわずかに含む。
6層　黒褐色土　(Hue2.5T3/1)　焼土粒・炭化粒を多量に含む。
7層　ｵﾘｰﾌﾞ褐色土　(Hue2.5Y4/3)　炭化粒を含む。
8層　黒褐色土　(Hue2.5Y3/1)　炭化粒を多量に含む。
9層　ｵﾘｰﾌﾞ褐色土　(Hue2.5Y4/3)　焼土粒・炭化粒を少し含む。

第10図　第４号竪穴建物跡



第11図　第４号竪穴建物跡出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	H	坏	(11.9)			ＡＢＣＥＩ	普	橙	10%	
2	H	坏	12.4	4.2		ＡＢＣＥＩ	普	赤褐	80%	
3	H	坏	14.0	4.8		ＡＢＣＤＥＩ	普	橙	75%	
4	H	坏	(21.8)			ＡＢＣＥＨ	普	橙	10%	
5	H	鉢	(18.1)			ＡＢＣＥ	普	橙	10%	
6	H	鉢	(20.6)			ＡＢＣＥＨＩ	普	橙	30%	
7	H	甕	(18.4)			ＡＢＣＥＨ	普	橙	10%	
8	H	甕	19.2			ＡＢＣＤＥＨ	普	橙	25%	
9	H	甕				ＡＢＣＤＥＨ	普	橙	15%	
10		編物石	長 9.2	幅 2.9	厚 1.9	石材　チャート				重さ　90 g
11		編物石	長 12.3	幅 6.1	厚 2.8	石材　砂岩				重さ　360 g

第５表　第４号竪穴建物跡出土遺物観察表

る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、上部がやや広がる。

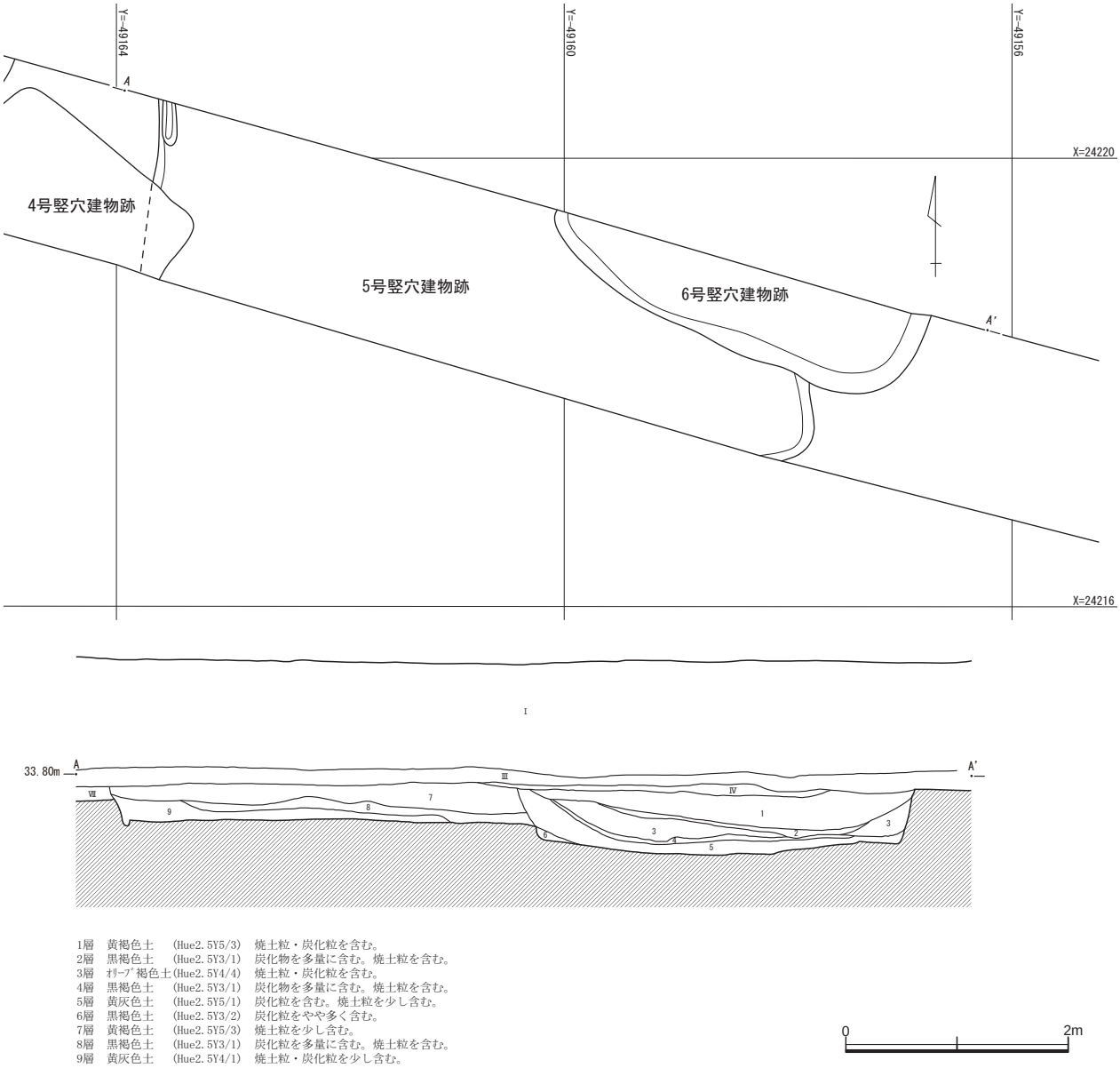
カマド、貯蔵穴は確認されなかった。壁溝は幅10～15cm、床面からの深さは５～10cmを測る。

図示できた遺物は、第16図１～９である。１～８は土師器で、１・２は模倣坏、３～５は有段口縁坏、６～８は甕である。９は土製支脚で、床面から49cmの高さで出土した。

遺構の時期は、６世紀後半～７世紀前半と推定される。

第８号竪穴建物跡（第17～19図、第９・10表）

調南区北部に位置し、第13号竪穴建物跡の覆土を掘り込む形で構築される。平面形態は方形で、東西軸6.3ｍを測る。主軸方位はＮ－10°－Ｅである。床面はや



第12図　第５・６号竪穴建物跡

や凹凸がみられ、掘り込み面からの深さは45cmを測る。壁は南壁はほぼ垂直に、東壁は斜めに立ち上がる。

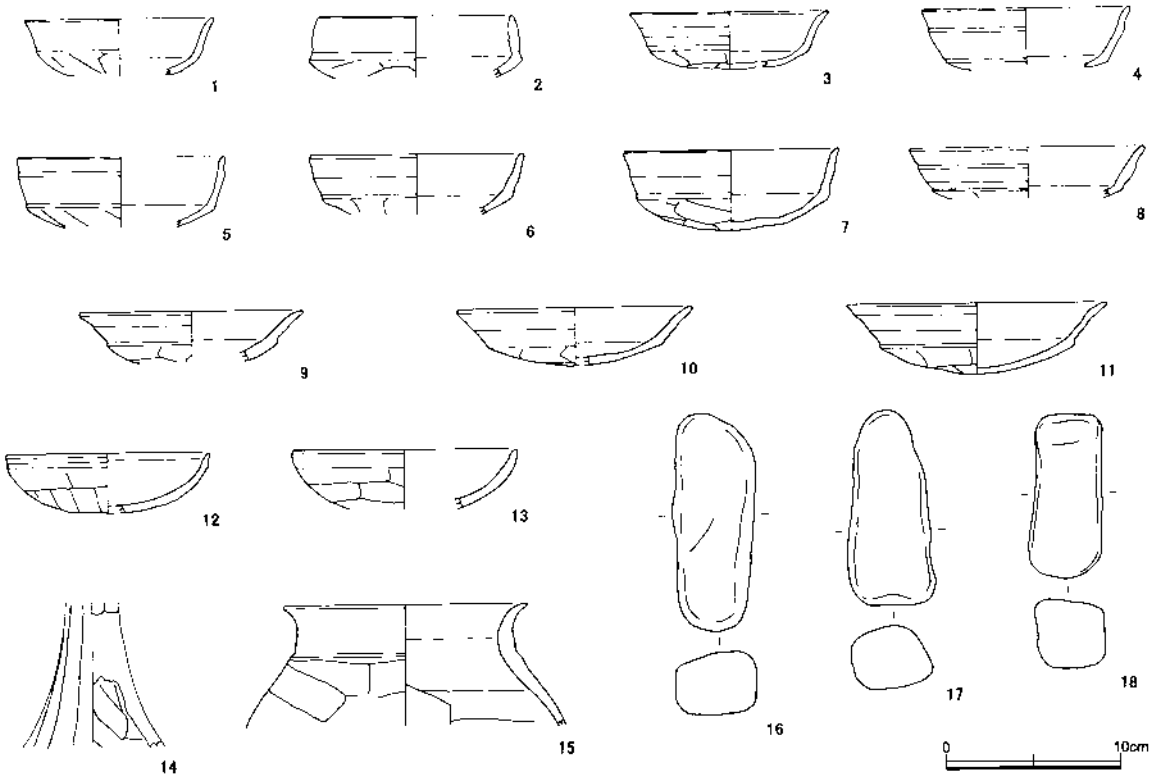
カマド、貯蔵穴は確認されなかった。壁溝は幅10～20cm、床面からの深さ５cmを測る。伴うピットは３基確認された。Ｐ１は直径50cm、床面からの深さ20cm、Ｐ２は直径60cm、床面からの深さ15cm、Ｐ３は直径40cm、床面からの深さは40cmである。

図示できた遺物は第18図１～第19図32である。１～15は土師器で、１は模倣坏、２～11は有段口縁坏、12～15は甕である。16～19は土錘、20は編物石、21は泥岩製の紡錘車である。床面からの出土レベルは、５は18cm、13・14・20・22・23・26・28・31・32は床面直上である。

遺構の時期は、６世紀後半～７世紀前半と推定される。

第９号竪穴建物跡（第21・22図、第12表）

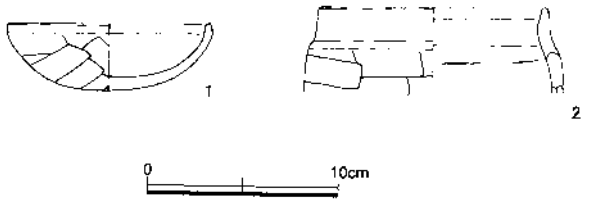
調南区北部に位置する。平面形態は方形で、一辺6.2ｍを測る。主軸方位はＮ－25°－Ｅである。床面は中央がやや高くなり、掘り込み面からの深さは50cmを



第13図　第５号竪穴建物跡出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	H	坏	(10.8)			ＡＢＣＤＥＩ	普	橙	15%	
2	H	坏	(11.1)			ＡＢＣＥ	普	橙	20%	
3	H	坏	(11.4)			ＡＢＣＥＩ	普	赤褐	25%	
4	H	坏	(11.9)			ＡＢＣＥＩ	普	にぶい赤褐	30%	
5	H	坏	(11.8)			ＡＢＣＥＩ	普	橙	20%	
6	H	坏	(12.1)			ＡＢＣＥＩ	普	橙	20%	
7	H	坏	12.4	4.8		ＡＢＣＤＥＩ	普	橙	55%	
8	H	坏	(13.4)			ＡＢＣＥＩ	普	橙	25%	
9	H	坏	(13.0)			ＡＢＣＥＩ	普	橙	25%	
10	H	坏	(13.4)	3.3		ＡＢＣＥＩ	普	橙	25%	
11	H	坏	(14.8)	4.0		ＡＢＣＥＨＩ	普	橙	40%	
12	H	坏	(11.7)	(3.5)		ＡＢＣＥＩ	普	橙	25%	
13	H	坏	(12.8)			ＡＢＣＥＩ	普	橙	20%	
14	H	高坏				ＡＢＣＥＩ	普	橙	40%	
15	H	壷	14.1			ＡＢＣＥＩ	普	橙	25%	
16		編物石	長 12.4	幅 4.6	厚 3.6	石材　砂岩				重さ　393 g
17		編物石	長 11.4	幅 4.7	厚 3.6	石材　砂岩				重さ　322 g
18		編物石	長　9.4	幅 4.2	厚 3.9	石材　絹雲母片岩				重さ　299 g

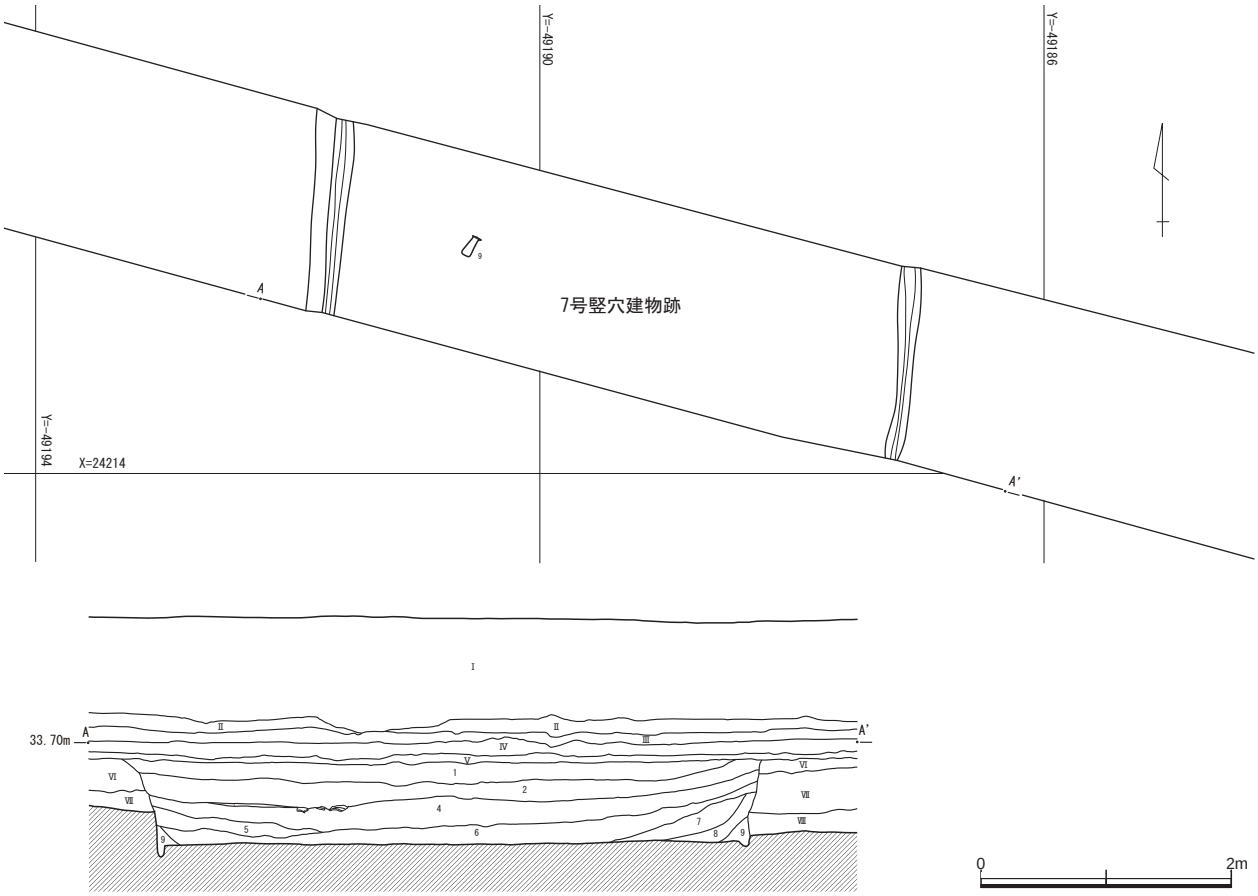
第６表　第５号竪穴建物跡出土遺物観察表



第14図　第６号竪穴建物跡出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　　土	焼成	色　調	残存	備　　考
1	H	坏	(10.7)	3.5		ＡＢＣＥ	普	橙	30%	
2	H	甕	(12.2)			ＡＢＣＥ	普	灰橙	10%	

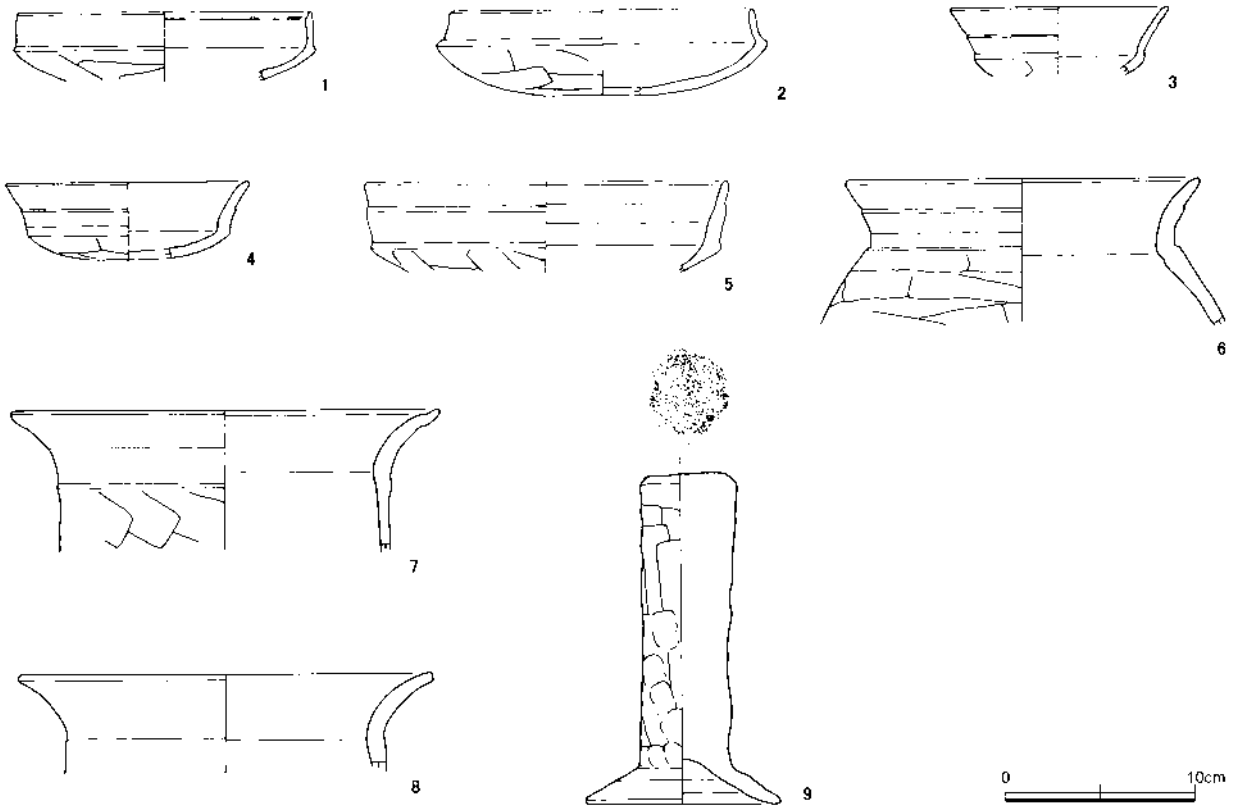
第７表　第６号竪穴建物跡出土遺物観察表



Ⅰ層　ｵﾘｰﾌﾞ褐色土（Hue2.5Y4/4）　耕作土。
Ⅱ層　黄灰色土　(Hue2.5Y5/1)　浅間Ｂ軽石を含む。
Ⅲ層　黒褐色土　(Hue2.5Y3/1)　黄褐色土粒を含む。
Ⅳ層　黄褐色土　(Hue2.5Y5/4)　鉄分を多く含む。
Ⅴ層　灰色土　(Hue 5Y 4/1)　鉄分・マンガンを多く含む。
Ⅵ層　黄灰色土　(Hue2.5Y4/1)　炭化粒をわずかに含む。
Ⅶ層　黄褐色土　(Hue2.5Y5/3)　炭化粒をわずかに含む。
Ⅷ層　黄褐色土　(Hue2.5Y5/4)

1層　ｵﾘｰﾌﾞ黒色土(Hue5Y3/2)　焼土粒・炭化粒を含む。
2層　灰ｵﾘｰﾌﾞ色土(Hue5Y5/2)　炭化粒をわずかに含む。
3層　黒色土　(Hue5Y2/1)　炭化物層。
4層　灰ｵﾘｰﾌﾞ色土(Hue5Y5/3)　焼土粒・炭化粒をわずかに含む。
5層　灰ｵﾘｰﾌﾞ色土(Hue5Y4/2)　焼土粒・炭化粒をわずかに含む。
6層　ｵﾘｰﾌﾞ黒色土(Hue5Y3/2)　炭化粒をわずかに含む。
7層　灰色土　(Hue5Y4/1)　炭化粒をわずかに含む。
8層　灰ｵﾘｰﾌﾞ色土(Hue5Y5/3)　炭化粒をわずかに含む。
9層　ｵﾘｰﾌﾞ黒色土(Hue5Y3/2)　炭化粒をわずかに含む。

第15図　第７号竪穴建物跡



第16図　第７号竪穴建物跡出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	H	坏	(15.6)			ＡＢＣＥＩ	普	橙	15%	
2	H	坏	(16.0)	(4.6)		ＡＢＣＥＩ	普	橙	20%	
3	H	坏	(11.5)			ＡＢＣＥＩ	普	橙	15%	
4	H	坏	(13.0)	(4.1)		ＡＢＣＥＩ	普	橙	15%	
5	H	坏	(19.1)			ＡＢＣＥＩ	普	灰褐	15%	
6	H	甕	(18.5)			ＡＢＣＥＩ	良	橙	20%	
7	H	甕	(22.3)			ＡＢＣＥＨＩ	普	橙	10%	
8	H	甕	(21.9)			ＡＢＣＤＥＨ	普	赤褐	10%	
9	H	土製支脚	5.0	17.4	10.1	ＡＢＣＥＨＩ	普	橙	98%	

第８表　第７号竪穴建物跡出土遺物観察表

測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、上部がやや広がる。

カマド、貯蔵穴は確認されなかった。壁溝は幅10～15cm、床面からの深さは５cmを測る。

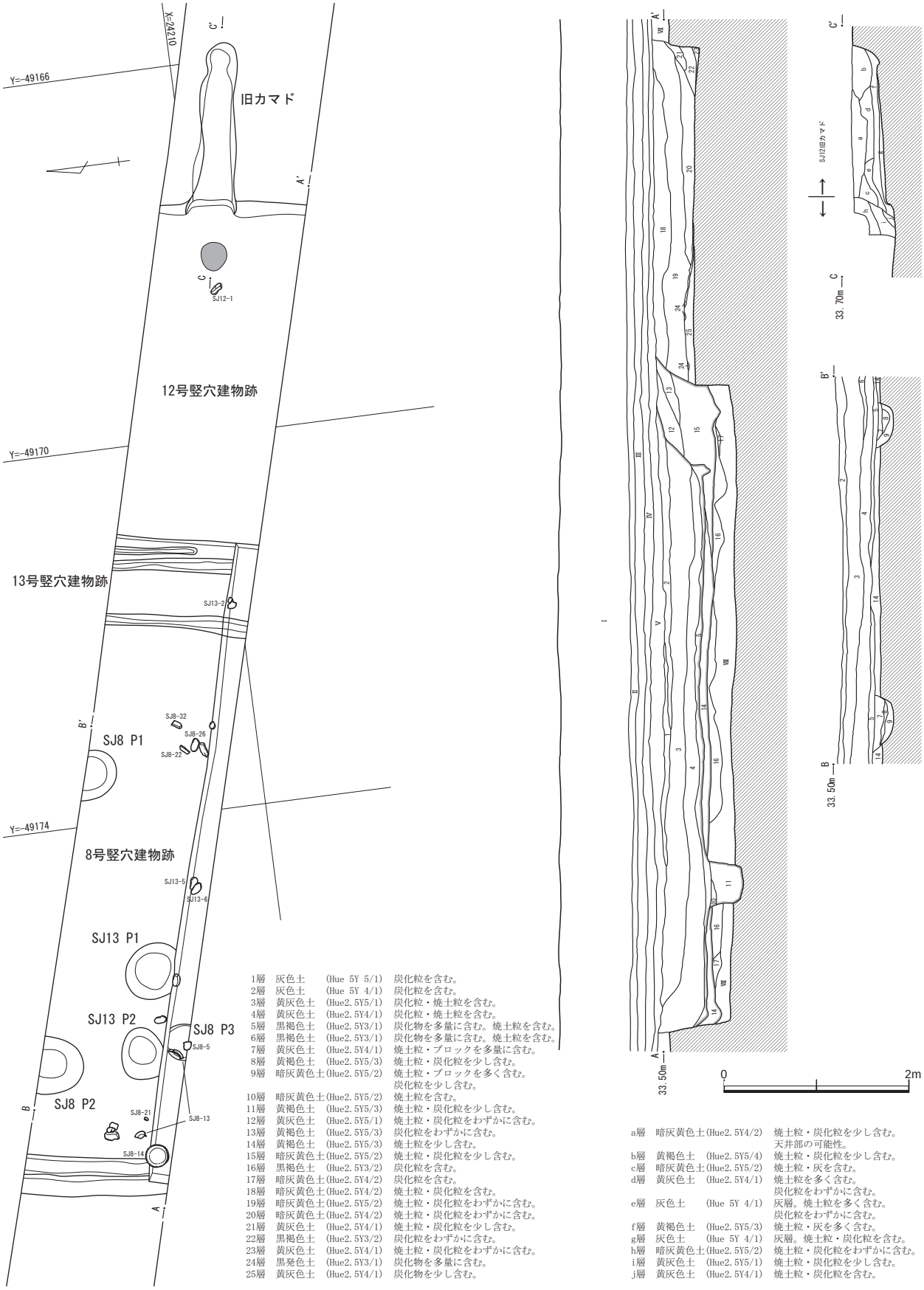
図示できた遺物は第22図１～15である。１～14は土師器で、１・２は模倣坏、３～７は有段口縁坏、８・９・11～13は甕、10は壷、14は鉢、15は土製支脚である。床面からの出土レベルは、２は22cm、６は５cm、15は26cmである。

遺構の時期は６世紀後半～７世紀前半と推定される。

第10号竪穴建物跡（第23・24図、第13表）

調南区中央部に位置する。平面形態は方形で、南北軸5.7mを測る。南に１mの張り出し部がある。主軸方位はN－18°－Eである。床面はほぼ平坦で、掘り込み面からの深さは50cmを測る。

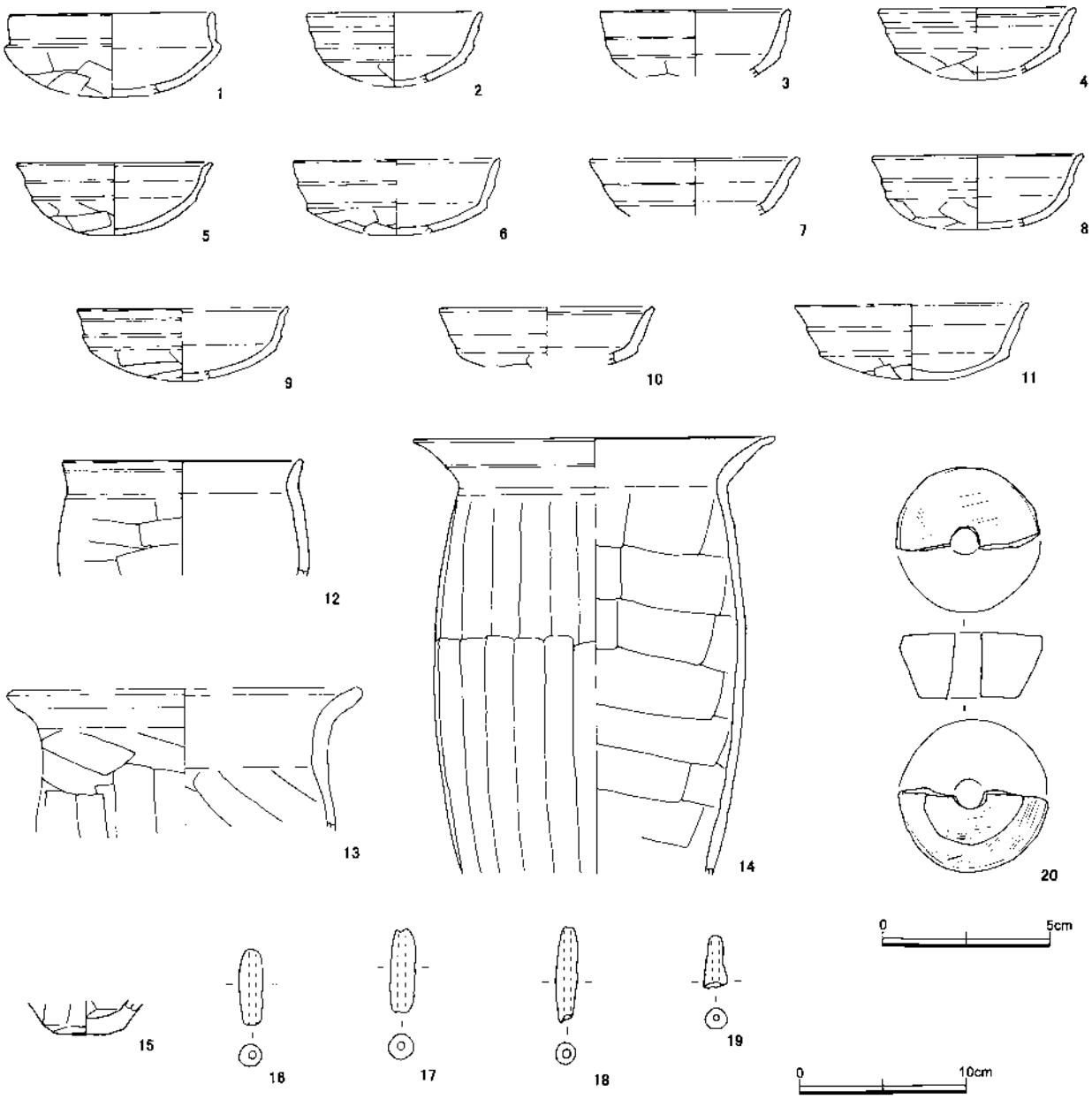
カマド、貯蔵穴は確認されなかった。壁溝は幅15～20cm、床面からの深さ５cmを測る。ピットは２基確認された。主柱穴と思われ、Ｐ１は直径60～70cm、床面からの深さ55cm、Ｐ２は直径70cm、床面からの



1層	灰色土	(Hue 5Y 5/1)	炭化粒を含む。
2層	灰色土	(Hue 5Y 4/1)	炭化粒を含む。
3層	黄灰色土	(Hue2.5Y5/1)	炭化粒・焼土粒を含む。
4層	黄灰色土	(Hue2.5Y4/1)	炭化粒・焼土粒を含む。
5層	黒褐色土	(Hue2.5Y3/1)	炭化物を多量に含む。焼土粒を含む。
6層	黒褐色土	(Hue2.5Y3/1)	炭化物を多量に含む。焼土粒を含む。
7層	黄灰色土	(Hue2.5Y4/1)	焼土粒・ブロックを多量に含む。
8層	黄褐色土	(Hue2.5Y5/3)	焼土粒・炭化粒を少し含む。
9層	暗灰黄色土	(Hue2.5Y5/2)	焼土粒・ブロックを多く含む。 炭化粒を少し含む。
10層	暗灰黄色土	(Hue2.5Y5/2)	焼土粒を含む。
11層	黄褐色土	(Hue2.5Y5/3)	焼土粒・炭化粒を少し含む。
12層	黄灰色土	(Hue2.5Y5/1)	焼土粒・炭化粒をわずかに含む。
13層	黄褐色土	(Hue2.5Y5/3)	炭化粒をわずかに含む。
14層	黄褐色土	(Hue2.5Y5/3)	焼土粒を少し含む。
15層	暗灰黄色土	(Hue2.5Y5/2)	焼土粒・炭化粒を少し含む。
16層	黒褐色土	(Hue2.5Y3/2)	炭化粒を含む。
17層	暗灰黄色土	(Hue2.5Y4/2)	炭化粒を含む。
18層	暗灰黄色土	(Hue2.5Y4/2)	焼土粒・炭化粒を含む。
19層	暗灰黄色土	(Hue2.5Y5/2)	焼土粒・炭化粒をわずかに含む。
20層	暗灰黄色土	(Hue2.5Y4/2)	焼土粒・炭化粒をわずかに含む。
21層	黄灰色土	(Hue2.5Y4/1)	焼土粒・炭化粒を少し含む。
22層	黒褐色土	(Hue2.5Y3/2)	炭化粒をわずかに含む。
23層	黄灰色土	(Hue2.5Y4/1)	焼土粒・炭化粒をわずかに含む。
24層	黒発色土	(Hue2.5Y3/1)	炭化物を多量に含む。
25層	黄灰色土	(Hue2.5Y4/1)	炭化物を少し含む。

a層	暗灰黄色土	(Hue2.5Y4/2)	焼土粒・炭化粒を少し含む。 天井部の可能性。
b層	黄褐色土	(Hue2.5Y5/4)	焼土粒・炭化粒を少し含む。
c層	暗灰黄色土	(Hue2.5Y5/2)	焼土粒・灰を含む。
d層	黄灰色土	(Hue2.5Y4/1)	焼土粒を多く含む。 炭化粒をわずかに含む。
e層	灰色土	(Hue 5Y 4/1)	灰層。焼土粒を多く含む。 炭化粒をわずかに含む。
f層	黄褐色土	(Hue2.5Y5/3)	焼土粒・灰を多く含む。
g層	灰色土	(Hue 5Y 4/1)	灰層。焼土粒・炭化粒を含む。
h層	暗灰黄色土	(Hue2.5Y5/2)	焼土粒・炭化粒をわずかに含む。
i層	黄灰色土	(Hue2.5Y5/1)	焼土粒・炭化粒を少し含む。
j層	黄灰色土	(Hue2.5Y4/1)	焼土粒・炭化粒を含む。

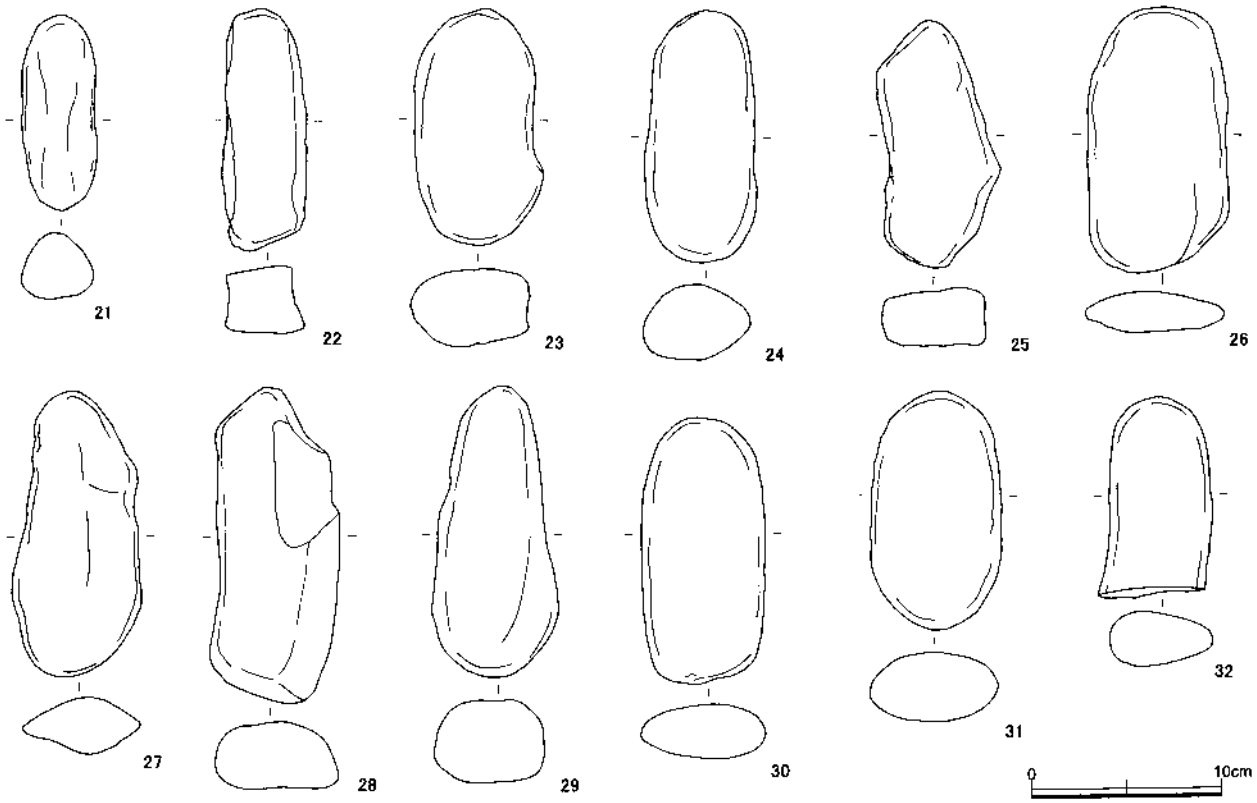
第17図　第８・12・13号竪穴建物跡



第18図　第８号竪穴建物跡出土遺物(1)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	H	坏	12.2	(5.1)		ＡＢＣＤＥ	普	橙	75%	
2	H	坏	(10.5)	(4.5)		ＡＢＣＥＩ	普	橙	10%	
3	H	坏	(11.3)			ＡＢＣＥＩ	普	橙	15%	
4	H	坏	(11.6)	(4.3)		ＡＢＣＤＥＩ	普	橙	20%	
5	H	坏	(11.9)	4.4		ＡＢＣＥＩ	普	橙	40%	
6	H	坏	(12.5)	(4.6)		ＡＢＣＥＩ	普	赤褐	25%	
7	H	坏	(12.7)			ＡＢＣＥＩ	普	橙	10%	
8	H	坏	12.8	(4.5)		ＡＢＣＥ	普	橙	40%	
9	H	坏	(12.8)	(4.4)		ＡＢＣＥＩ	普	橙	25%	
10	H	坏	(12.8)			ＡＢＣＥ	普	灰褐	15%	

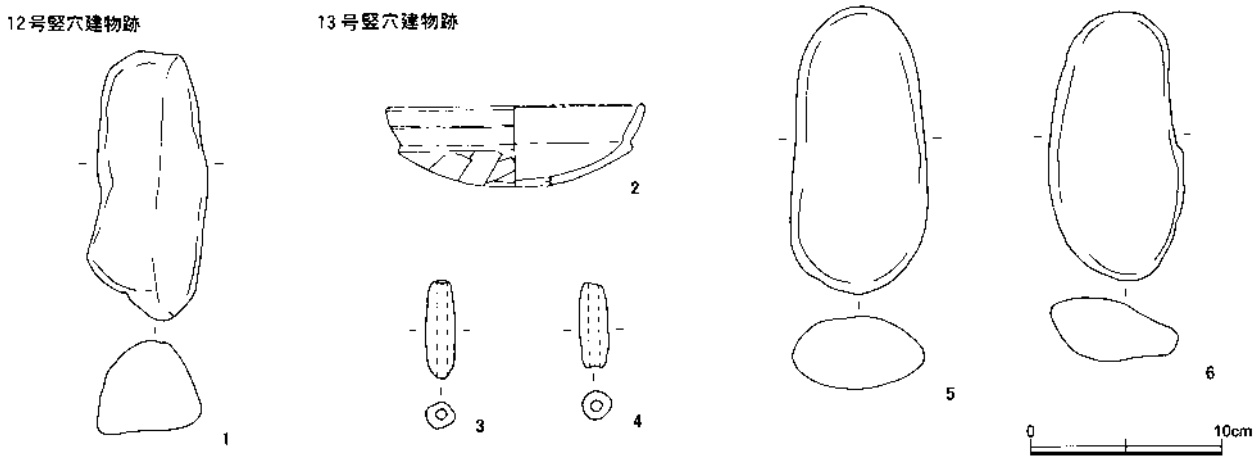
第９表　第８号竪穴建物跡出土遺物観察表(1)



第19図　第８号竪穴建物跡出土遺物(2)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
11	H	坏	(14.1)	4.5		ＡＢＣＥＩ	普	橙	55%	
12	H	甕	(14.6)			ＡＢＣＥ	普	橙	5%	
13	H	甕	(21.0)			ＡＢＣＥＨＩ	普	橙	25%	
14	H	甕	21.8			ＡＢＣＥＨ	普	橙	75%	
15	H	甕			3.4	ＡＢＣＤＥＨ	普	赤褐	5%	
16		土錘	長4.5	幅1.4	厚1.3	ＡＢＣＥＨＩ	普	橙	100%	重さ　7.83 g
17		土錘	長5.1	幅1.5	厚1.5	ＡＢＣＥＩ	普	橙	100%	重さ　10.01 g
18		土錘	長(5.9)	幅1.3	厚1.3	ＡＢＣＥＩ	普	橙	95%	重さ　9.0 g
19		土錘		幅1.3	厚1.3	ＡＣＥ	普	橙	50%	重さ　4.22 g
20		紡錘車		幅4.4	厚2.0	石材　泥岩				重さ　28.05 g
21		編物石	長10.3	幅3.9	厚3.4	石材　砂岩				重さ　221 g
22		編物石	長12.8	幅4.5	厚3.6	石材　砂岩				重さ　350 g
23		編物石	長14.9	幅6.9	厚3.0	石材　砂岩				重さ　545 g
24		編物石	長13.3	幅5.8	厚4.0	石材　砂岩				重さ　485 g
25		編物石	長13.0	幅5.9	厚3.0	石材　チャート				重さ　396 g
26		編物石	長13.9	幅7.3	厚2.1	石材　砂岩				重さ　348 g
27		編物石	長15.0	幅6.8	厚3.0	石材　砂岩				重さ　370 g
28		編物石	長16.4	幅6.6	厚3.5	石材　砂岩				重さ　620 g
29		編物石	長15.4	幅6.6	厚4.3	石材　砂岩				重さ　684 g
30		編物石	長14.1	幅6.5	厚2.9	石材　砂岩				重さ　462 g
31		編物石	長12.6	幅6.8	厚3.7	石材　安山岩				重さ　475 g
32		編物石	長12.0	幅5.7	厚2.9	石材　砂岩				重さ　311 g

第10表　第８号竪穴建物跡出土遺物観察表(2)



第20図　第12・13号竪穴建物跡出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1		編物石	長 14.0	幅 6.0	厚 4.7	石材　砂岩				重さ 668 g、SJ12 出土
2	H	坏	(13.6)	4.3		ＡＢＣＥＩ	普	橙	40%	SJ13 出土
3		土錘	長 5.1	幅 1.6	厚 1.4	ＡＣＥＨＩ	普	橙	100%	重さ 10.08 g、SJ13 出土
4		土錘	長 4.5	幅 1.5	厚 1.5	ＡＢＣＥＨＩ	普	橙	100%	重さ 8.46 g、SJ13 出土
5		編物石	長 15.2	幅 7.2	厚 3.8	石材　砂岩				重さ 672 g、SJ13 出土
6		編物石	長 14.2	幅 7.1	厚 3.3	石材　砂岩				重さ 500 g、SJ13 出土

第11表　第12・13号竪穴建物跡出土遺物観察表

深さ27cmを測る。

図示できた遺物は、第24図１～８である。１は凝灰岩製の有茎石鏃である。縄文時代後晩期のものであろうか。２～８は土師器で、２は模倣坏、３～８は有段口縁坏である。

遺構の時期は、６世紀後半～７世紀前半と推定される。

第11号竪穴建物跡（第25図）

調南区中央部に位置する。本来の確認面は現地表面から120cm、掘り込みの深さは60cmを測る。平面形態は方形で、一辺4.3mを測る。主軸方位はＮ－45°－Ｅである。

カマドは北東壁で確認された。壁溝は北東壁で確認され、幅15cm、深さ５cmを測る。貯蔵穴は調査部分からは確認されなかった。

図示できた遺物は、第25図１である。土師器有段口縁坏で、口径13.6cm、推定器高4.6cm、胎土に白･赤･黒色粒、石英、角閃石を含む。焼成は普通、色調は橙色を呈し、残存率は40％である。

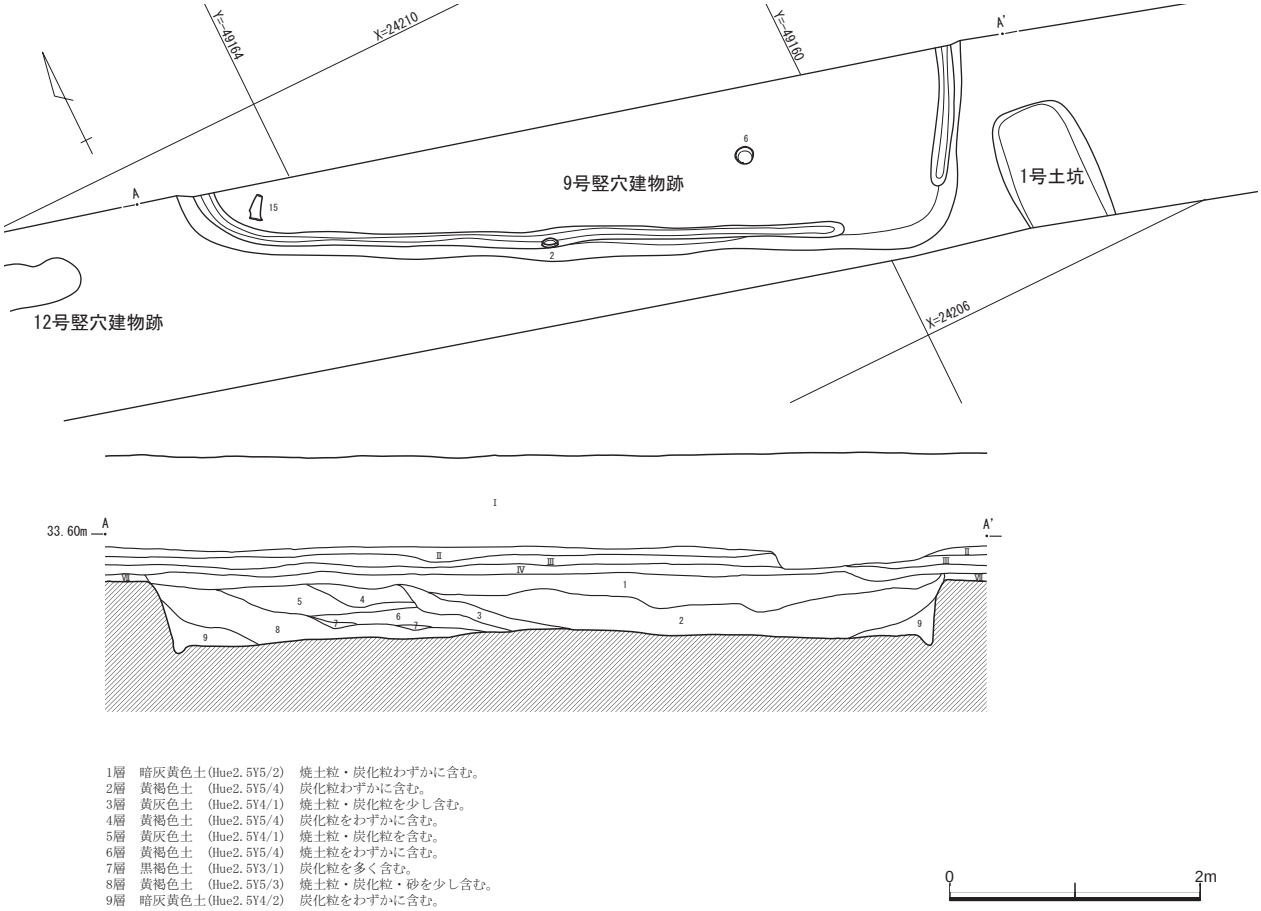
遺構の時期は、６世紀後半～７世紀前半と推定される。

第12号竪穴建物跡（第17・20図、第11表）

調査区北部に位置し、第13号竪穴建物跡に切られる。平面形態は方形で、東西軸3.7m以上を測る。主軸方位はＮ－５°－Ｅである。床面はほぼ平坦で、掘り込み面からの深さは40cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

カマドは東壁で確認されたが、煙道と燃焼部底面の赤色化した部分しか残っていなかった。造り替えられた可能性が最も高いと思われる。煙道の長さは1.7mと長く、幅35cm、確認面からの深さ25～35cmで、緩やかな傾斜で先端部へと向かう。貯蔵穴、壁溝は確認されなかった。

図示できた遺物は、第20図１の編物石である。床面



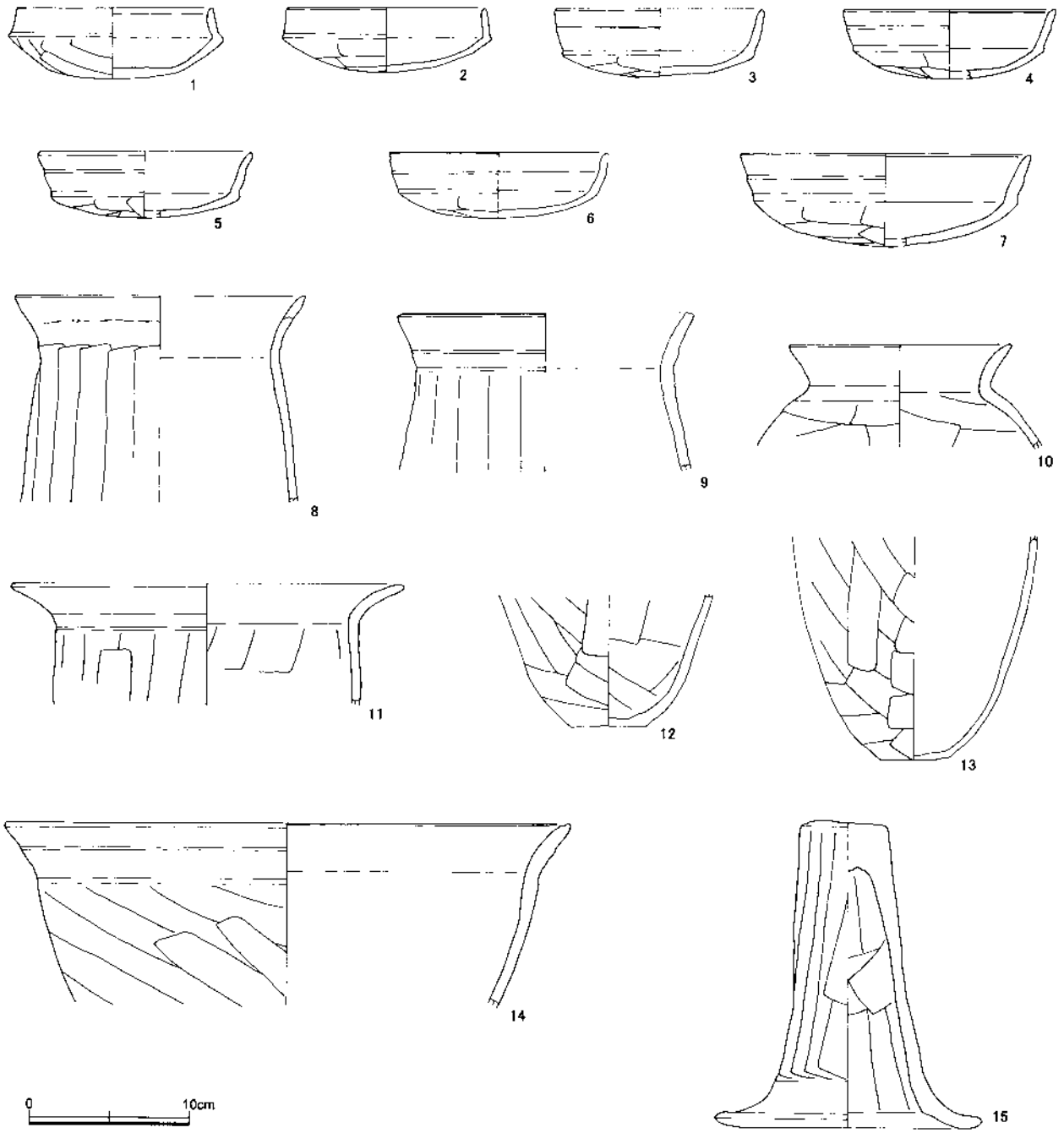
1層　暗灰黄色土(Hue2.5Y5/2)　焼土粒・炭化粒わずかに含む。
2層　黄褐色土　(Hue2.5Y5/4)　炭化粒わずかに含む。
3層　黄灰色土　(Hue2.5Y4/1)　焼土粒・炭化粒を少し含む。
4層　黄褐色土　(Hue2.5Y5/4)　炭化粒をわずかに含む。
5層　黄灰色土　(Hue2.5Y4/1)　焼土粒・炭化粒を含む。
6層　黄褐色土　(Hue2.5Y5/4)　焼土粒をわずかに含む。
7層　黒褐色土　(Hue2.5Y3/1)　炭化粒を多く含む。
8層　黄褐色土　(Hue2.5Y5/3)　焼土粒・炭化粒・砂を少し含む。
9層　暗灰黄色土(Hue2.5Y4/2)　炭化粒をわずかに含む。

0　2m

第21図　第９号竪穴建物跡

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	H	坏	12.3	4.5		ＡＢＣＥＩ	普	橙	90%	
2	H	坏	12.3	4.0		ＡＢＣＥＩ	普	暗褐	100%	
3	H	坏	13.1	4.2		ＡＢＣＥＩ	普	橙	85%	
4	H	坏	(13.3)	4.3		ＡＢＣＥＩ	普	橙	40%	
5	H	坏	(13.4)	4.1		ＡＢＣＤＥＩ	普	橙	40%	
6	H	坏	13.7	4.1		ＡＢＣＤＥＩ	普	橙	100%	
7	H	坏	(18.0)	(5.8)		ＡＢＣＥＩ	普	橙	40%	
8	H	甕	18.1			ＡＢＣＤＥＨ	普	橙	35%	
9	H	甕	(18.3)			ＡＢＣＤＨ	普	橙	10%	
10	H	壷	(14.0)			ＡＢＣＤＥＩ	普	橙	20%	
11	H	甕	(24.4)			ＡＢＣＤＥＨ	普	灰橙	10%	
12	H	甕			4.6	ＡＣＤＥＨ	普	灰橙	20%	
13	H	甕			4.0	ＡＣＤＥＨＩ	普	黒褐	30%	
14	H	鉢	(35.3)			ＡＢＣＥＩ	普	橙	15%	
15		土製支脚	5.3	19.3	16.5	ＡＢＣＥＨＩ	普	橙	90%	

第12表　第９号竪穴建物跡出土遺物観察表



第22図　第９号竪穴建物跡出土遺物

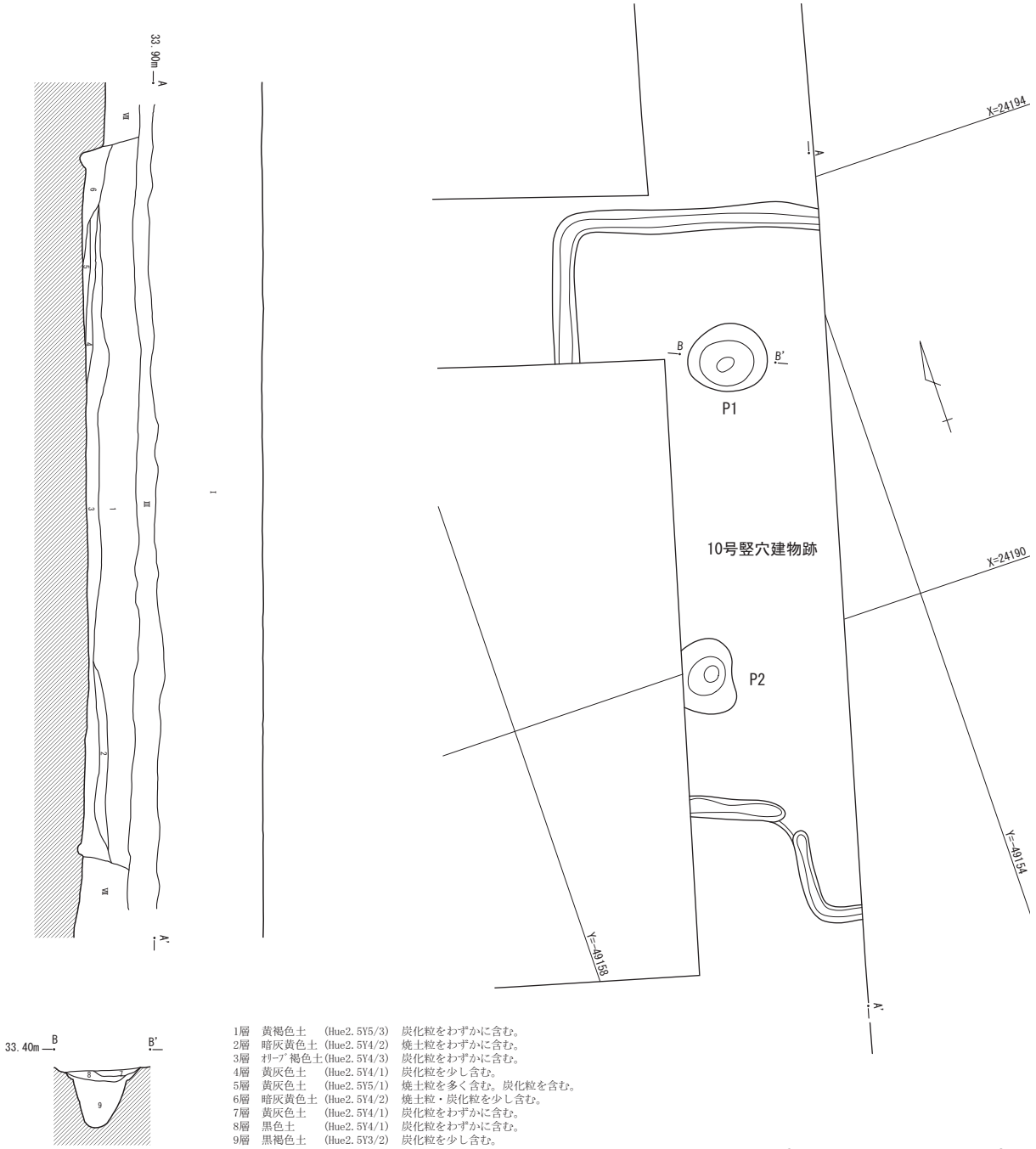
直上から出土した。

第13号竪穴建物跡（第17・20図、第11表）

調査区北部に位置し、第12号竪穴建物跡を切り、第８号竪穴建物跡に切られる。平面形態は方形で、東西軸約７ｍを測る。主軸方位はＮ－10°－Ｅである。床面は中央がわずかに高くなり、掘り込み面からの深さ55cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、東壁は上部がやや広がる。

カマド、貯蔵穴は確認されなかった。壁溝は幅10～20cm、床面からの深さ５cmを測る。伴うピットは２基確認された。Ｐ１は直径60cm、床面からの深さ15cm、Ｐ２は直径50cm、床面からの深さ65cmを測る。

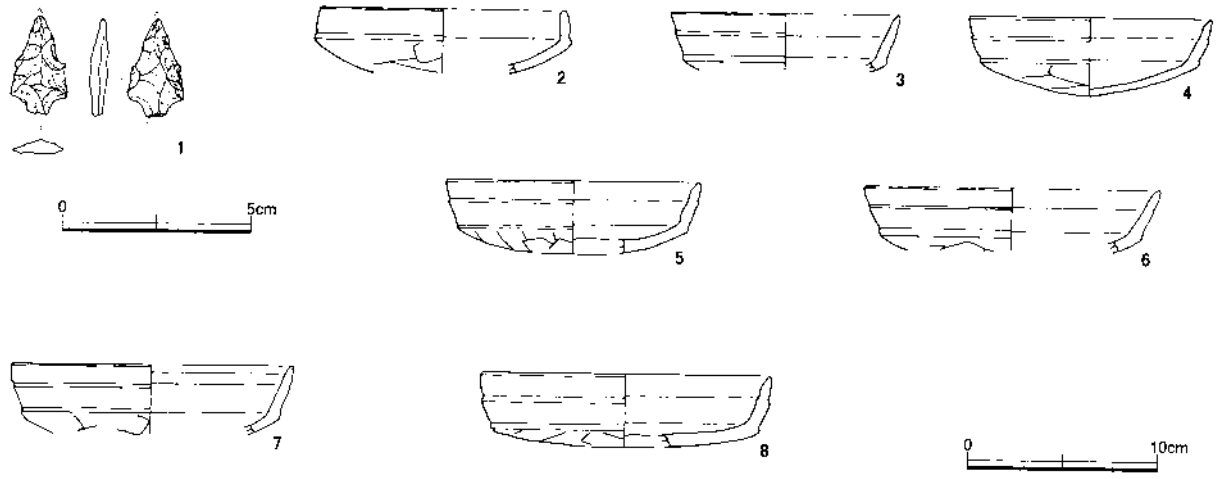
図示できた遺物は、第20図２～６である。２は土師器有段口縁坏、３・４は土錘、５・６は編物石である。２・５・６は床面直上から出土した。



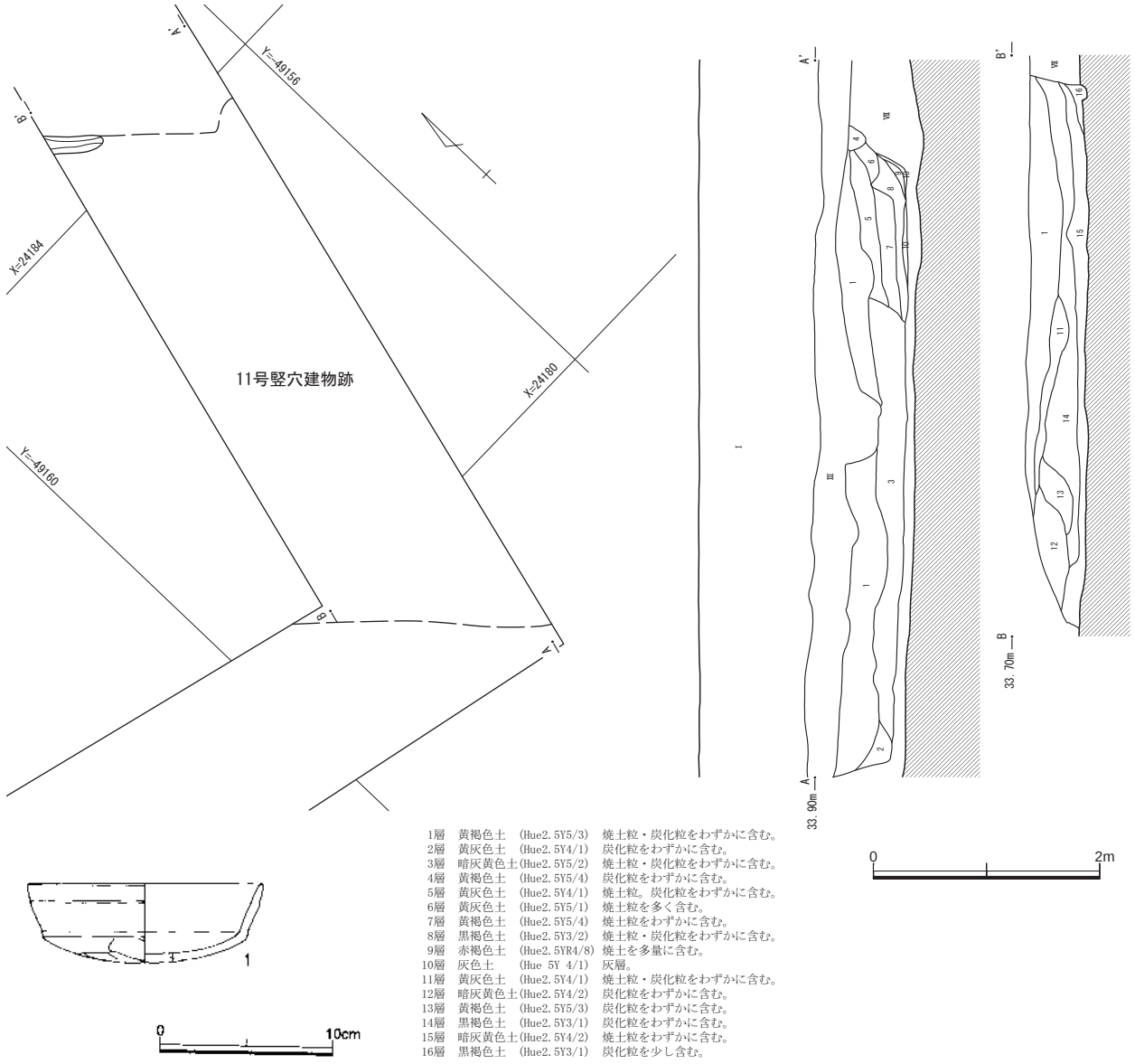
第23図　第10号竪穴建物跡

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	残存	備　　考
1		有茎石鏃	長(2.8)	幅1.5	厚0.4	石材　凝灰岩				重さ　1.37ｇ
2	H	坏	(12.8)			ＡＢＣＥＩ	普	橙	20%	
3	H	坏	(12.0)			ＡＢＣＥ	普	にぶい赤褐	20%	
4	H	坏	(12.7)	4.1		ＡＢＣＥＩ	普	暗褐	15%	
5	H	坏	(13.2)	(3.9)		ＡＢＣＥＩ	良	橙	40%	
6	H	坏	(15.4)			ＡＣＥＩ	普	暗褐	15%	
7	H	坏	(14.8)			ＡＢＣＥＩ	普	暗褐	20%	
8	H	坏	(15.2)	(3.9)		ＡＢＣＥＩ	普	橙	25%	

第13表　第10号竪穴建物跡出土遺物観察表

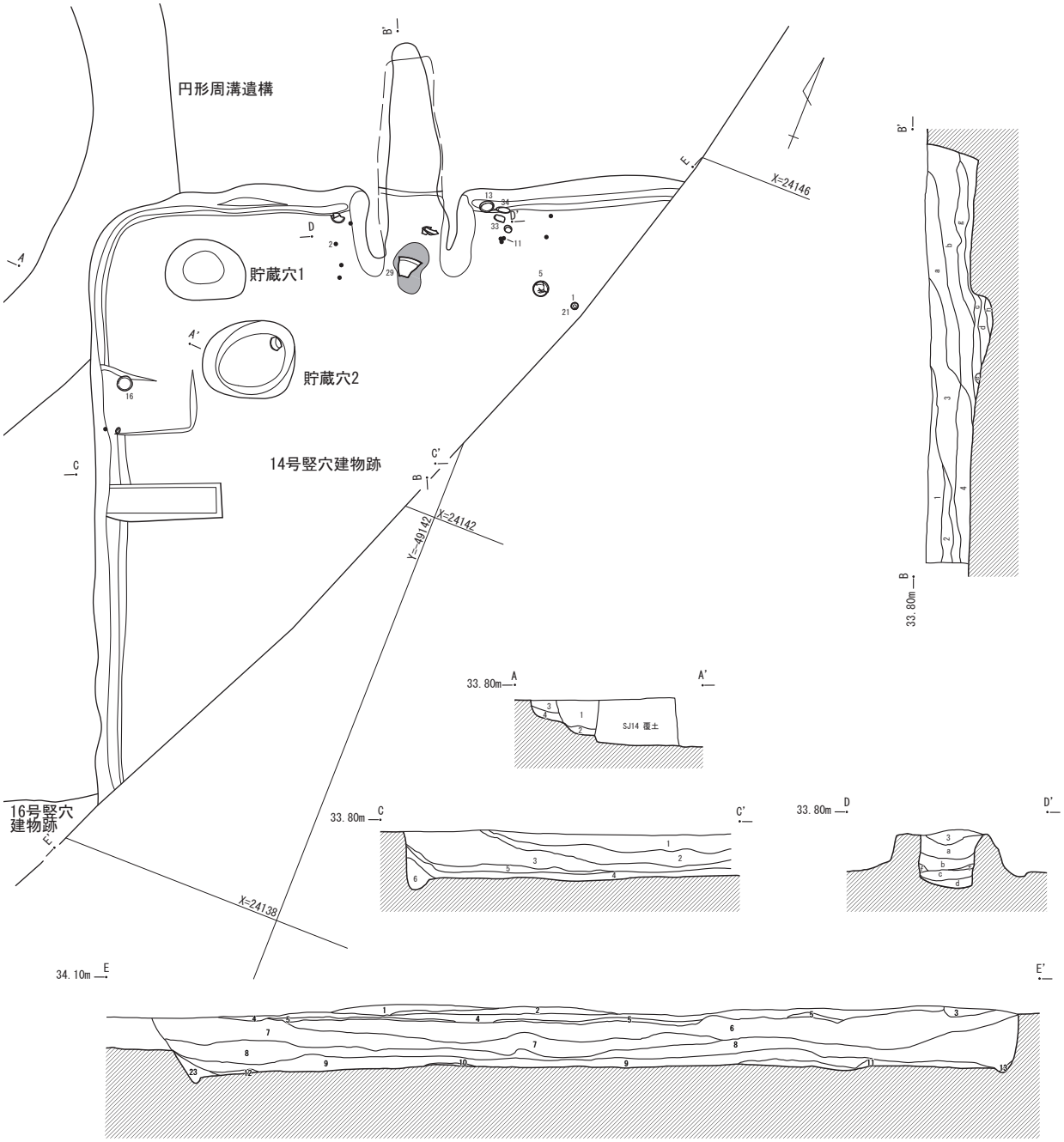


第24図　第10号竪穴建物跡出土遺物



1層　黄褐色土　(Hue2.5Y5/3)　焼土粒・炭化粒をわずかに含む。
2層　黄灰色土　(Hue2.5Y4/1)　炭化粒をわずかに含む。
3層　暗灰黄色土(Hue2.5Y5/2)　焼土粒・炭化粒をわずかに含む。
4層　黄褐色土　(Hue2.5Y5/4)　炭化粒をわずかに含む。
5層　黄灰色土　(Hue2.5Y4/1)　焼土粒。炭化粒をわずかに含む。
6層　黄灰色土　(Hue2.5Y5/1)　焼土粒を多く含む。
7層　黄褐色土　(Hue2.5Y5/4)　焼土粒をわずかに含む。
8層　黒褐色土　(Hue2.5Y3/2)　焼土粒・炭化粒をわずかに含む。
9層　赤褐色土　(Hue2.5YR4/8) 焼土を多量に含む。
10層　灰色土　(Hue 5Y 4/1)　灰層。
11層　黄灰色土　(Hue2.5Y4/1)　焼土粒・炭化粒をわずかに含む。
12層　暗灰黄色土(Hue2.5Y4/2)　炭化粒をわずかに含む。
13層　黄褐色土　(Hue2.5Y5/3)　炭化粒をわずかに含む。
14層　黒褐色土　(Hue2.5Y3/1)　炭化粒をわずかに含む。
15層　暗灰黄色土(Hue2.5Y4/2)　焼土粒をわずかに含む。
16層　黒褐色土　(Hue2.5Y3/1)　炭化粒を少し含む。

第25図　第11号竪穴建物跡及び出土遺物



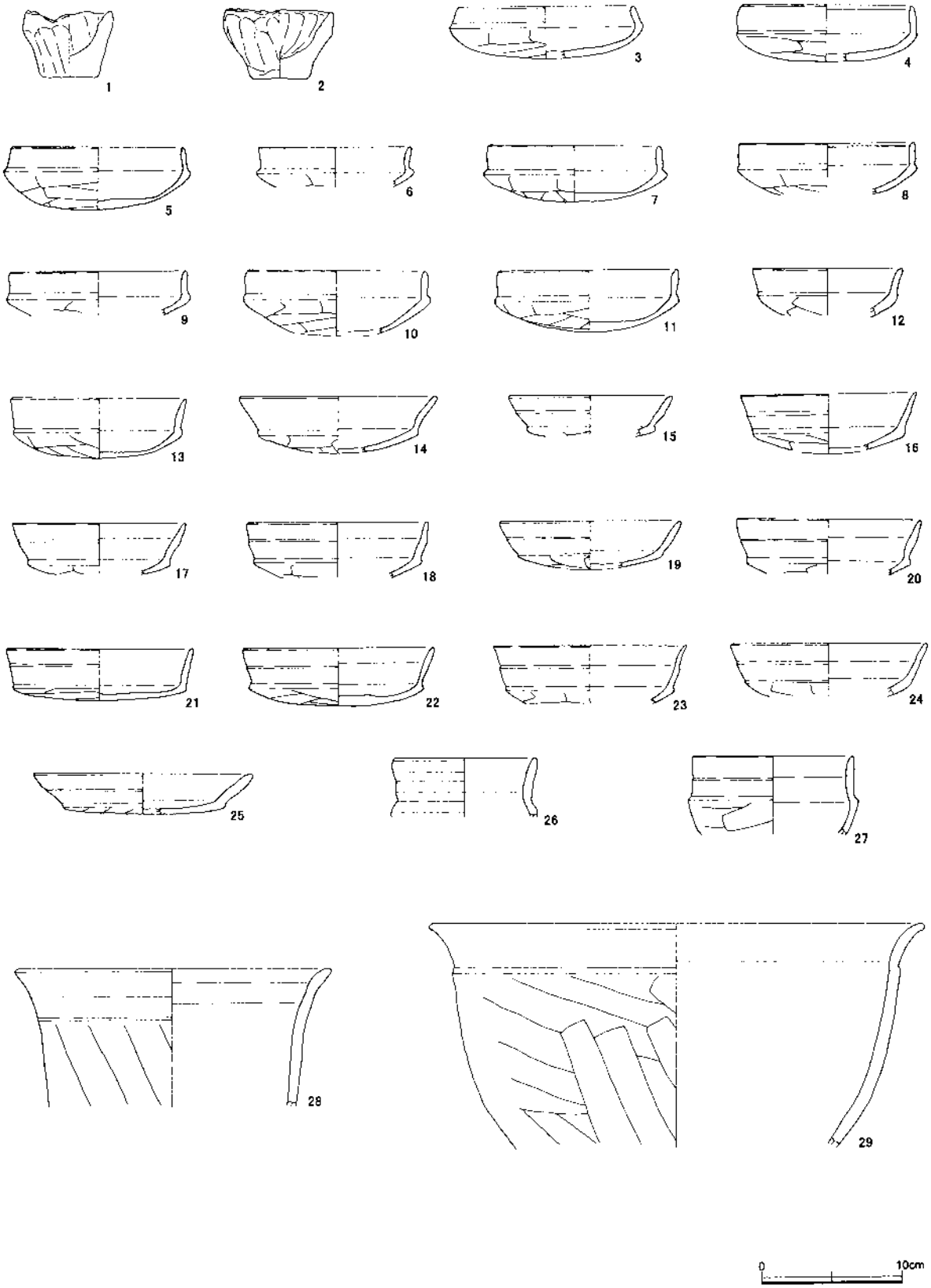
A-A'
1層　黄灰色土(Hue2.5Y4/1)　焼土粒を含む。
2層　黄褐色土(Hue2.5Y5/4)　焼土粒をわずかに含む。
3層　黄灰色土(Hue2.5Y4/1)　焼土粒・炭化粒をわずかに含む。
4層　黄褐色土(Hue2.5Y5/4)　焼土粒をわずかに含む。

0　2m

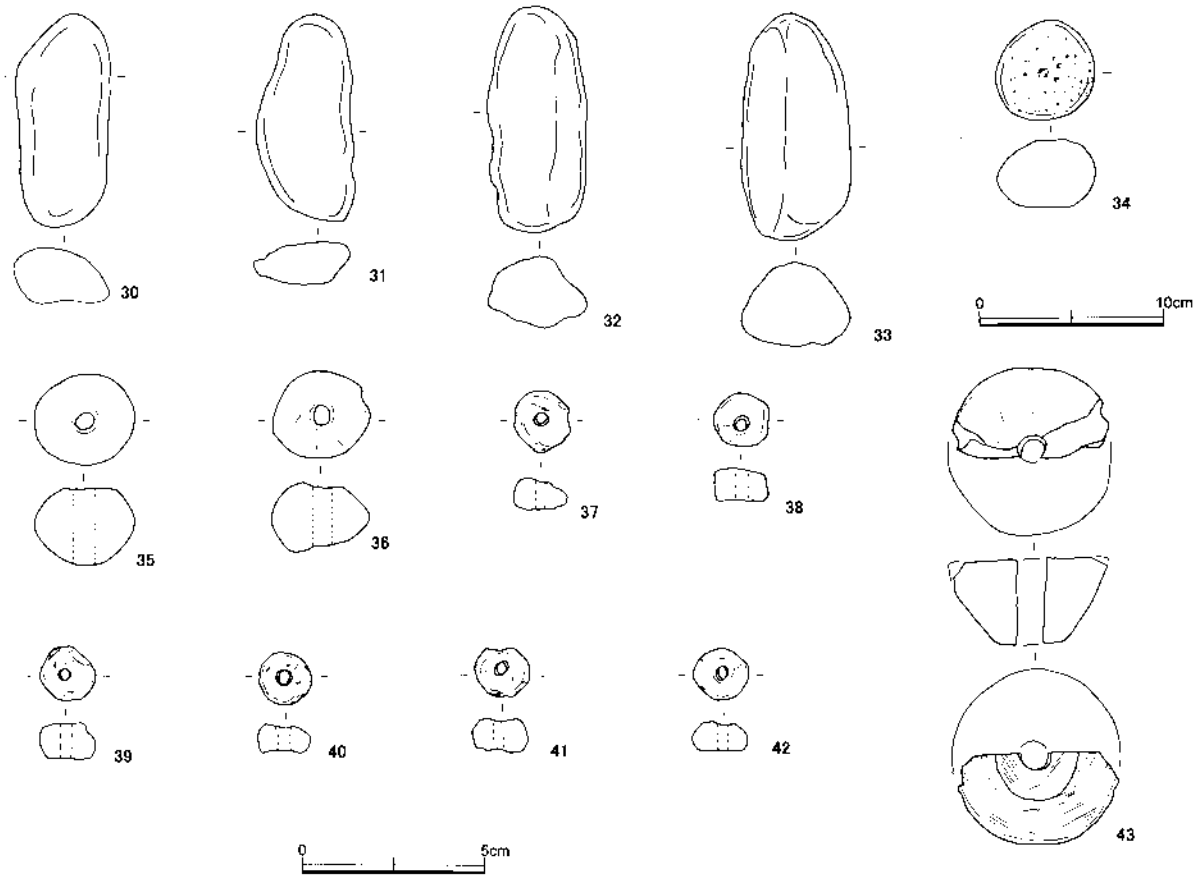
B-B' C-C' D-D'
1層　暗灰黄色土 (Hue2.5Y4/2)　焼土粒・炭化粒を含む。
2層　黒褐色土　(Hue2.5Y3/2)　焼土粒・炭化粒を少し含む。
3層　暗灰黄色土 (Hue2.5Y4/2)　焼土粒を含む。
4層　黄褐色土　(Hue2.5Y5/4)　焼土粒・炭化粒を少し含む。
5層　黒褐色土　(Hue2.5Y3/2)　焼土粒を少し含む。
6層　ｵﾘｰﾌﾞ褐色土(Hue2.5Y4/4)　炭化粒をわずかに含む。
a層　黄褐色土　(Hue2.5Y5/4)　焼土粒・炭化粒を少し含む。
b層　黄褐色土　(Hue2.5Y5/3)　焼土粒・炭化粒を含む。
c層　灰色土　(Hue 5Y 4/1)　灰層。焼土粒・炭化粒を多く含む。
d層　暗灰黄色土 (Hue2.5Y4/2)　灰・焼土粒・炭化粒を多く含む。
e層　明黄褐色土 (Hue2.5Y6/6)　黄褐色土ブロック。
f層　赤褐色土　(Hue5YR 4/6)　焼土を多量に含む。
g層　赤褐色土　(Hue5YR 4/6)　焼土を多量に含む。
h層　黄灰色土　(Hue2.5Y6/1)　焼土・灰を多く含む。

E-E'
1層　黄灰色土　(Hue2.5Y5/1)　焼土粒をわずかに含む。
2層　黄褐色土　(Hue2.5Y5/4)　焼土粒をわずかに含む。
3層　黄褐色土　(Hue2.5Y5/3)　焼土粒をわずかに含む。
4層　黄灰色土　(Hue2.5Y4/1)　焼土粒・炭化粒を少し含む。
5層　黒褐色土　(Hue2.5Y3/1)　焼土粒・炭化粒を多く含む。
6層　暗灰黄色土 (Hue2.5Y4/2)　焼土粒・炭化粒を含む。
7層　黒褐色土　(Hue2.5Y3/2)　焼土粒・炭化粒を少し含む。
8層　暗灰黄色土 (Hue2.5Y4/2)　焼土粒を含む。
9層　黄褐色土　(Hue2.5Y5/4)　焼土粒・炭化粒を少し含む。
10層　黄灰色土　(Hue2.5Y5/1)　粘土層。
11層　黄灰色土　(Hue2.5Y4/1)　焼土粒・炭化粒を少し含む。
12層　黄灰色土　(Hue2.5Y4/1)　焼土粒・炭化粒を多く含む。
13層　ｵﾘｰﾌﾞ褐色土(Hue2.5Y4/4)　炭化粒をわずかに含む。

第26図　第14号竪穴建物跡



第27図　第14号竪穴建物跡出土遺物(1)



第28図　第14号竪穴建物跡出土遺物(2)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	H	ﾐﾆﾁｭｱ	6.1	4.6	4.0	ＡＢＣＥＩ	普	橙	100%	
2	H	ﾐﾆﾁｭｱ	7.6	5.0	3.6	ＡＢＣＥ	普	橙	100%	
3	H	坏	(12.5)	(3.7)		ＡＢＣＥＩ	普	黒褐	25%	
4	H	坏	(12.2)	(4.0)		ＡＢＣＥ	普	橙	25%	
5	H	坏	12.3	4.5		ＡＢＣＥＩ	普	橙	95%	
6	H	坏	(11.0)			ＡＢＣＥＩ	普	橙	10%	
7	H	坏	12.1	4.0		ＡＢＣＥＩ	普	橙	55%	
8	H	坏	(12.4)			ＡＢＣＥＩ	普	暗褐	20%	
9	H	坏	(12.6)			ＡＢＣＥＩ	普	暗褐	10%	
10	H	坏	(12.6)	(4.7)		ＡＢＣＥ	普	橙	30%	
11	H	坏	12.7	4.5		ＡＢＣＥＩ	普	橙	100%	
12	H	坏	(10.6)			ＡＢＣＥＩ	普	橙	20%	
13	H	坏	12.5	4.3		ＡＢＣＥＩ	普	灰褐	80%	
14	H	坏	(14.0)	(4.0)		ＡＢＣＥＩ	普	橙	25%	
15	H	坏	(11.6)			ＡＢＣＥ	普	橙	10%	
16	H	坏	(12.4)	(4.3)		ＡＢＣＥＩ	普	橙	25%	
17	H	坏	(12.4)			ＡＢＣＥ	普	橙	15%	
18	H	坏	(12.8)			ＡＢＣＥＩ	普	橙	15%	
19	H	坏	(12.8)	(3.5)		ＡＢＣＥＩ	普	橙	40%	
20	H	坏	(13.0)			ＡＣＥ	普	橙	15%	

第14表　第14号竪穴建物跡出土遺物観察表(1)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
21	H	坏	(13.3)	3.7		ＡＢＣＥＩ	普	橙	50%	
22	H	坏	13.6	4.1		ＡＢＣＥ	普	橙	100%	
23	H	坏	(13.6)			ＡＢＣＥＩ	普	橙	15%	
24	H	坏	(13.8)			ＡＢＣＥ	普	にぶい赤褐	20%	
25	H	坏	(15.6)	(2.9)		ＡＢＣＥＩ	普	橙	25%	
26	H	椀	(10.0)			ＡＣＥＨ	普	橙	15%	
27	H	椀	(11.4)			ＡＢＣＥＩ	普	橙	20%	
28	H	甕	(22.4)			ＡＢＣＥＨ	普	赤褐	10%	
29	H	鉢	(35.0)			ＡＢＣＥ	普	橙	25%	
30		編物石	長11.6	幅5.2	厚3.1	石材　砂岩				重さ　302ｇ
31		編物石	長11.2	幅5.2	厚2.3	石材　砂岩				重さ　223ｇ
32		編物石	長12.5	幅5.4	厚3.9	石材　砂岩				重さ　392ｇ
33		編物石	長12.5	幅6.0	厚4.6	石材　砂岩				重さ　452ｇ
34			長5.5	幅5.4	厚3.7	石材　安山岩				重さ　60ｇ
35		土玉	長2.5	幅2.7	厚2.1					重さ　12.45ｇ
36		土玉	長2.4	幅2.6	厚1.9					重さ　9.07ｇ
37		臼玉	長1.7	幅1.5	厚0.8	石材　滑石				重さ　3.1ｇ
38		臼玉	長1.4	幅1.5	厚0.9	石材　滑石				重さ　2.61ｇ
39		臼玉	長1.5	幅1.5	厚1.0	石材　滑石				重さ　2.81ｇ
40		臼玉	長1.5	幅1.4	厚0.8	石材　滑石				重さ　3.62ｇ
41		臼玉	長1.3	幅1.5	厚0.9	石材　滑石				重さ　3.13ｇ
42		臼玉	長1.4	幅1.5	厚0.8	石材　滑石				重さ　2.46ｇ
43		紡錘車		幅(4.5)	厚2.4	石材　絹雲母片岩				重さ　31.61ｇ

第15表　第14号竪穴建物跡出土遺物観察表(2)

遺構の時期は、６世紀後半～７世紀前半と推定される。

第14号竪穴建物跡（第26～28図、第14・15表）

調査区南東部に位置し、第16号竪穴建物跡を切り、第１号円形周溝遺構に切られる。平面形態は方形で、一辺5.5m以上を測る。主軸方位はＮ－22°－Ｗである。床面はほぼ平坦で、確認面からの深さは55cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

カマドは北西壁に構築される。袖は地山の削り出しで造られる。燃焼部は幅50cm、奥行80cmで底面は赤く焼けていた。燃焼部は奥壁に向かってやや深くなり、床面からの深さは最深部で15cmである。煙道は床面とほぼ同じ深さで、長さは1.4mを測る。先端部は急角度で立ち上がる。

貯蔵穴は北西隅から２基確認された。貯蔵穴１は長径75cm、短径55cmの楕円形で、床面からの深さ60cm、貯蔵穴２は長径85cm、短径70cmの楕円形で、床面からの深さ35cmを測る。壁溝は幅10～15cm、床面からの深さ５cmで全周する。

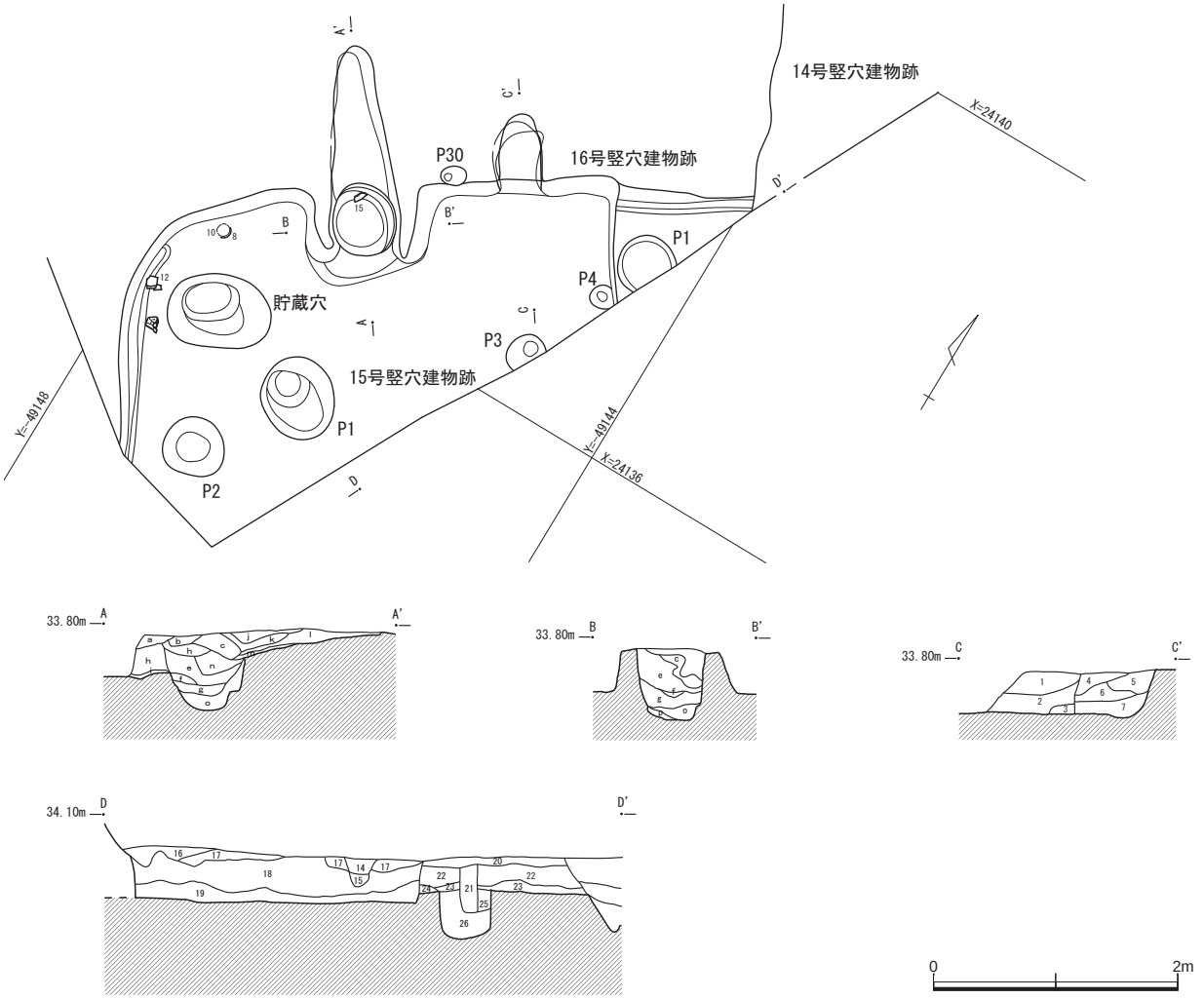
図示できた遺物は、第27図１～第28図43である。１～29は土師器で、１・２はミニチュア土器、３～14は模倣坏、15～25は有段口縁坏、26・27は有段口縁の椀、28は甕、29は鉢である。30～33は編物石、34は安山岩の礫、35・36は土玉、37～42は滑石製臼玉、43は絹雲母片岩製紡錘車である。１・２・５・11・13・16・21・29・33・34は床面直上から出土した。

遺構の時期は、６世紀後半～７世紀前半と推定される。

第15号竪穴建物跡（第29・30図、第16表）

調査区南東部に位置し、第16号竪穴建物跡を切る。平面形態は方形で、一辺約４ｍを測る。主軸方位はＮ－33°－Ｗである。床面はほぼ平坦で、確認面からの深さは40cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

カマドは北西壁ほぼ中央に構築される。袖は地山の



A-A' B-B'

a層　黄褐色土　(Hue2.5Y5/4)　焼土粒・炭化粒をやや多く含む。
b層　明黄褐色土 (Hue2.5Y6/6)　焼土粒をわずかに含む。
c層　黄褐色土　(Hue2.5Y5/4)　焼土粒を含む。
e層　黒褐色土　(Hue2.5Y3/1)　焼土粒・炭化粒を含む。
f層　ｵﾘｰﾌﾞ褐色土(Hue2.5Y4/3)　焼土粒をわずかに含む。
g層　黄灰色土　(Hue2.5Y4/1)　焼土粒・炭化粒を含む。
h層　黄褐色土　(Hue2.5Y5/3)　焼土粒・炭化粒を含む。
i層　黄灰色土　(Hue2.5Y4/1)　灰層。焼土粒を含む。
j層　暗灰黄色土 (Hue2.5Y5/2)　焼土粒をわずかに含む。
k層　黒褐色土　(Hue2.5Y3/1)　焼土を多量に含む。
l層　黄灰色土　(Hue2.5Y4/1)　焼土粒をやや多く含む。
m層　暗灰黄色土 (Hue2.5Y5/2)　焼土粒を多く含む。
n層　黒褐色土　(Hue2.5Y5/2)　焼土粒・炭化粒を含む。
o層　暗灰黄色土 (Hue2.5Y4/2)　焼土粒・炭化粒を含む。
p層　黄褐色土　(Hue2.5Y5/4)　焼土粒を少し含む。

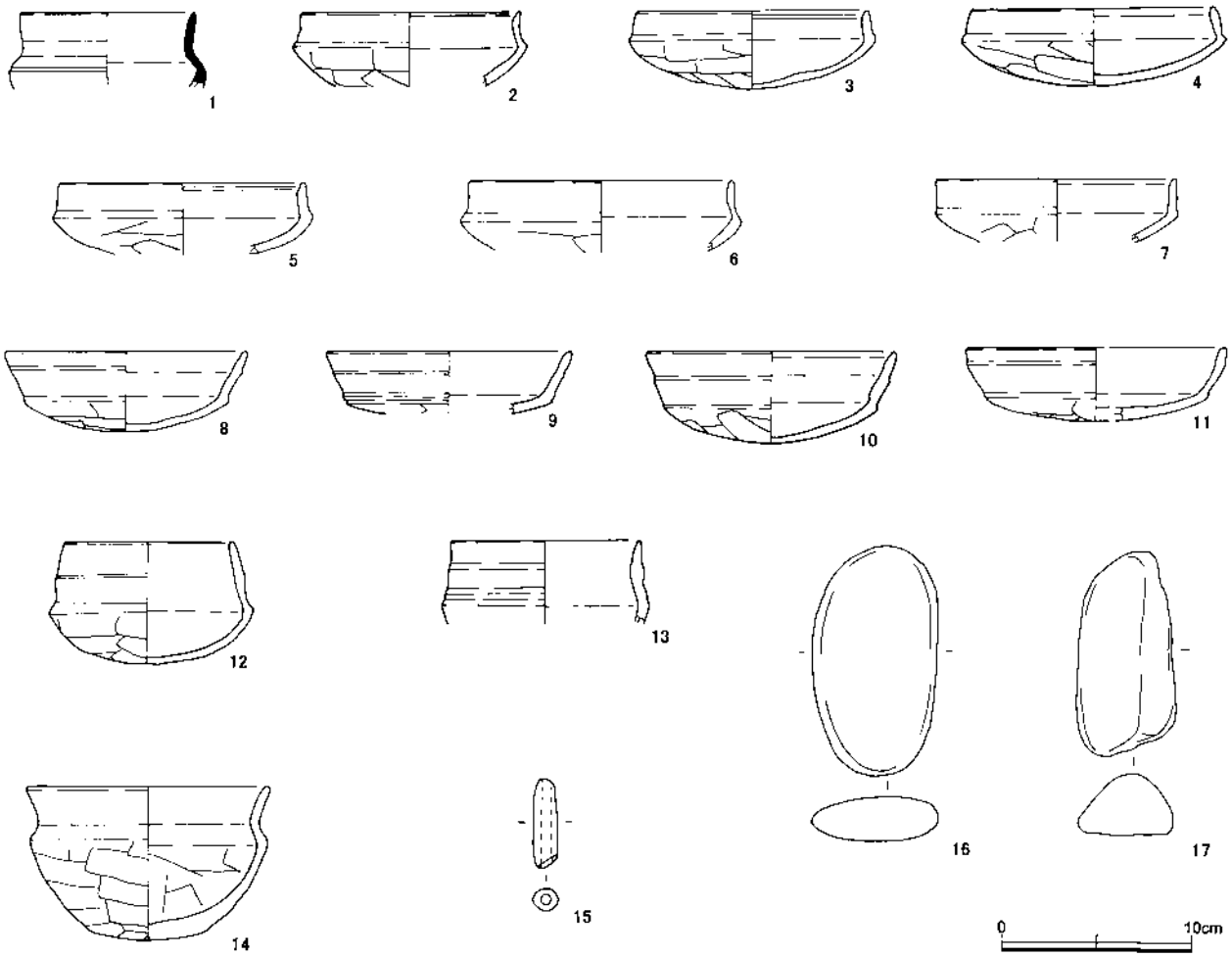
C-C'

1層　黄褐色土　(Hue2.5Y5/4)　焼土粒・炭化粒をやや多く含む。
2層　黄褐色土　(Hue2.5Y5/3)　焼土粒・炭化粒を含む。
3層　暗灰黄色土(Hue2.5Y5/2)　焼土粒を多く含む。
4層　暗灰黄色土(Hue2.5Y5/2)　焼土粒を少し含む。
5層　黄褐色土　(Hue2.5Y5/3)　焼土粒を含む。
6層　黒褐色土　(Hue2.5Y3/2)　焼土粒を多く含む。
7層　黒褐色土　(Hue2.5Y3/1)　焼土粒・炭化粒を多く含む。

D-D'

14層　黄灰色土　(Hue2.5Y4/1)　焼土粒・炭化粒を含む。
15層　暗灰黄色土 (Hue2.5Y4/2)　炭化粒をわずかに含む。
16層　黄灰色土　(Hue2.5Y5/1)　焼土粒を含む。
17層　黒褐色土　(Hue2.5Y3/2)　焼土粒・炭化粒を多量に含む。
18層　黄褐色土　(Hue2.5Y5/4)　焼土粒・炭化粒を含む。
19層　暗灰黄色土 (Hue2.5Y4/2)　焼土粒・炭化粒を含む。
20層　黄灰色土　(Hue2.5Y4/1)　焼土粒・炭化粒を含む。
21層　黒褐色土　(Hue2.5Y3/1)　焼土粒・炭化粒を含む。
22層　暗灰黄色土 (Hue2.5Y4/2)　焼土粒・炭化粒を含む。
23層　暗ｵﾘｰﾌﾞ褐色土(Hue2.5Y3/3)炭化粒を少し含む。
24層　黄灰色土　(Hue2.5Y4/1)　焼土粒・炭化粒を含む。
25層　黒褐色土　(Hue2.5Y3/2)　焼土粒・炭化粒を少し含む。
26層　ｵﾘｰﾌﾞ褐色土(Hue2.5Y3/3)　焼土粒・炭化粒を含む。

第29図　第15・16号竪穴建物跡



第30図　第15号竪穴建物跡出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	S	坏	(9.2)			ＡＣ	良	灰	10%	
2	H	坏	(11.6)			ＡＢＣＥＩ	普	橙	25%	
3	H	坏	(12.2)	4.1		ＡＢＣＥＩ	普	赤褐	50%	
4	H	坏	12.8	4.1		ＡＢＣＥＩ	普	橙	60%	
5	H	坏	(13.0)			ＡＢＣＥＩ	普	橙	20%	
6	H	坏	(13.8)			ＡＢＣＥＩ	普	橙	15%	
7	H	坏	(12.5)			ＡＢＣＥＩ	普	橙	15%	
8	H	坏	(12.8)	4.2		ＡＣＥＩ	普	黄橙	40%	
9	H	坏	(12.8)			ＡＢＣＥＩ	普	暗褐	15%	
10	H	坏	13.2	4.8		ＡＢＣＥＩ	良	にぶい橙	100%	
11	H	坏	(13.6)	(3.9)		ＡＢＣＥＩ	普	橙	20%	
12	H	椀	9.0	6.5		ＡＢＣＥＩ	普	にぶい橙	80%	
13	H	椀	(10.0)			ＡＢＣＥＩ	普	にぶい橙	15%	
14	H	椀	12.8	8.1		ＡＢＣＥＩ	普	橙	70%	
15	H	土錘		幅 1.3	厚 1.2	ＡＣＥＩ	普	橙	80%	重さ　6.47 g
16		編物石	長 12.1	幅 6.6	厚 2.3	石材　砂岩				重さ　286 g
17		編物石	長 10.5	幅 5.2	厚 3.2	石材　砂岩				重さ　315 g

第16表　第15号竪穴建物跡出土遺物観察表

削り出しで造られる。燃焼部は幅55cm、奥行70cmで、底面は直径50cmのピット状に掘り込まれる。床面からの深さは30cmである。煙道は幅50cm、長さ1.1mで、緩やかな傾斜で先端へと向かう。煙道の最深部は、確認面から20cmの深さである。

貯蔵穴は北西隅で確認された。長径85cm、短径60cmの楕円形で、床面からの深さは50cmである。壁溝は幅10cm、床面からの深さ５cmで、南西壁で確認された。ピットは４基確認された。Ｐ１は直径60cm、床面からの深さ45cm、Ｐ２は直径50cm、床面からの深さ30cm、Ｐ３は直径30cm、床面からの深さ55cm、Ｐ４は直径20cm、床面からの深さ５cmを測る。

図示できた遺物は、第30図１～16である。１は須恵器坏である。２～15は土師器で、２～７は模倣坏、８～11は有段口縁坏、12・13は有段口縁の椀、14・15は椀、16は土錘である。床面からの出土レベルは、8・10は５cm、12は２cm、15は31cmである。

遺構の時期は、６世紀後半～７世紀前半と推定される。

第16号竪穴建物跡（第29図）

調査区南東部に位置し、第14・15号竪穴建物跡に切られる。カマド先端部と壁溝の一部が確認されたのみである。床面はほぼ平坦で、確認面から床面までの深さは30cmを測る。

カマドは煙道部のみ残っており、幅35cm、長さ55cm、確認面からの深さは35cmを測る。先端部は急角度で立ち上がる。壁溝は幅15cm、床面からの深さは５cm弱である。ピットは１基確認された。直径45cm、床面からの深さ40cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

３　掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡（第31図、第35図１、第17表）

調査区南東部に位置する。総柱式掘立柱建物跡で、２×２間（一辺3.7m）、柱間は1.85mを測る。主軸方位はＮ－42°－Ｅである。

柱の掘方は、直径60～80cmの円形を基本とする。柱穴の確認面からの深さは、Ｐ１が46cm、Ｐ２が55cm、Ｐ３が34cm、Ｐ４が38cm、Ｐ５が31cm、Ｐ６が37cm、Ｐ７が53cm、Ｐ８が87cm、Ｐ９が89cmを測る。柱は柱痕跡を残し、柱痕跡から、柱の直径は15cm程度と推定される。

図示できる遺物は、第35図１である。土師器鉢で、Ｐ８から出土した。

第２号掘立柱建物跡（第32図）

調査区南東部に位置する。一部攪乱を受け、また調査区外に延びるため、全体像は不明だが、総柱式掘立柱建物跡と思われる。柱間は桁行が1.6m、梁行が1.4mを測る。主軸方位はＮ－29°－Ｅである。

柱の掘方は、直径45～50cmの円形を基本とする。柱穴の確認面からの深さは、Ｐ１が47cm、Ｐ２が51cm、Ｐ３が62cm、Ｐ４が46cmを測る。柱は柱痕跡を残し、柱痕跡から、柱の直径は10～15cm程度と推定される。

図示できる遺物は出土しなかった。

第３号掘立柱建物跡（第32図）

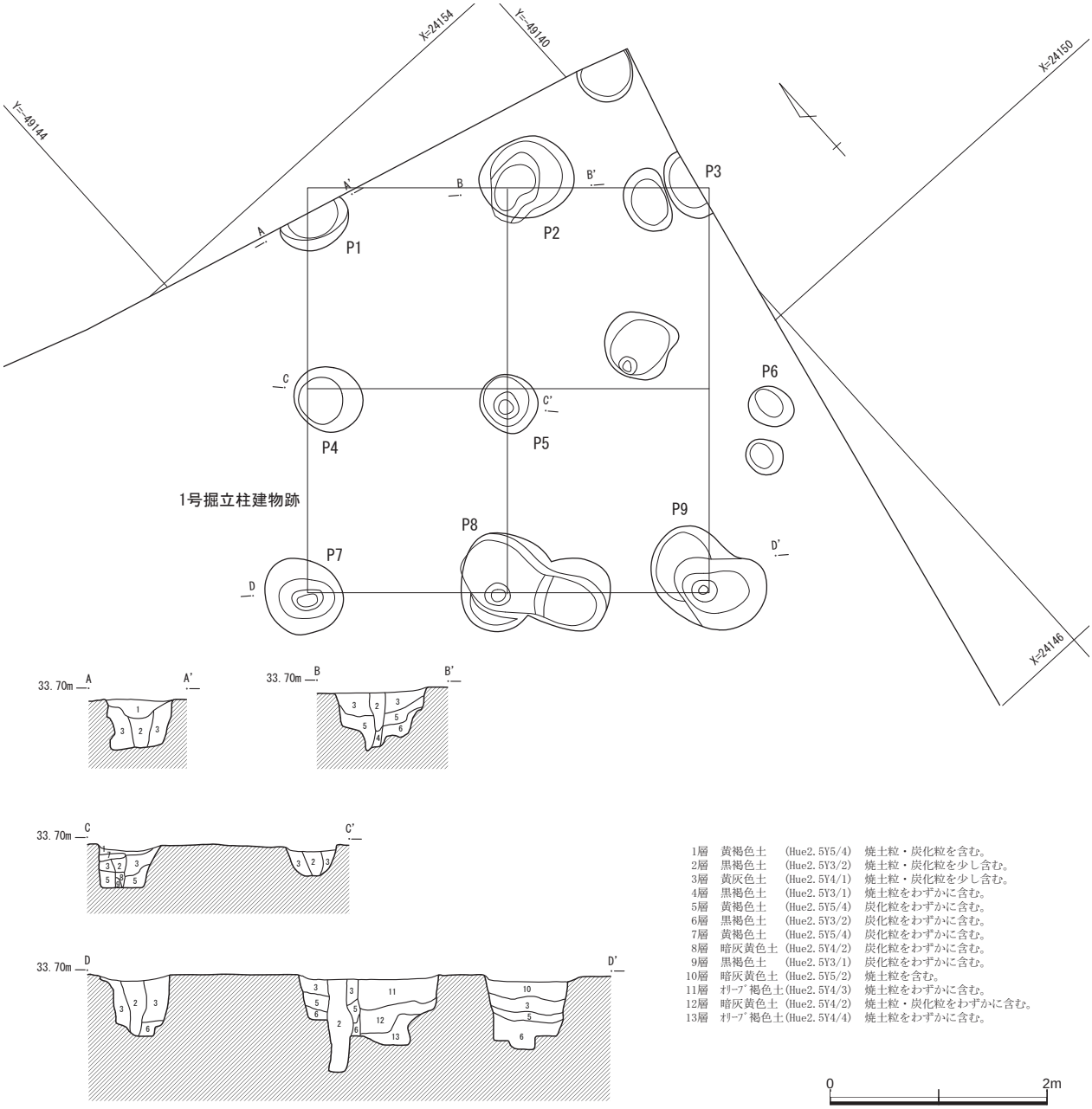
調査区南東部に位置する。北西部が攪乱を受けているため、全体像は不明である。南北軸が２間（3.1m）、柱間は北から1.5m－1.6mを測る。主軸方位はＮ－35°－Ｅである。

柱の掘方は長径80cm程度、短径60cm程度の楕円形を基本とする。柱穴の確認面からの深さは、Ｐ１が64cm、Ｐ２が51cm、Ｐ３が57cmを測る。柱は柱痕跡を残し、柱痕跡から、柱の直径は10～15cm程度と推定される。

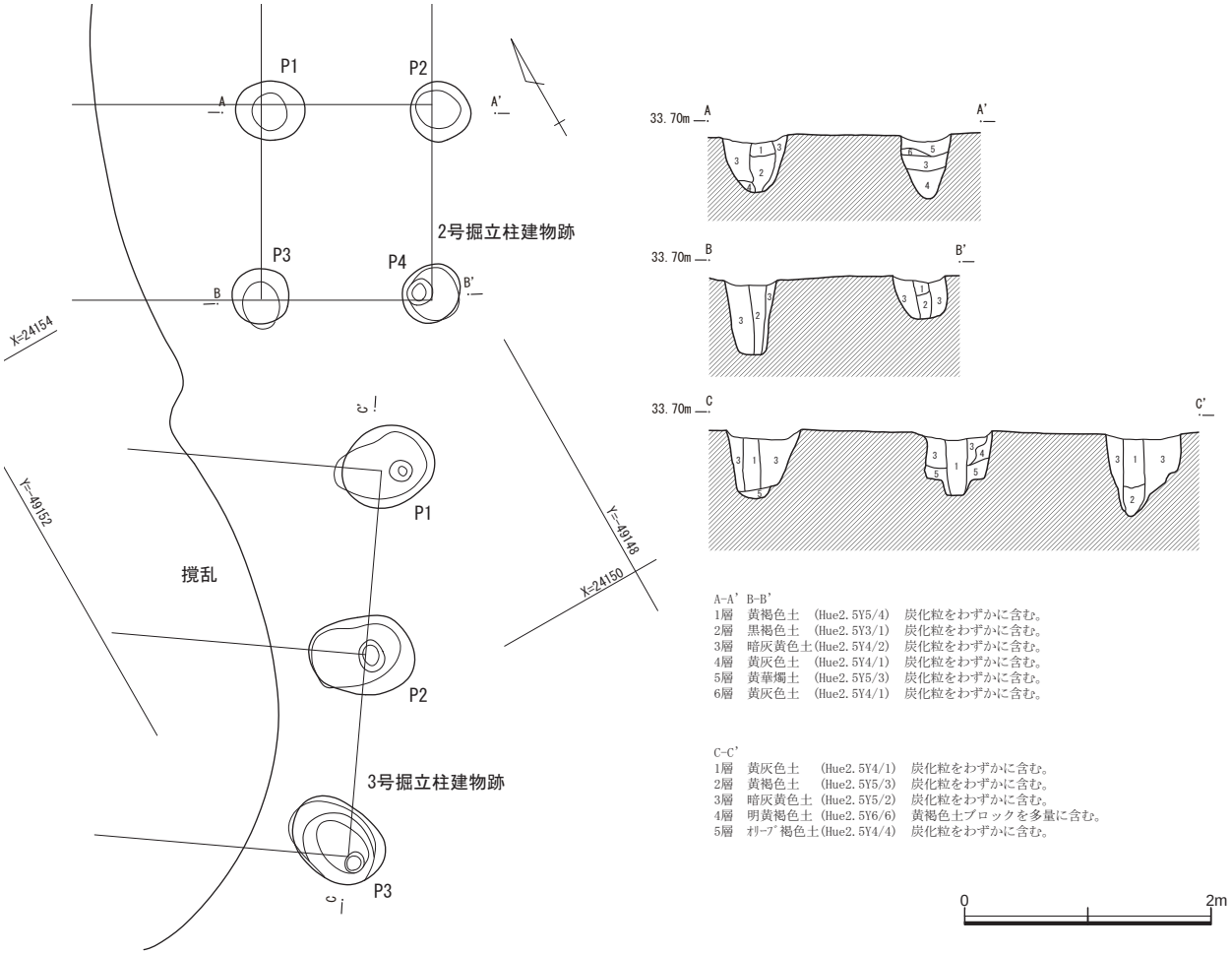
図示できる遺物は出土しなかった。

第４号掘立柱建物跡（第33図、第35図２～４、第17表）

調査区南東部に位置する。総柱式掘立柱建物跡で、桁行２間（3.0m）×梁行２間（2.9m）、柱間は桁行が



第31図　第１号掘立柱建物跡



第32図　第２・３号掘立柱建物跡

1.5m、梁行が西から1.4m－1.5mを測る。主軸方位はＮ－24°－Ｅである。

柱の掘方は、直径55～90cmの円形又は楕円形を基本とする。柱穴の確認面からの深さは、Ｐ１が58cm、Ｐ２が59cm、Ｐ３が48cm、Ｐ４が56cm、Ｐ５が42cm、Ｐ６が59cm、Ｐ７が43cm、Ｐ８が53cm、Ｐ９が47cmを測る。柱は柱痕跡を残し、柱痕跡から、柱の直径は15cm程度と推定される。

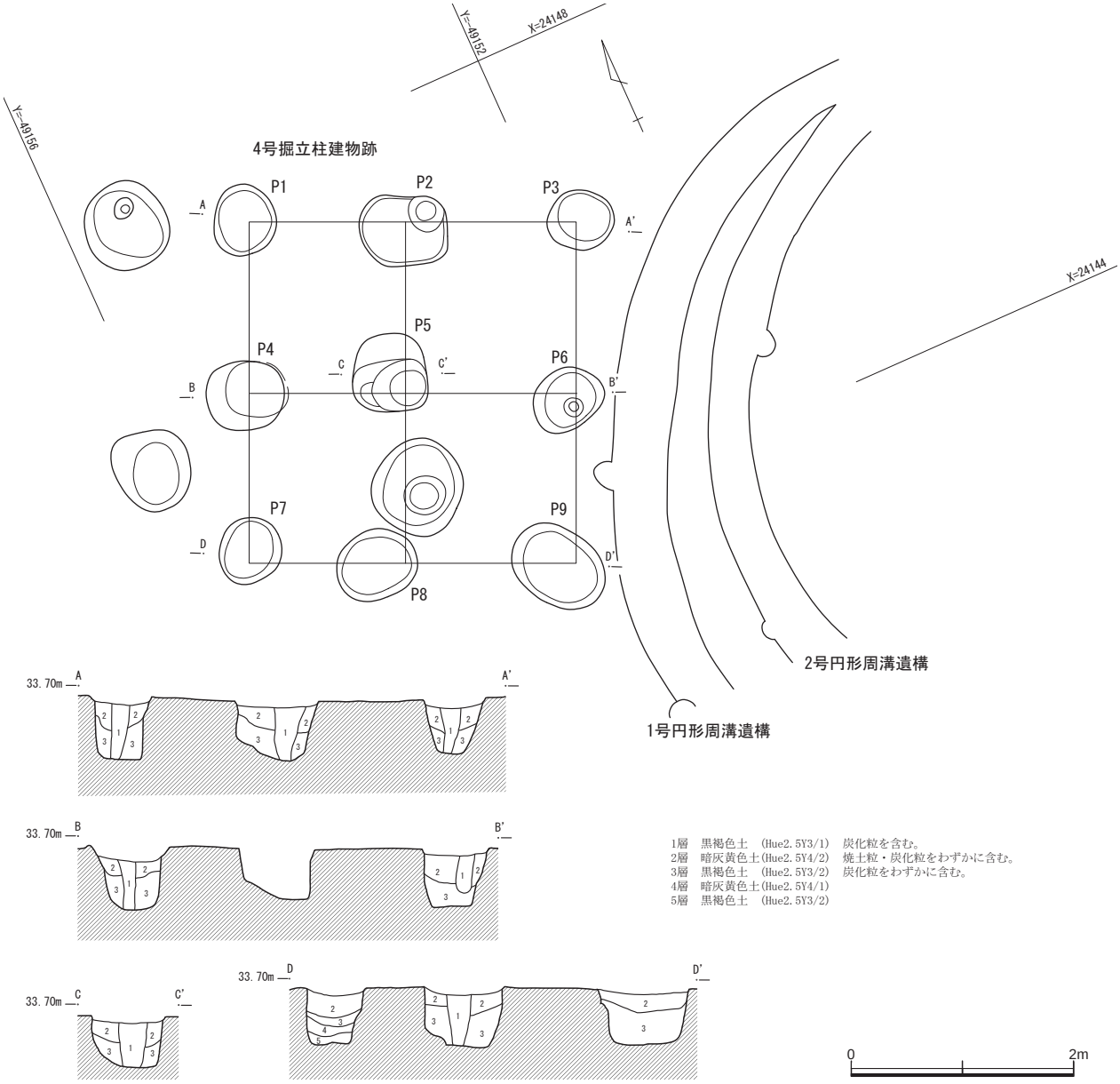
図示できた遺物は、第35図２～４である。全てＰ８出土で、須恵器甕である。

第５号掘立柱建物跡（第34図、第35図５～７、第17表）

調査区南東部に位置する。南側が調査区外にあるため、全体像は不明だが、総柱式掘立柱建物と思われる。Ｐ１－Ｐ２が2.75mを測り、その中間柱は確認されなかった。掘方が浅いため、消滅した可能性がある。柱間は西から1.55m－1.2mを測る。主軸方位はＮ－17°－Ｅである。

柱の掘方は、直径40～60cmの円形を基本とする。柱穴の確認面からの深さは、Ｐ１が10cm、Ｐ２が19cm、Ｐ４が15cm、Ｐ５が43cmを測る。柱は柱痕跡を残し、柱痕跡から、柱の直径は10～15cm程度と推定される。

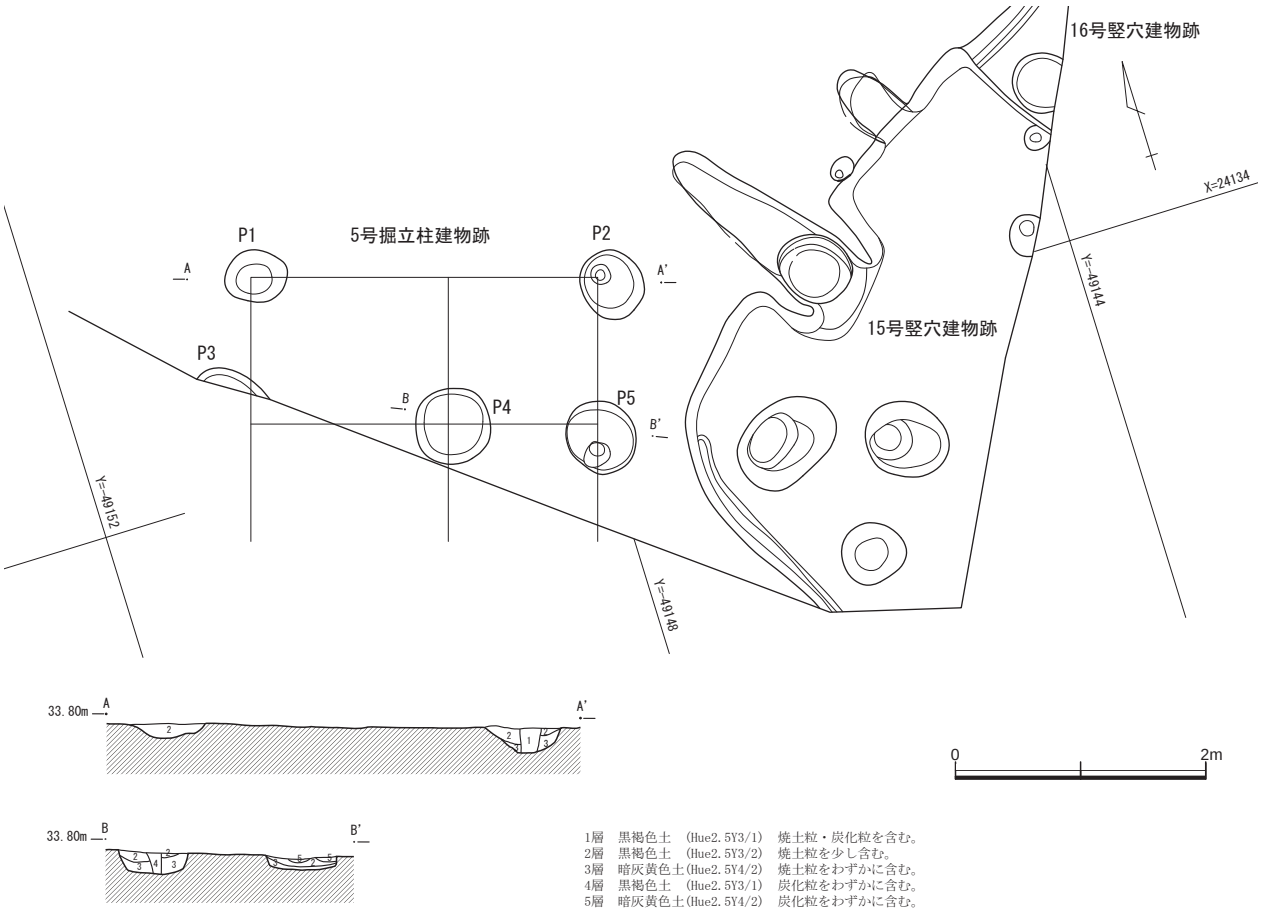
図示できた遺物は、第35図５～７である。５・６はＰ２出土で、５は有段口縁坏、６は模倣坏である。７はＰ５出土の鉢である。



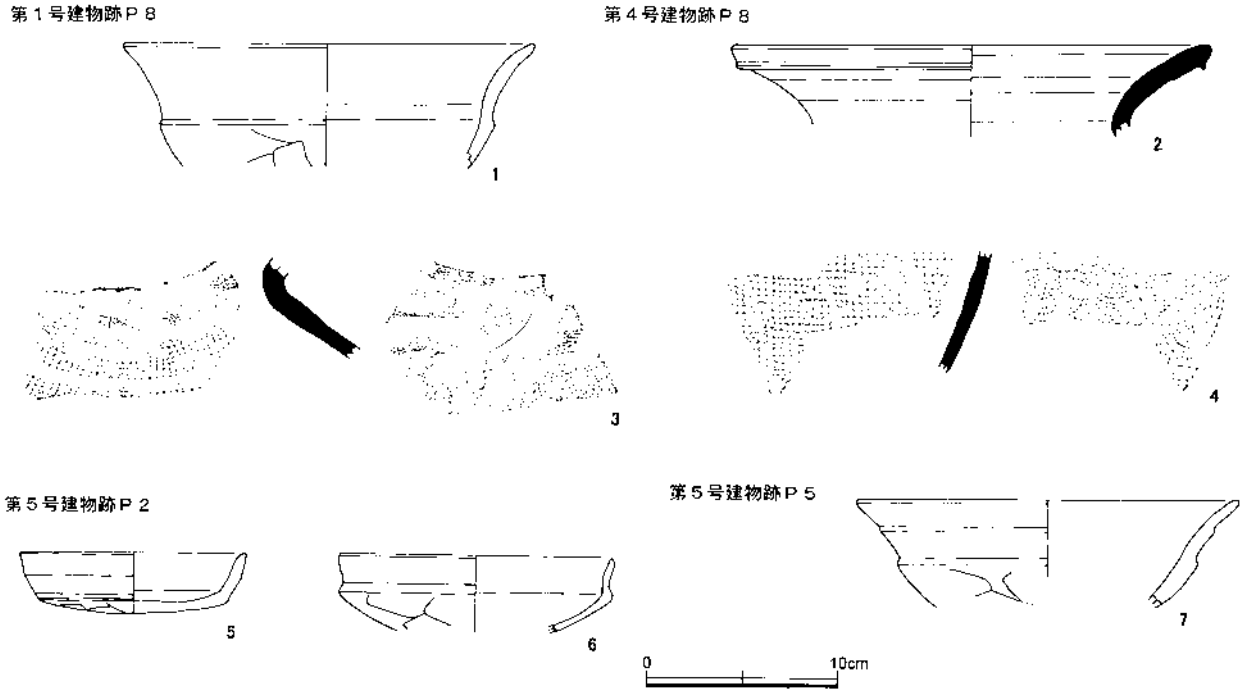
第33図　第４号掘立柱建物跡

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	H	鉢	(21.6)			ＡＢＣＥＩ	普	橙	10%	
2	S	甕	(25.0)			ＡＣＤＨ	普	灰		
3	S	甕				ＡＣＤＨ	普	灰		
4	S	甕				ＡＣＤＨ	普	灰		
5	H	坏	(11.8)	3.2		ＡＢＣＥ	普	灰橙	40%	
6	H	坏	(14.2)			ＡＢＣＥＩ	普	橙	15%	
7	H	鉢	(20.0)			ＡＢＣＥＩ	普	橙	5％	

第17表　掘立柱建物跡出土遺物観察表



第34図　第５号掘立柱建物跡



第35図　掘立柱建物跡出土遺物

4　円形周溝遺構

第１号円形周溝遺構（第36・37図、第18表）

調南区南東部に位置し、第14号竪穴建物跡を切る。第２号円形周溝遺構とほぼ同位置であるが、わずかに大きく、第２号円形周溝遺構の周溝を切る。周溝の中心間距離6.5～6.7mの円形で、溝は幅40～50cm、確認面からの深さ15～20cmを測る。

周溝内から、直径20～30cm程度のピットが８基確認された。確認面からの深さは、Ｐ１が46cm、Ｐ２が24cm、Ｐ３が48cm、Ｐ４が19cm、Ｐ５が58cm、Ｐ６が68cm、Ｐ７が76cm、Ｐ８が44cmを測る。

Ｐ１、Ｐ３内には、胴下半と半完形の土師器甕が、それぞれ正位に埋納された状態で出土した。第37図２はＰ１から出土した胴下半のもの、３はＰ３から出土した半完形のものである。土器内の内容物を分析した結果、リン及びカルシウム含有量が多く、骨質物が入っていた可能性が高いといえる（付編参照）。

遺構の時期は、６世紀後半～７世紀と推定される。

第２号円形周溝遺構（第36図）

調査区南東部に位置する。第１号円形周溝遺構とほぼ同位置であるが、わずかに小さく、第１号周溝遺構の周溝に切られる。周溝の中心間距離5.4～5.7mの円形で、溝は幅40～45cm、確認面からの深さ15～20cmを測る。

周溝内から、直径15～40cm程度のピットが６基確認された。確認面からの深さは、Ｐ９が87cm、Ｐ10が33cm、Ｐ11が97cm、Ｐ12が19cm、Ｐ13が53cm、Ｐ14が97cm、Ｐ15が94cmを測る。Ｐ９・11・14・15は、溝底面からの深さが70cm以上を測り、ほぼ等間隔に並ぶことから、主柱穴と考えられる。ピット内には遺物がほとんど認められなかった。

遺構の時期は、６世紀後半～７世紀と推定される。

5　土坑

第１号土坑（第38図、第40図１、第19表）

調査区北部に位置する。平面形態は長方形で、長軸１m以上、短軸0.7mを測る。主軸方位は、ほぼ正方位である。確認面からの深さは40cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

図示できた遺物は、第40図１の滑石製臼玉である。

6　溝

第１号溝（第39図）

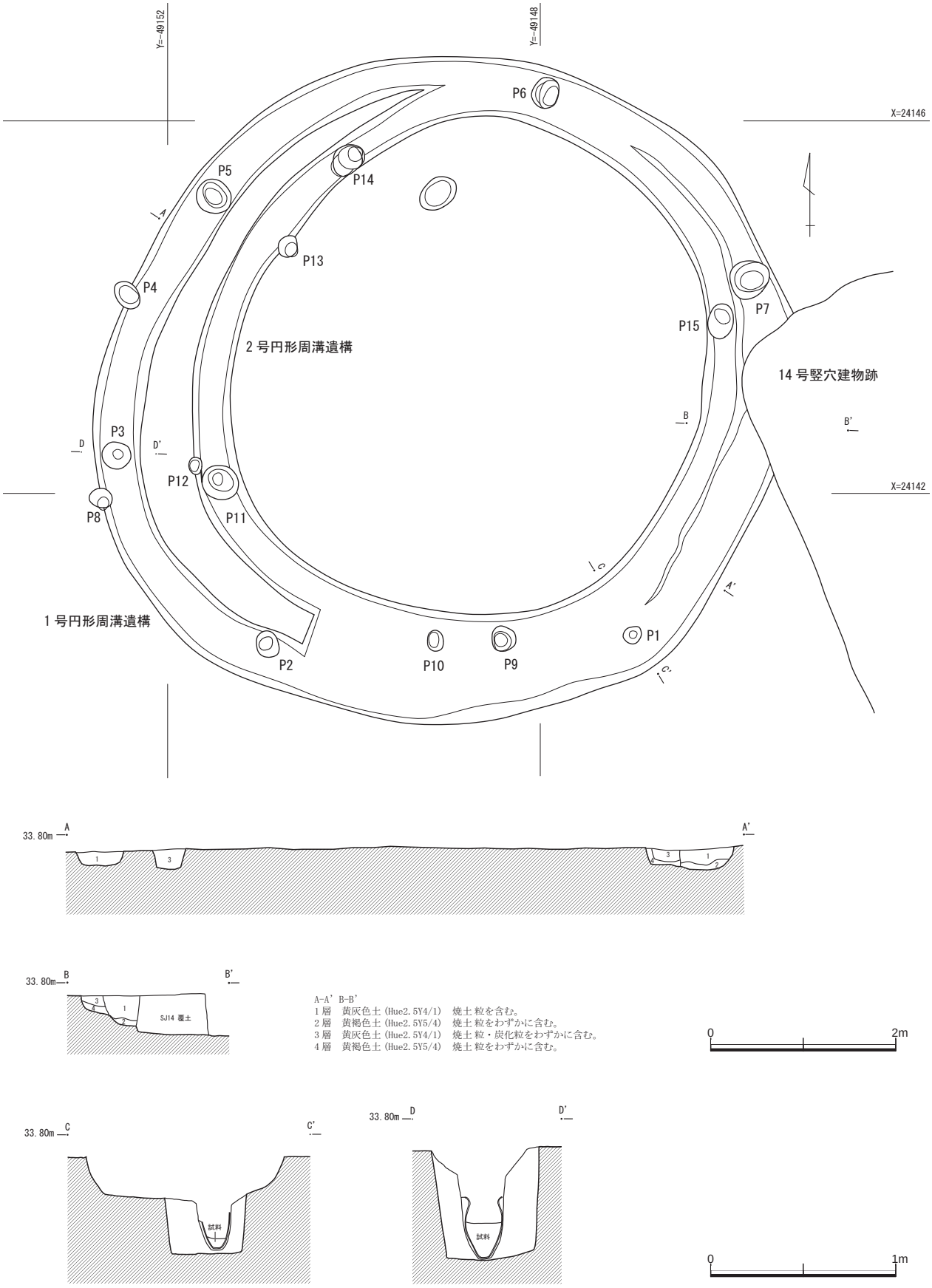
調査区北部に位置する。南北に走り、主軸方位は正方位である。幅30cm、掘り込みの深さは15cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

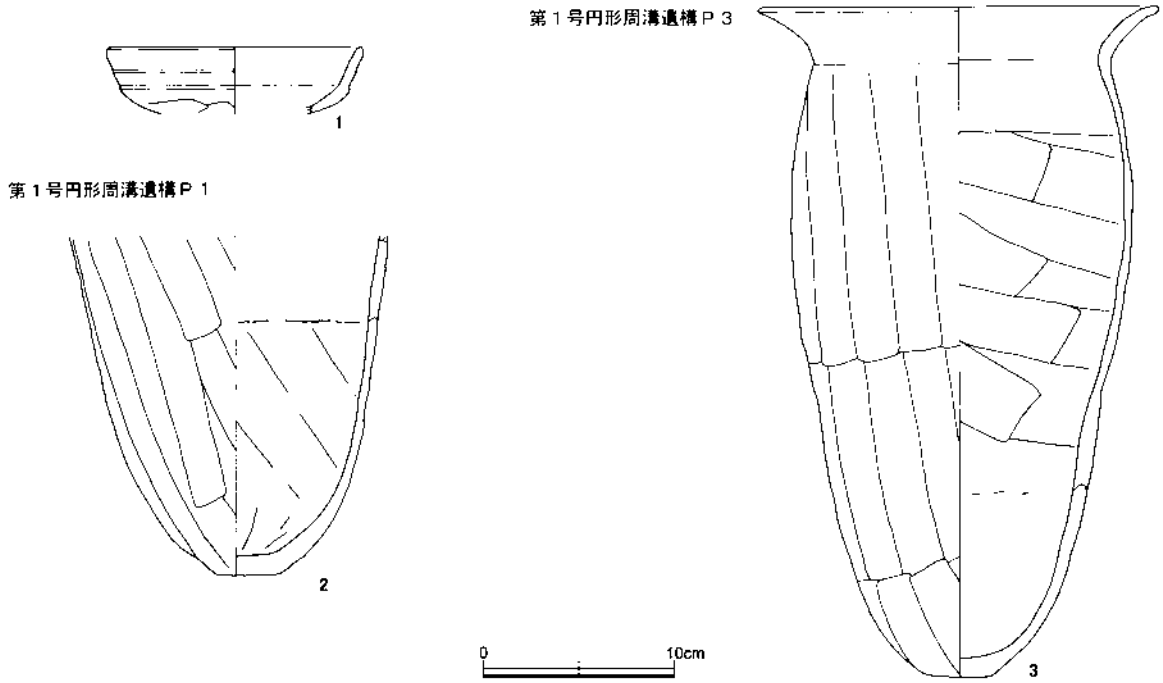
第２号溝（第39図）

調査区北部に位置する。南北に走り、主軸方位はN－10°－Wである。幅30cm、掘り込みの深さは15cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。



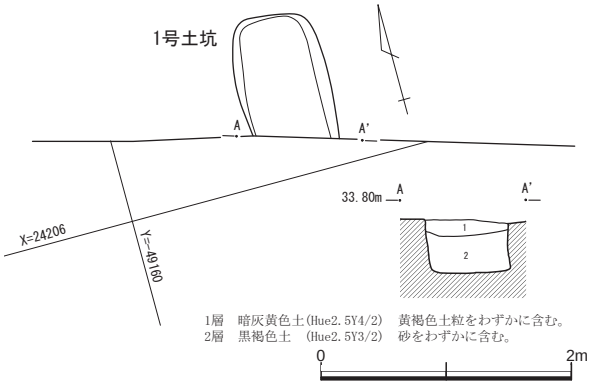
第36図　第１・２号円形周溝遺構



第37図　円形周溝遺構出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	H	坏	(13.2)			ＡＢＣＥＨＩ	普	橙	20%	
2	H	甕			3.2	ＡＢＣＤＥＨ	普	にぶい赤褐	50%	
3	H	甕	20.8	35.5	3.0	ＡＢＣＤＥＨ	普	にぶい赤褐	95%	

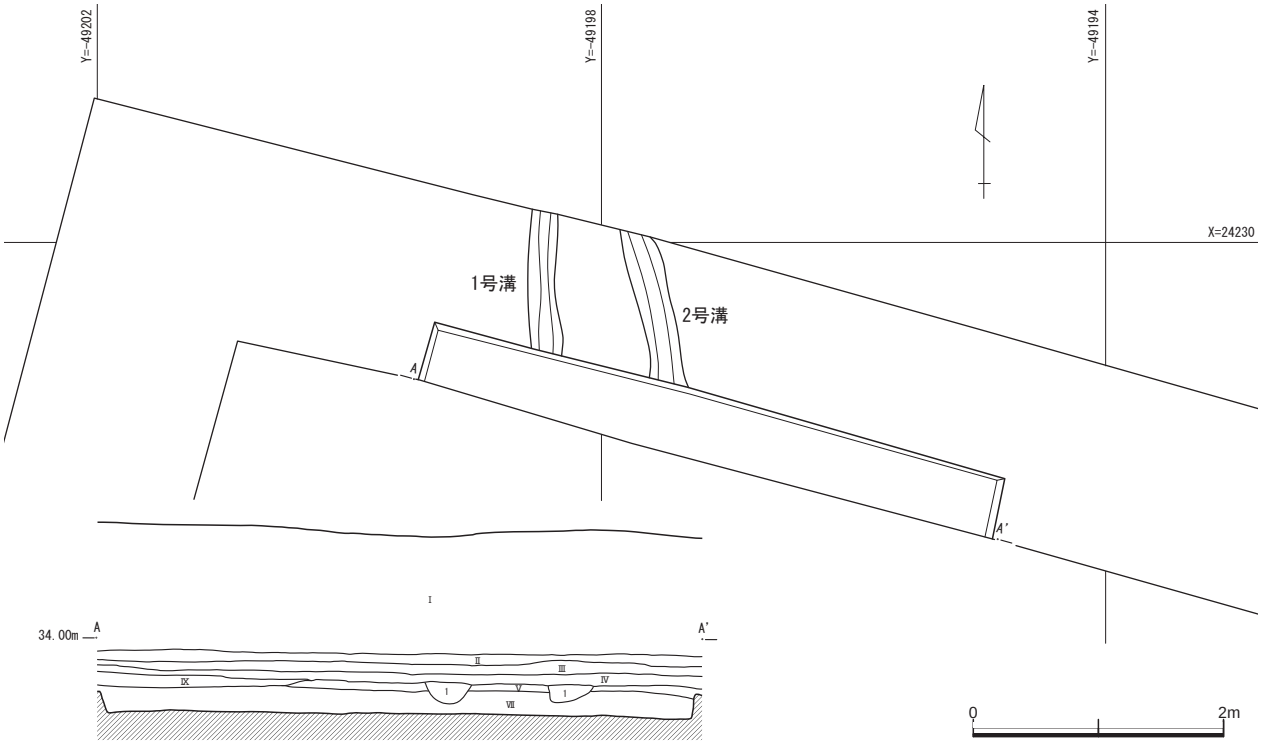
第18表　円形周溝遺構出土遺物観察表



第38図　第１号土坑

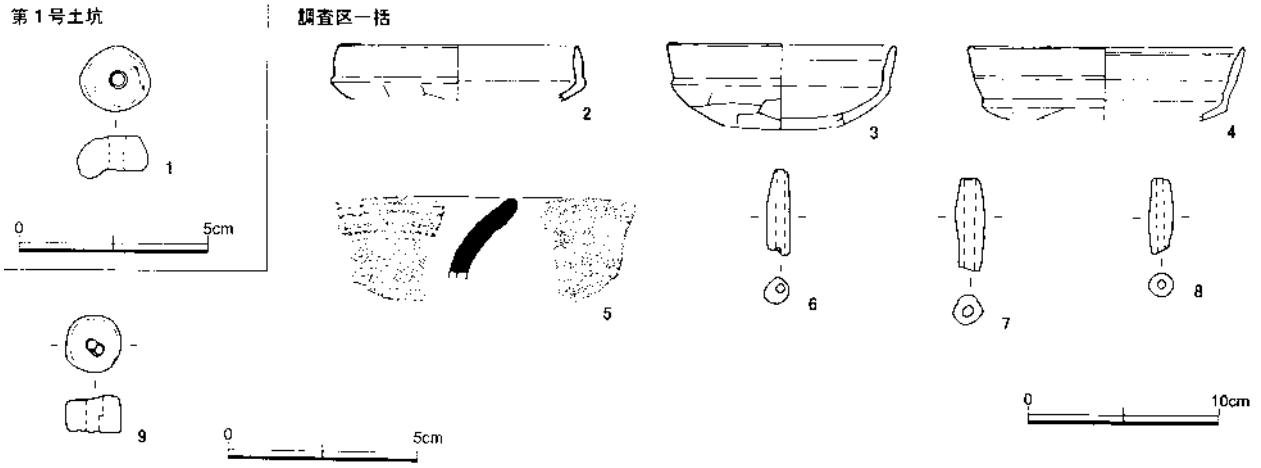
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1		臼玉	長1.7	幅1.9	厚0.9	石材　滑石				重さ　3.84ｇ　第１号土坑出土
2	H	坏	(12.6)			ＡＢＣＥ				
3	H	坏	(11.8)	(4.5)		ＡＢＣＥＨＩ	普	にぶい赤褐	20%	
4	H	坏	(14.5)			ＡＢＣＥ	普	橙	25%	

第19表　土坑・調査区出土遺物観察表(1)



Ⅳ層　黒褐色土(Hue2.5Y3/2)　焼土粒・炭化粒をわずかに含む。
1層　黄灰色土(Hue2.5Y4/1)　焼土粒・炭化粒をわずかに含む。
細かい土器片をやや多く含む。

第39図　第１・２号溝



第40図　土坑・調査区出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
5	S	甕				ＡＣＤＨ	普	青灰		
6		土錘		幅1.3	厚1.4					重さ　8.17ｇ
7		土錘	長4.8	幅1.6	厚1.6					重さ　9.31ｇ
8		土錘		幅1.2	厚1.2					重さ　6.2ｇ
9		臼玉	長1.5	幅1.5	厚1.0	石材　滑石				重さ　3.34ｇ

第20表　土坑・調査区出土遺物観察表(2)

Ⅳ　調査のまとめ

１　遺構の分布状況について

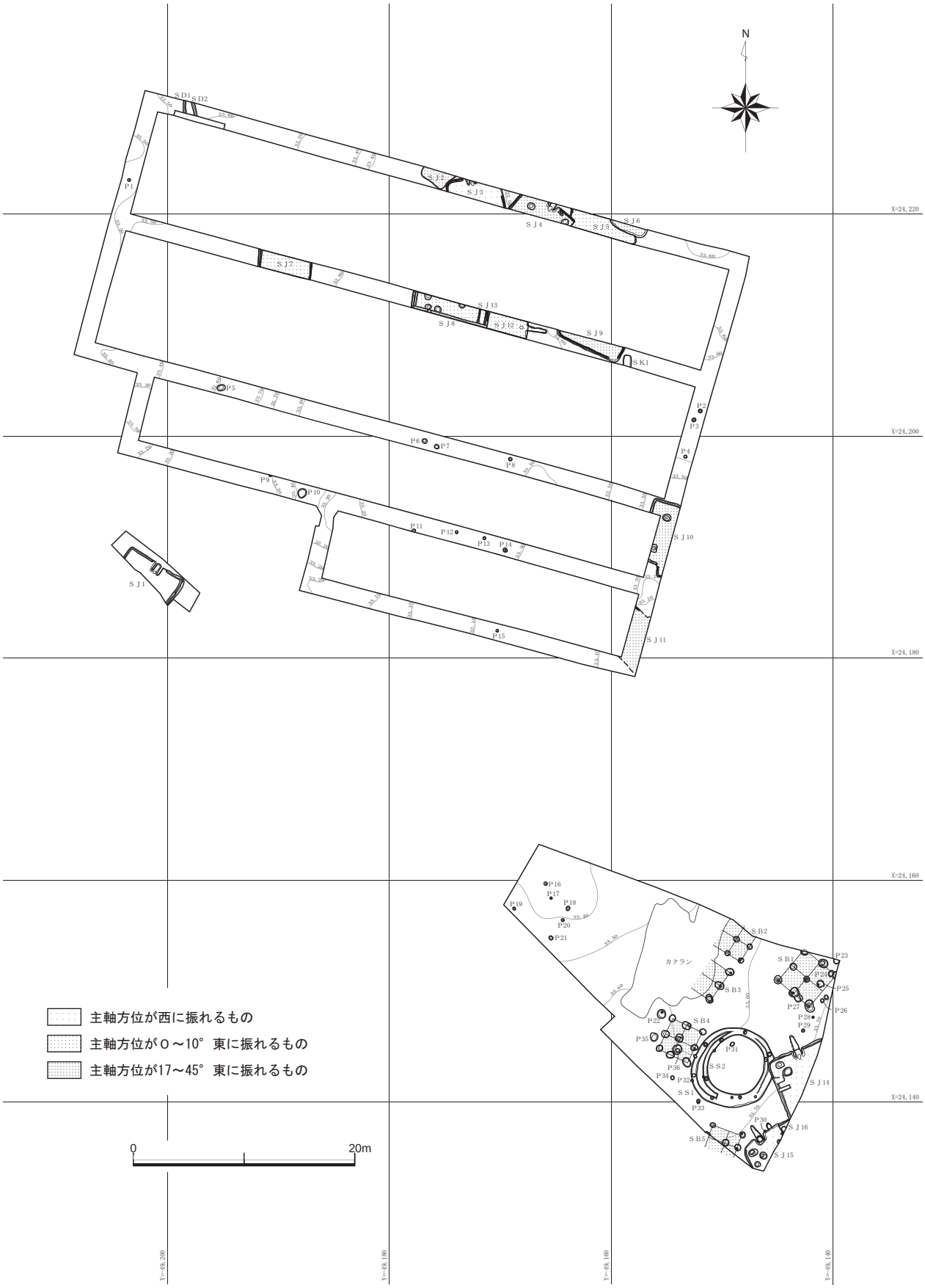
前章まで述べてきた通り、今回の調査では竪穴建物跡16棟、掘立柱建物跡５棟、円形周溝遺構２基、土坑１基、溝２条等が確認された。遺構は６～７世紀にかけてのものが主体で、第１号竪穴建物跡を除いて６世紀後半以降のものと推定される。

６世紀前半の第１号竪穴建物跡を除いて、遺構群は帯状に分布している。主軸方位からは３群に分けられる（第41図）。主軸が西に振れるものは第３・14～16号竪穴建物跡で、調査区南東部に多い。主軸方位が０～10°東に振れるものは第５・７・８・12・13号竪穴建物跡で、調査区北部に多い。主軸方位が17～45°東に振れるものは第２・４・６・９～11号竪穴建物跡、第１～５号掘立柱建物跡で、調査区中央部から北部の竪穴建物跡と南東部の掘立柱建物跡に多い。掘立柱建物跡は全てこの一群に含まれる。時期差が全て主軸方位に反映している状況ではないと思われるが、南東部においては、竪穴建物跡と掘立柱建物跡の主軸方位が大きく異なっており、竪穴建物域から掘立柱建物域への変化を推定しうる。なお、掘立柱建物跡と円形周溝遺構の位置は重なっておらず、第４号掘立柱建物跡は近接するものの、掘立柱建物は円形周溝遺構の位置を避けるように配置されている。第１号円形周溝遺構は、第14号竪穴建物跡を切っており、掘立柱建物域に伴う遺構である可能性が高い。

２　円形周溝遺構について

今回の調査では、ほぼ同位置に構築される円形周溝遺構が２基確認されたことが特筆できる。同種の遺構は、古墳時代中～後期を主とし、群馬県や埼玉県、栃木県を中心に確認されている。新しいものでは、７世紀後半のもので深谷市幡羅遺跡、栃木県の西下谷田遺跡、８世紀初頭のもので深谷市百済木遺跡といった官衙や居宅で検出例がある。古墳時代のものについては論考があり（村上1993、大塚1996）、その多くは円形平地式建物と推定される。類例のうち黒井峯遺跡の事例のように、火山灰により埋もれた状態で確認されたものもあり、構造を考える上で興味深い。黒井峯遺跡Ｃ－147平地式建物は、直径2.9mの草壁、側柱構造で、幅20cm、深さ20cmの溝の中に、直径６～８cmの丸材が30～40cm前後の間隔で立てられている。また雨落ち溝を持つ。須恵器の瓹、提瓶、横瓶等が出土しており、液体に関する性格が強く、作業小屋とみられる（石井他1990）。同様に火山災害を受けた遺跡である西組遺跡や中筋遺跡では、「円形平地式建物」について、竈屋や納屋、作業小屋といった捉え方がされている（大塚1996）。

本遺跡の事例は、周溝の中心間距離が第１号円形周溝遺構が6.5～6.7m、第２号円形周溝遺構が5.4～5.7mと大きく、また、溝の幅は40～50cmと幅広い。溝内には複数のピットがある。第２号円形周溝遺構では、４基がほぼ等間隔で並び、溝底面からの深さは70cm以上を測る。上部構造の主柱穴の可能性が高く、円形平地式建物跡と捉えられよう。また、第１号円形周溝遺構の周溝内ピット２基からは、残存率の高い土師器甕が埋納された状態で出土しており、特徴的である。土器内の内容物分析では、骨質物が入っていた可能性が高い（付編参照）。第１号円形周溝遺構と第２号円形周溝遺構は直径は異なるが、ほぼ同位置に構築される。一部重複し、前者が後者の周溝を切る。切り合いは溝の縁辺に限られ、中心には及んではいない。第１号円形周溝遺構は、主柱穴が明確な第２号円形周溝遺構に伴う雨落ち溝である可能性も考えられる。しかし、周溝の形態は第１・２号とも同じであり、同種の遺構において、主柱穴は必ずしも明確ではないと思われることから、同位置で建て替えが行なわれた可能性が高い。建物の性格や用途については、総柱建物群域の一角に建てられていたことを考慮すると、収納施設で



第41図　建物群の主軸方位

あった可能性が考えられる。しかし、これについては明確ではなく、溝内のピットに骨質物を埋納している可能性があることが何らかの示唆を与えてくれる。今後の類例の増加に期待したい。

3　高畑遺跡周辺の動向

高畑遺跡は広大な範囲に及んでいるが、確認面まで深いこともあり、これまでほとんど本調査が行なわれず、遺跡の状況は明らかではなかった。一方、周辺にある唐沢川西岸の森下遺跡、戸森松原遺跡、戸森前遺跡、皿沼西遺跡等は調査が行なわれており、周辺の状況が明らかになりつつある。それらの遺跡からは、古墳時代前･中期の竪穴建物跡が多数確認されているが、後期、特に６世紀中頃までに属するものは非常に少ない。今回の調査区はそれと同じ傾向を示している。ただし、高畑遺跡については、広大な範囲の内わずかな面積の調査が行なわれたに過ぎないため、今後注意深く調査する必要がある。

古墳時代後期になると、上敷免遺跡を始めとする唐沢川東岸で集落が大規模化しており、唐沢川西岸との対比が顕著である。７世紀になると、上敷免遺跡及びその周辺で大規模化した集落のほとんどは縮小していき、それより東部の宮ヶ谷戸遺跡、東川端遺跡、清水上遺跡等、後に幡羅郡家が造営される場所の近辺にある集落の規模が拡大する。そうした集落の動きがある前後の時期に、高畑遺跡の集落が充実していくことが確認されたことは、律令期に至るまでの開発と集落の動きを考える上で、重要な成果と言える。

今回の調査では、竪穴建物群の他に、５棟の総柱式掘立柱建物跡が確認されている。遺構の時期は明確ではないが、出土遺物や位置関係から、その他の遺構群と時期は大きく隔たらないものと思われる。小規模な倉庫群を複数伴うことは、居宅的様相を呈しており、該期において、唐沢川西岸域が再び大きく開発されることが考えられる。高畑遺跡では、８・９世紀になると、竪穴建物跡等は確認されていないが、約500m南の森下遺跡では、条里の一部と推定される遺構や竪穴建物跡､掘立柱建物跡等が多く確認されるようになる。こうした動きの先駆けとして高畑遺跡の集落を捉えることもでき、今後更に注意深く調査することの必要性を感じる。

最後に改めて、この発掘調査に深いご理解とご協力を頂いた株式会社新吉をはじめ､高畑遺跡の発掘作業、整理作業に携わり、文化財を記録保存して後世に残すことにご尽力頂いた皆様に敬意を表したい。

〈参考文献〉

石井克己他　1990　『黒井峯遺跡発掘調査報告書』子持村文化財調査報告書第11集
板橋正幸他　2003　『西下谷田遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第273集
大塚昌彦　1996　「円形平地式建物について」『土曜考古』第20号
大屋道則　1994　『清水上遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第152集
劔持和夫　1995　『森下・戸森松原・起会』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第148集
澤出晃越　1985　『上敷免遺跡（第２次）／上敷免北遺跡』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第11集
澤出晃越　1990　『上敷免遺跡（第３次～第６次）／上敷免北遺跡（第３次)』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第26集
瀧瀬芳之他　1990　『東川端遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第94集
瀧瀬芳之他　1993　『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第128集
田中広明　1994　『新屋敷東・本郷前東』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第111集

知久裕昭他　2000 『皿沼西／堀南』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第62集
知久裕昭　2000 『宮ヶ谷戸遺跡（第３次)』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第63集
知久裕昭　2003 『八日市遺跡』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第68集
知久裕昭　2005 『森下遺跡』埼玉県深谷市埋蔵文化財調査報告書第73集
中村倉司　1999 『岡部条里／戸森前』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第217集
中山浩彦　1995 『宮ヶ谷戸／根岸／八日市／城西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第172集
西口正純　1994 『矢島南遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第149集
村上泰司　1993 「環形囲繞遺構小考－古墳時代における集落内施設の一様相－」『土曜考古』第17号
村松　篤　2003 『百済木遺跡』川本町遺跡調査会報告書第８集

付編　土器内の内容物分析

藤根　久（パレオ・ラボ）

１．はじめに

深谷市高畑遺跡第２次調査では、７世紀前半に相当する直径５－６m程度の円形周溝遺構が検出され、２カ所から土器２個体が出土した。ここでは、この土器内の土壌対象として、その内容物を調べるために、無機成分のリンとカルシウム含有量等を調べた。

２．試料と方法

試料は、土器内の残留土壌２試料であり、いずれも砂混じり粘土である（表１）。

各試料は、100g程度を取り出し0.25mm篩を用いて水洗篩分けし、残渣を実体顕微鏡によって観察した。また、藻塩法による塩に伴う珪藻化石群集などを調べるために珪藻化石観察用のプレパラートを作成した。プレパラートは、砂粒とコロイドを取り除いて封入剤マウントメディアで封入して作成し、光学顕微鏡を用いて倍率300倍で全面を検鏡した。

リン・カルシウム分析用の試料は、適量を乳鉢で軽く粉砕し、油圧プレスを用いて20トンプレスし測定用ブリケットを使用した。分析は、リン（Ｐ）濃度の高い位置を元素マッピング分析により検出し、５カ所について点分析を行った。測定は、Ｘ線分析顕微鏡（㈱堀場製作所製ＸＧＴ-5000TypeⅡ）を用いた。元素マッピングの測定条件は、Ｘ線導管径100μm、電圧50KV、電流自動設定、測定時間10,000secである。点分析の測定条件は、Ｘ線導管径100μm、電圧50KV、電流自動設定、測定時間500secである。定量計算は、標準試料を用いないファンダメンタルパラメータ法（ＦＰ法）で半定量分析を行った。

表１　分析試料

分析№	遺　　構	色　　調	堆積物
1	円形周溝ＳＳ１Ｐ１	にぶい黄色（2.5Ｙ 6/4）	砂混じり粘土
2	円形周溝ＳＳ１Ｐ３下部	にぶい黄色（2.5Ｙ 6/4）	砂混じり粘土

３．結果

以下に0.25mm篩残渣の特徴、珪藻化石群集の特徴、リン・カルシウム分析の結果について述べる。

［ＳＳ１ Ｐ1］

0.25mm篩残渣の実体顕微鏡観察では、褐鉄鉱および褐鉄鉱が付着した粘土粒子が多く、やや赤化した焼土塊（２mm以下）が少量含まれていた。また、炭化？木材小片と炭化？種実類が少量含まれていた。なお、骨質と思われる残留物は全く見られなかった。

珪藻プレパラートの観察では、陸域指標種群*Hantzschia amphioxys*が特徴的に多く出現し、沼沢湿地付着生指標種群*Eunotia pectinalis* var.*undulata*など沼沢湿地環境を伴うことから、沼沢湿地を伴うジメジメとした陸域環境が推定される（表２）。その他の粒子では、イネ科タケまたはササ類のプラント・オパール化石が含まれていた。

表２　土壌中の珪藻化石産出表（指標種群は主に安藤（1990）による）

分　類　群	種群	P1	P3
Coscinodiscus spp.	?	1	-
Caloneis lauta	W	1	1
Cocconeis placentula	W	1	-
Cymbella turgidula	K	3	1
Diploneis finnica	W	1	-
D. spp.	?	-	1
Epithemia turgida	W	3	2
E. zebra	W	1	-
Eunotia formica	W	1	1
E. pectinalis var.undulata	O	-	1
E. praerupta var.bidens	O	1	-
E. spp.	?	1	-
Gomphonema augur	W	2	1
G. olivaceum	W	-	1
G. parvulum	W	1	-
G. spp.	?	3	1
Hantzschia amphioxys	Q	64	32
Navicula elginensis	O	-	1
N. mutica	Q	1	1
N. spp.	?	1	-
Pinnularia borealis	Q	6	3
P. spp.	?	7	3
Stauroneis phoenicenteron	O	1	1
S. smithii	W	1	-
Stephanodiscus astraea	W	1	-
Synedra ulna	W	7	6
Unknown	?	3	-
海水不定・不明種（？）		1	-
中～下流性河川　（K）		3	1
沼沢湿地付着生　（O）		2	3
陸　域　（Q）		71	36
広　布　（W）		20	12
淡水不定・不明種（？）		15	5
珪　藻　殻　数		112	57

なお、海水種の*Coscinodiscus*属が１個体検出されているが、藻塩法による塩に伴う藻場指標種群の珪藻化石（藤根・服部2000）は検出されなかった。

リン・カルシウム分析では、測定面上４カ所においてリン（P_2O_3）およびカルシウム（CaO）の高い場所が検出された（表３）。高い位置では、リン（P_2O_3）が11.59-14.88%、カルシウム（CaO）が13.70-20.48%であった（図１）。

［ＳＳ１ Ｐ３ 下部］

0.25mm篩残渣の実体顕微鏡観察では、褐鉄鉱および褐鉄鉱が付着した粘土粒子が多く含まれていた。また、植物根がやや多く含まれていた。なお、骨質と思われる残留物は全く見られなかった。

珪藻プレパラートの観察では、陸域指標種群*Hantzschia amphioxys*が特徴的に多く出現し、沼沢湿地付着生指標種群*Eunotia praerupta* var.*bidens*などを伴うことから、沼沢湿地を伴うジメジメとした陸域環境が推定される。その他の粒子では、イネ科タケまたはササ類のプラント・オパール化石が含まれていた。なお、藻塩法による塩に伴う藻場指標種群の珪藻化石（藤根・服部2000）は検出されなかった。

リン・カルシウム分析では、測定面上１カ所においてリン（P_2O_3）およびカルシウム（CaO）の高い場所が検出された。高い位置では、リン（P_2O_3）が3.09%、カルシウム（CaO）が2.73%であった（図２）。

４．考察

生物の骨や歯を構成する主要な無機成分は、水酸燐灰石（ハイドロキシアパタイト：$Ca_5(OH)(PO_4)_3$）からなり、リンとカルシウムがほぼ等量含まれている。ただし、成分から人間であるか否かは特定できない。

一般的に、土壌中においてリンは少なく、カルシウムは長石類中に普通に含まれる元素である。なお、貝殻は方解石や霞石（化学組成は、ともに$CaCO_3$）からなるため、リンは含まれていない。

土壌中の分析値から、骨成分が残存しているかどうかの判定は、両元素の含有量がほぼ等量で周辺土壌の値に対して高いことが必要である。両元素が少なくとも周辺土壌（地山）の含有量より高い値であることが条件と考える。

以上のことから、ＳＳ１のＰ１（分析№１）では、複数カ所においてリン（P_2O_3）およびカルシウム（CaO）の高い場所が検出されたことから、骨成分が含まれている可能性が高い。また、ＳＳ１のＰ３下部（分析№２）においても１カ所において、リン（P_2O_3）およびカルシウム（CaO）の比較的高い場所が検出されたことから、骨成分が含まれている可能性が考えられる。

なお、いずれも沼沢湿地を伴うジメジメとした陸域環境が推定され、遺構放棄後の埋積過程において周辺土壌が堆積したことが推定されることから、二次的に混入したことも否定できない。

表３　蛍光Ｘ線による点分析結果（単位％）

遺構	点№	MgO	Al_2O_3	SiO_2	P_2O_5	K_2O	CaO	TiO_2	Cr_2O_3	MnO	Fe_2O_3	NiO	CuO	ZnO	Rb_2O	ZrO_2	Y_2O_3	ZrO_2	total
ＳＳ１Ｐ１	1	1.64	15.25	48.74	14.88	1.07	13.70	0.46	0.01	0.08	4.09	0.00	0.02	0.00	0.00	0.04	0.00	0.02	99.98
	2	1.63	13.29	42.38	14.02	0.97	20.48	0.61	0.03	0.15	6.39	0.00	0.01	0.00	0.00	0.03	0.01	0.01	100.00
	3	2.95	16.89	64.76	1.18	2.00	2.69	0.92	0.03	0.12	8.35	0.02	0.01	0.02	0.01	0.02	0.00	0.02	99.97
	4	1.81	13.39	48.20	11.59	1.16	14.34	1.02	0.03	0.23	8.12	0.02	0.02	0.01	0.01	0.02	0.01	0.03	99.98
	5	2.51	16.71	68.01	0.41	1.73	1.59	0.81	0.03	0.12	7.97	0.01	0.02	0.01	0.01	0.02	0.00	0.02	99.96
ＳＳ１Ｐ３	1	2.81	16.97	60.14	3.09	1.89	2.73	1.04	0.05	0.37	10.81	0.02	0.02	0.02	0.01	0.02	0.00	0.02	99.99
	2	0.98	22.06	62.62	0.28	0.85	9.13	0.52	0.02	0.15	3.33	0.01	0.00	0.00	0.01	0.04	0.00	0.02	100.00
	3	2.80	17.25	65.46	0.20	1.85	2.49	1.78	0.03	0.19	7.86	0.01	0.01	0.02	0.01	0.02	0.01	0.02	99.99
	4	2.53	17.24	63.35	0.13	1.89	2.69	1.56	0.02	2.13	7.73	0.02	0.01	0.02	0.01	0.03	0.01	0.66	99.37
	5	3.43	16.24	65.18	0.33	1.71	1.98	0.96	0.03	0.67	9.37	0.02	0.01	0.01	0.01	0.02	0.01	0.02	99.98
最小値		0.98	13.29	42.38	0.13	0.85	1.59	0.46	0.01	0.08	3.33	0.00	0.00	0.00	0.00	0.02	0.00	0.01	
最大値		3.43	22.06	68.01	14.88	2.00	20.48	1.78	0.05	2.13	10.81	0.02	0.02	0.02	0.01	0.04	0.01	0.66	
平均値		2.31	16.53	58.88	4.61	1.51	7.18	0.97	0.03	0.42	7.40	0.01	0.01	0.01	0.01	0.03	0.01	0.08	

５．おわりに

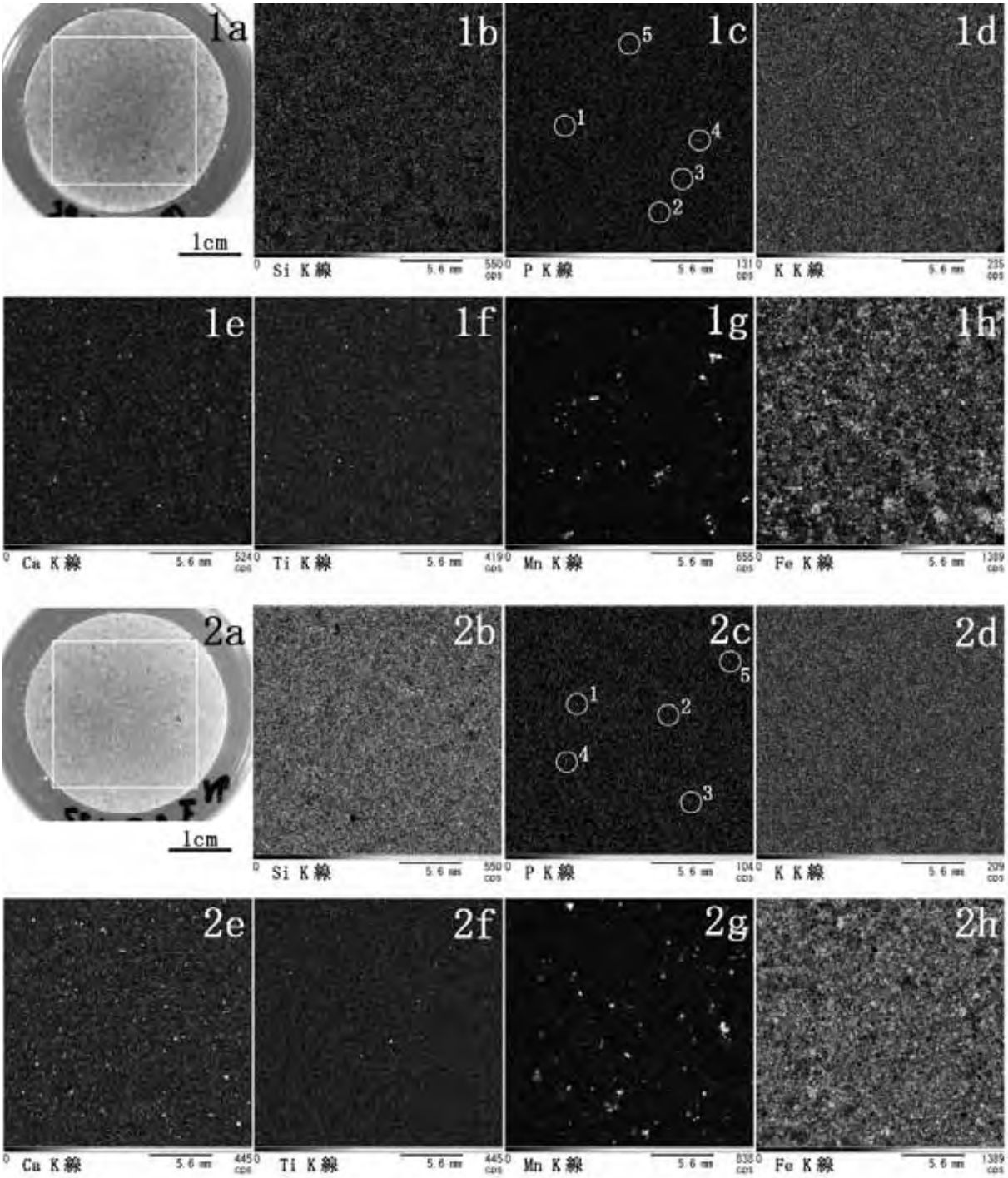
水洗篩い分けした残渣や珪藻観察用プレパラートの顕微鏡観察、リン・カルシウム分析を行った。水洗篩い分け残渣の顕微鏡観察では、褐鉄鉱などの粒子が含まれていた。珪藻観察用プレパラートの観察では、沼沢湿地環境を示す珪藻化石が含まれていたが、藻塩法により作られた塩に伴う珪藻化石は確認されなかった。なお、骨質と思われる残留物は全く見られなかったが、蛍光Ｘ線によるリン･カルシウム分析では、試料ＳＳ１　Ｐ１（分析№１）では、リンおよびカルシウム含有量の高い値を示す位置が検出できた。これらは、リンおよびカルシウム含有量がともに高いことから、骨質物の可能性が高いことを示す。

ただし、いずれも珪藻化石から沼沢湿地を伴うジメジメとした陸域環境が推定され、遺構放棄後の埋積過程において周辺土壌が堆積したことが推定されることから、二次的に混入したことも否定できない。

引用文献

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用.東北地理，42，73-88.

藤根久・服部哲也（2000）密閉して出土した須恵器蓋杯内の内容物―塩利用の証拠―．日本文化財科学会第17回大会研究発表要旨集、116-117.

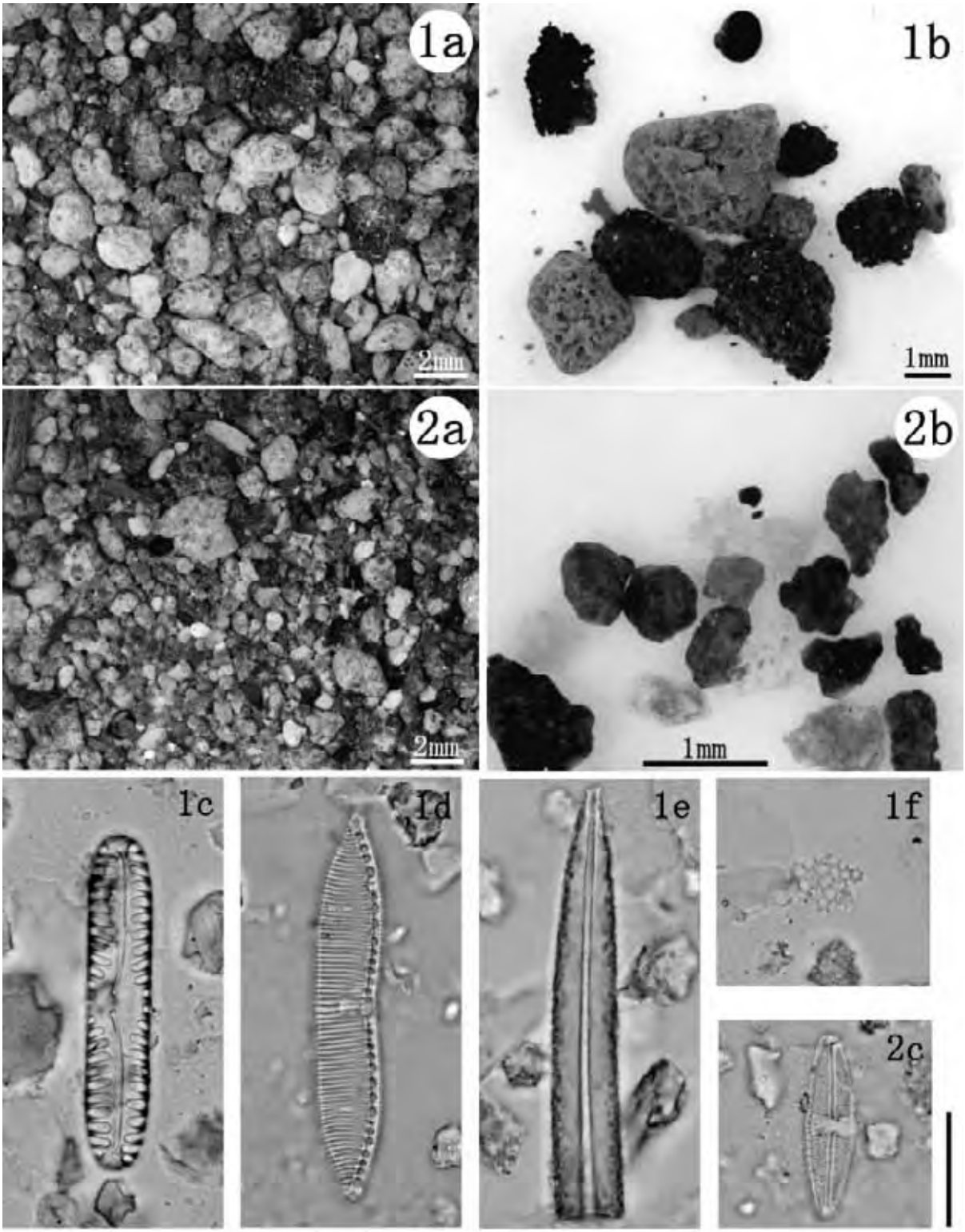


図版１　蛍光Ｘ線分析による元素マッピング図

（番号は分析№に対応、ａの赤枠はマッピング部分、Ｐ図に点分析位置を示す）

［元素記号］

Si:ケイ素, P:リン, K:カリウム, Ca:カルシウム, Ti:チタン, Mn:マンガン, Fe:鉄



図版２　試料と微化石類の顕微鏡写真（番号は分析№に対応、珪藻化石のスケール20μm）

１a．0.5mm残渣　１b．特徴的な粒子　２a．0.5mm残渣　２b．特徴的な粒子

１c．*Pinnularia borealis*　１d．*Hantzschia amphioxys*　１e．骨針化石

１f．*Coscinodiscus*属　２c．*Navicula mutica*

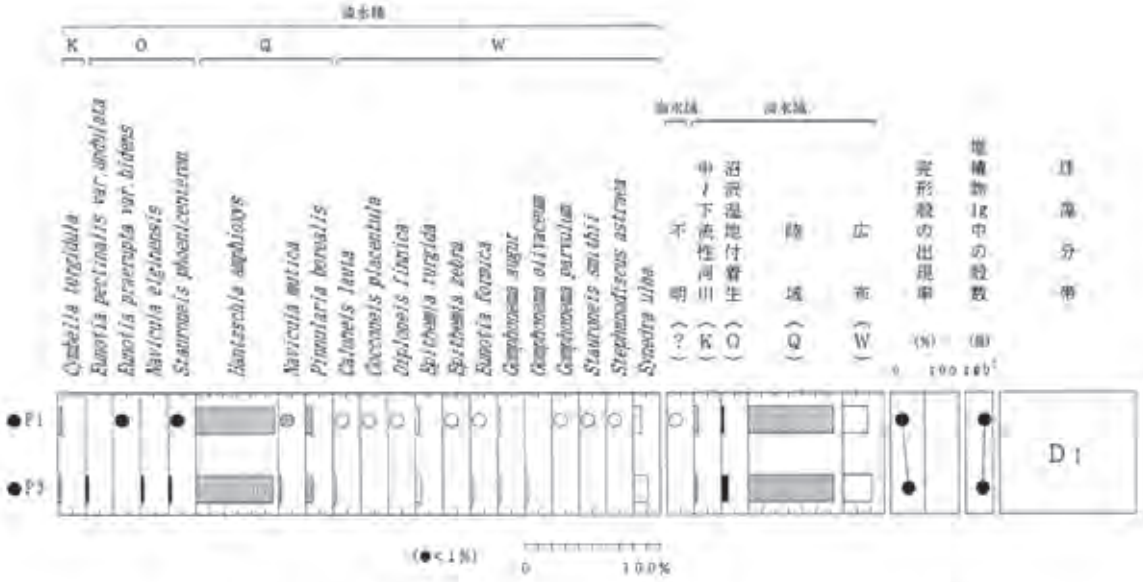


図１　土壌中の珪藻化石分布図（すべての分類群を表示）

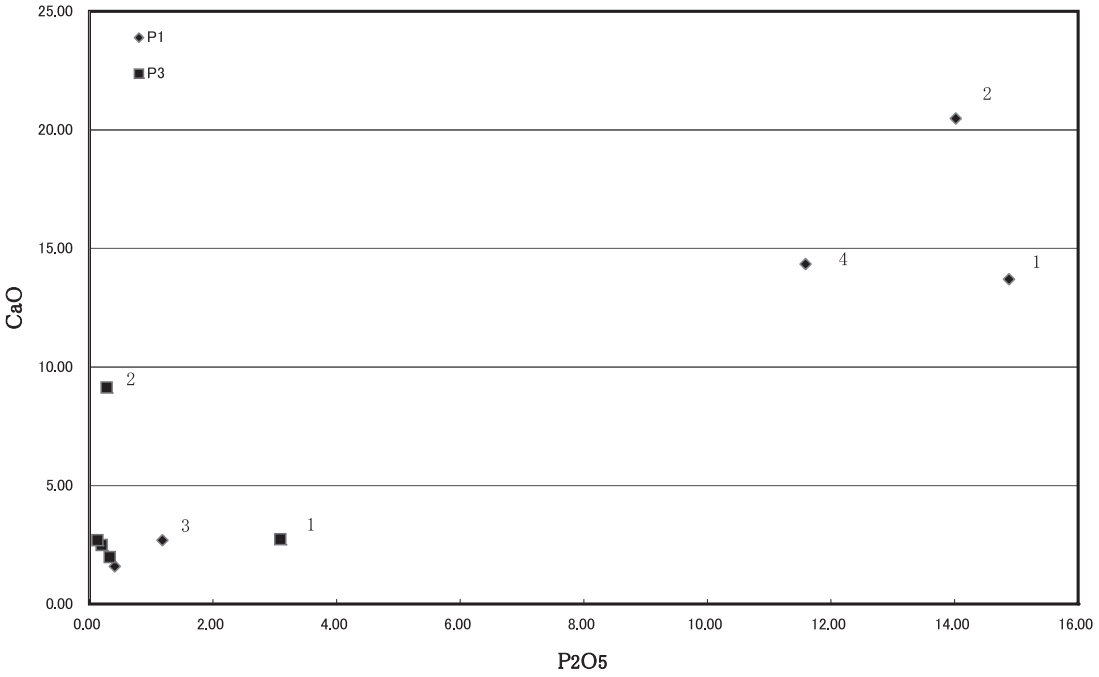


図２　蛍光Ｘ線による点分析のリン－カルシウム分布図

写 真 図 版

図版 1

第 1 号竪穴建物跡

第 1 号竪穴建物跡カマド

第 1 号竪穴建物跡土層断面

第 2 ～ 6 号竪穴建物跡

第 2 号竪穴建物跡

第 3 号竪穴建物跡

第 3 号竪穴建物跡カマド

第 4 ～ 6 号竪穴建物跡

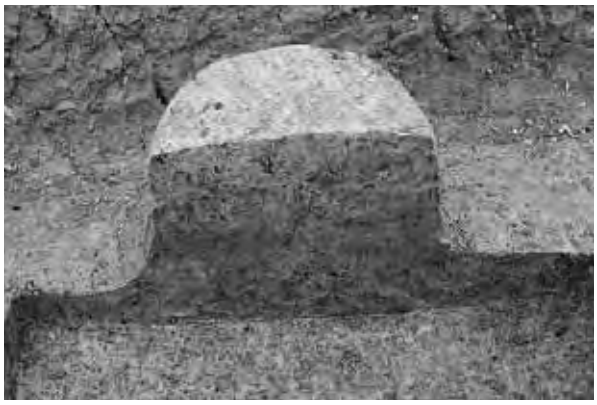
図版 2

第 4 号竪穴建物跡

第 4 号竪穴建物跡カマド、台状遺構

第 4 号竪穴建物跡カマド遺物出土状況

第 4 号竪穴建物跡台状遺構(1)



第 4 号竪穴建物跡台状遺構(2)

第 4 号竪穴建物跡貯蔵穴

第 5 ・ 6 号竪穴建物跡

第 7 号竪穴建物跡

第８・12・13号竪穴建物跡

第８・13号竪穴建物跡

第８号竪穴建物跡遺物出土状況

第８・12・13号竪穴建物跡土層断面

第12号竪穴建物跡カマド(1)

第12号竪穴建物跡カマド(2)

第９号竪穴建物跡

第10号竪穴建物跡

図版４

第10号竪穴建物跡Ｐ２

調査区南東部（東から）

調査区南東部（南から）

第14号竪穴建物跡(1)

第14号竪穴建物跡(2)

第14号竪穴建物跡カマド

第15・16号竪穴建物跡

第15号竪穴建物跡カマド

第16号竪穴建物跡カマド

第 1 号掘立柱建物跡

第 2 ・ 3 号掘立柱建物跡

第 2 号掘立柱建物跡

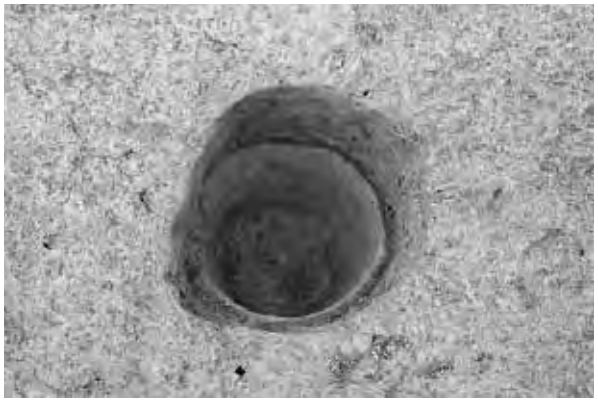
第 3 号掘立柱建物跡

第 4 号掘立柱建物跡

第 5 号掘立柱建物跡

第 1 ・ 2 号円形周溝遺構

図版 6



第１号円形周溝遺構Ｐ １(1)

第１号円形周溝遺構Ｐ １(2)

第１号円形周溝遺構Ｐ ３(1)

第１号円形周溝遺構Ｐ ３(2)

第１号土坑

第１・２号溝

調査風景(1)

調査風景(2)

第５図１（ＳＪ１）

第５図３（ＳＪ１）

第５図４（ＳＪ１）

第５図５（ＳＪ１）

第５図６（ＳＪ１）

第５図７（ＳＪ１）

第５図８（ＳＪ１）

第５図９（ＳＪ１）

第５図10（ＳＪ１）

第５図11（ＳＪ１）

第５図12（ＳＪ１）

第５図13（ＳＪ１）

第５図14（ＳＪ１）

第５図15（ＳＪ１）

第５図16（ＳＪ１）

第５図17（ＳＪ１）

第５図18（ＳＪ１）

第５図20（ＳＪ１）

図版８

第５図21（ＳＪ１）

第５図22（ＳＪ１）

第５図23（ＳＪ１）

第５図24（ＳＪ１）

第５図25（ＳＪ１）

第５図26（ＳＪ１）

第５図27（ＳＪ１）

第６図28（ＳＪ１）

第６図29（ＳＪ１）

第６図30（ＳＪ１）

第６図31（ＳＪ１）

第６図32（ＳＪ１）

第６図33－１（ＳＪ１）

第６図33－２（ＳＪ１）

第６図34（ＳＪ１）

第７図35（ＳＪ１）

第７図36（ＳＪ１）

第11図２（ＳＪ４）

第11図３（ＳＪ４）

第11図６（ＳＪ４）

第11図８（ＳＪ４）

第13図７（ＳＪ５）

第13図11（ＳＪ５）

図版 10

第13図14（ＳＪ５）

第13図15（ＳＪ５）

第14図１（ＳＪ６）

第16図６（ＳＪ７）

第16図９（ＳＪ７）

第18図１（ＳＪ８）

第18図５（ＳＪ８）

第18図８（ＳＪ８）

第18図11（ＳＪ８）

第18図14（ＳＪ８）

第18図16～19（ＳＪ８）

第18図20（ＳＪ８）

第22図１（ＳＪ９）

第22図２（ＳＪ９）

第22図３（ＳＪ９）

第22図６（ＳＪ９）

第22図７（ＳＪ９）

第22図８（ＳＪ９）

第22図10（ＳＪ９）

第22図12（ＳＪ９）

第22図13（ＳＪ９）

第22図14（ＳＪ９）

第22図15（ＳＪ９）

第24図１（ＳＪ10）

第20図３・４（ＳＪ13）

第27図１（ＳＪ14）

第27図２（ＳＪ14）

第27図５（ＳＪ14）

第27図７（ＳＪ14）

第27図11（ＳＪ14）

第27図13（ＳＪ14）

第27図19（ＳＪ14）

図版 12

第27図21（ＳＪ14）

第27図22（ＳＪ14）

第27図29（ＳＪ14）

第28図35～43（ＳＪ14）

第30図３（ＳＪ15）

第30図４（ＳＪ15）

第30図８（ＳＪ15）

第30図10（ＳＪ15）

第30図12（ＳＪ15）

第30図14（ＳＪ15）

第30図15（ＳＪ15）

第37図２（ＳＳ１）

第37図３（ＳＳ１）

第40図１・６～９（土坑・調査区）

報告書抄録

ふ り が な	たかばたけいせき（だい２じ）
書　　名	高畑遺跡（第２次）
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第 89 集
編 著 者 名	知久裕昭
編 集 機 関	深谷市教育委員会
所　在　地	〒366－0823　埼玉県深谷市本住町17－3　TEL　048－572－9581
発行年月日	2007（平成 19）年３月 30 日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡	北緯 (°　’　”)	東経 (°　’　”)	調査 期間	調査 面積	調査 原因
高畑遺跡（たかばたけいせき）	深谷市高畑（ふかやしたかばたけ） 字風原（あざかざはら）173～175番地	11218	004	36 21 67	139 28 65	20061121 ～ 20070112	900 ㎡	工場建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高畑遺跡	集落跡	古墳時代後期	竪穴建物跡　16棟 掘立柱建物跡　５棟 円形周溝遺構　２基 土坑　１基 溝　２条	石器 土師器 須恵器 石製品	多数の竪穴建物跡の他、総柱式掘立柱建物、円形周溝遺構を確認した。

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第89集

高 畑 遺 跡（第 2 次）

印　刷　　平成19年３月28日
発　行　　平成19年３月30日

発　　行　　埼 玉 県 深 谷 市 教 育 委 員 会